

---

# ポケットモンスター デスティニーエピソード1 ~憎しみを砕く絆~

absolute

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター デスティニーエピソード1 く憎しみを碎く絆

### 【Nコード】

N6307W

### 【作者名】

absolute

### 【あらすじ】

舞台はホウエン地方。とある町から物語は始まる……。

この物語の主人公「ハイク」は、故郷であるミシロタウンで母親と2人で暮らしていた。しかし、ある人物との出会いを機に平和な日常が崩れてしまう。

ホウエン地方の異変、凶暴化したポケモン、謎の組織の暗躍。そしてハイクの中に眠る「ポケモンと会話が出来る能力」の覚醒。

果たして、彼はホウエン地方の平和を取り戻す事は出来るの  
だろうか？

\*現在、第5章 連載中！

## プロローグ：起こりうる出来事（前書き）

初めまして。 absolute という者です。

初めて書く小説なので、読みにくい所もありますが、楽しんで頂けると嬉しいです。

\*ちなみにこのプロローグは、22部目を更新した後に投稿した物です。

## プロローグ：起こりうる出来事

薄暗い空間だった。

1人の少年が、目の前に存在する“何か”を、鋭い眼差しで睨みつけている。

彼の傍らには1匹のポケモンの姿が。しかし、そのポケモンは既に体中傷だらけで、今にも倒れてしまいそうな状態だ。体毛には乾いてしまった自らの血がこびりついており、その姿はまるで、ぼろ雑巾のようだった。

息を切らしながらも、まだ光を失っていない瞳を持つ少年の横には、また1人の青年の姿があった。

だが、彼のパートナーであるポケモンは、彼のすぐ近くで力尽きており、既に戦える姿ではなかった。

戦える力が残っていない。何もできない自分に怒りを抱きつつも、青年は自らの意思を隣にいる少年に委ねる。

目の前の“何か”を止めなければならぬ。止めなければ、自分達の明日も、罪のない人達の未来も、すべて失ってしまう。

しかし、少年の士気は弱まりつつあった。

「俺たちは……………」

少年がボソリと呟く。寿命がきてしまった電球のように、彼の瞳の輝きも弱まっていく。

既に、諦めかけていた……………。

——これは、起こりうる出来事。

これから始まる物語の、結末の一部の予言……………。

## プロローグ：起こりうる出来事（後書き）

一応、プロローグはこれで終わりです。いかがだったでしょうか？

こんな感じで書いていくので、これから宜しく願いいたします！

## 出会い（前書き）

プロローグは、これからの物語で起こる一場面を描いたものです。



## 出会い

ミシロタウン。ホウエン地方の一角にある町だ。ポケモントレーナーの出発点とも言える町で、決して大きな町とは言えないが、ホウエン地方を代表するポケモン博士 オダマキ博士 の研究所がある事で有名である。

そんな町からまた1人、ポケモントレーナーが誕生した。そのトレーナーは半年ほど前、ホウエンリーグを制覇する事に成功した。彼の名はハイク。あまり目立つタイプではないが、真面目で、困っている人を放ってはおけない性格から周囲の人々からは好かれている15歳の少年だ。ハイクは現在、ミシロタウンに母親と2人で暮らしている。

今、ハイクは家の2階にある自分の部屋でモンスターボールの整理をしていた。

「ハイク、そろそろ研究所に行かなくていいの？今日はポケモン達の健康診断の日でしょ？」

1階から母親の声が聞こえた。そう、今日はポケモン達の健康診断がある日なのだ。そのためにハイクはモンスターボールの整理をしていたのだ。

「分かってるよ」

そう言いつつ、ハイクは部屋を出て玄関に向かった。

「それじゃ、行ってきます」

ハイクは靴を履き、玄関を出た。

「行つてらっしゃい。気をつけてね」

母親に見送られたハイクは研究所に向かって歩き始めた。

ハイクの今の格好は少し茶色がかつたコートに、白っぽいズボン。髪は焦げ茶色で長さは耳にかかるくらいで、瞳の色は黒だ。

「研究所は・・・こつちからの方が近いな」

少しのんびりし過ぎたかと思つたハイクは近道を使う事にした。大通りから人が少ない小さな道に入った。

「・・・なるほど」

途中、背後から不意に声をかけられた。

ハイクは「え？」と声を出した後、振り向いた。そこに立っていたのは1人の青年だった。髪は緑色で長く、黒っぽい帽子をかぶっており、白い上着にハイクのコートの色に似ているズボンをはいて

いる青年だった。

「君は、かなりポケモンに好かれているようだね」

青年がそう言った。

「中でも・彼はとても君になついているみたいだ・」

「あの・あなたは誰なんです？それに・・いつたい何を言つて・」

ハイクが言い終わる前に青年は口を開いた。

「そんな事はいいいじゃないか。一度君に会っておきたくてね、ハイ  
ク」

「どうして俺の名前を・・・！」

「フッフ・・色々あつてね」

青年は話を続けた。

「ところで・君はもしこの平和な日常が崩れ、世界が破滅の道をたどるようになってしまった時、戦う覚悟があるかい？」

「！何の事ですか！？世界の破滅なんて・・そんな事・・」

「ちよつと聞いてみただけだよ。・・けど君は必ず戦う」

青年は目を閉じ、苦笑した。

「君と話ができて楽しかったよ。引き止めて悪かったね。どこか行く用事があるんだろ？・・それじゃ僕はもう行くよ」

青年はそう言うと、ハイクの向かう方向とは逆の方向に歩き初めた。

「そうそう、僕の名前だけでも教えておくよ」

しかし青年はもう一度振り向いた。

「僕の名前はN。覚えておいて損はないと思うよ」

そう言った後、青年は行ってしまった。

「何だったんだ・・？つと、早く研究所に向かわないと」

ハイクは研究所に少し駆け足で向かった。

## 出会い（後書き）

今回は都合上、少し短くなってしまいました。次からはもう少し長くしたいとおもいます。

感想やアドバイスも、お待ちしております！

## 襲撃（前書き）

今回は前より少し長めです。

## 襲撃

ハイクは研究所に向かう準備をしていた。ポケモン達を健康診断に出したのは昨日。診断にはポケモンの数が多いせいか、1日かかるらしい。なのでまた翌日、研究所に行く事になったのだ。

「これでよし。さて、研究所に向かうか・・・」

ハイクは家を出て、研究所に向かった。

研究所に向かう途中、ハイクの頭に昨日Nと名乗った青年が言った言葉がよぎった。「世界の破滅」 Nは聞いてみただけ、と言っていたが、どうも何か深い意味があるんじゃないか？と思ってならなかった。・・・その時、

ドーン！

何か大きな音が轟いた。

「！なんだ、今の！？」

確実にただ事ではない。

ハイクはあたりを見渡した後、大きな音がした方に走り出した。・

・嫌な予感がする・・・

大きな音の発生源と思われる場所に着いた時、ハイクは一瞬言葉を失った。

そこでは1体のポケモンが建物を破壊していた。まるで岩に命が宿り、動き出したのではないか、と思ってしまう見た目をした伝説級のポケモン、

「レジ・ロック・・・？」

そう、レジロックだ。このホウエン地方のどこかに存在していると言われていたポケモンだが、無論、実際に見るのは初めてだ。

「本で見た事はあるけど、本当にいたなんて・・・でもどうしてこんな事をしているんだ・・・！？」

グググ・・・

突然、レジロックが動きを止めたかと思うと、顔(?)をハイクの方へ向けた。

「へ？」

レジロックは片腕を振り上げ、その拳を地面に叩きつけた。すると地面が盛り上がり、先が鋭利の岩が連続して突きでてハイクに向かってきた。

「ちよっ・・・ヤバ！」

ハイクは真横に跳び、頭から滑り込んだ。

「イテテ・・・」

顔が痛かったが、何とか紙一重で避けられたようだ。しかしレジロックはハイクに追撃しようと、右腕を振り上げていた。

（ヤバイ！）ハイクは本気でそう思った。しかしレジロックは攻撃を行う前に何者かの攻撃を受け、尻餅をついた。



「！なんだ！？」

ハイクの目の前に1匹のポケモンが着地した。体長はハイクと同じくらいか少し大きめで、緑色の体をしており、草のような尻尾を持ったポケモン、ジュカインだった。

ジュカインはハイクの方を振り向いた。右目に傷を負っており、開いていない。

「右目に・・・傷・・・まさか・・・！」

『・・・大丈夫か？』

「ん・・・へ！？」

ハイクは自分の耳を疑った。ポケモンが人間の言葉を喋ったのだ。驚きのあまり息をするのも忘れそうだった。

「し・・・喋った・・・人間の言葉を！？」

『！・・・アンタ、俺の言っている事が分かるのか！？』

「へ！！？」

しかし、逆に驚いているのはジュカインの方だった。

「ちょっと待ってくれ・・・君は人間の言葉を話せるポケモンとかじゃないのか？」

『いや違う・・・。少なくとも具体的な話の内容がはつきり伝わ

ったのはこれが初めてだ』

「と・・・言うことは・・・」

ハイクは右手で頭をおさえた。

「俺がポケモンと会話が出来るようになった、て事が・・・!？」

何があだか分からなくなってきた。こんな事は初めてだ。昨日まではいつもと同じ毎日だったのに、急に何かが変わってしまった気がした。

ゴ・・・ゴオ・・・

そう考えているうちに、レジロックがまた動き始めた。

『・・・しぶとい奴だな・・・』

ジュカインはそう言うのとレジロックに接近した。そして手首にある葉の形をした物をトンファーのようにして斬り上げた。

ジュカインに斬られたレジロックはのけぞった。ジュカインはその後、レジロックの腹部を何度か斬りつけた。

レジロックも黙って攻撃を受けているわけではなく、岩の拳で殴りかかってきたが、ジュカインはそれをバグステップで素早く避けると距離をとった。そして左手を前に出した。その左手に力を集中させ、緑色の球体を出現させた。

『・・・はあ!』

ジュカインはそのエナジーボールをレジロックに飛ばした。

グ・・グオオ・・・

エナジーボールをもろに食らったレジロックは大きくよろめいた。

『とどめだ』

ジュカインは手の爪でリーフトンファーとエナジーボールを食らい、脆くなっていた部分を斬り裂いた。

レジロックは目（？）をチカチカと点滅させながら後ずさりした後、仰向けに倒れた。

## 襲撃（後書き）

オリジナルワザ炸裂！

リーフトンファー・・・ネーミングセンス悪くてすみません（な  
んか毎回謝ってるような・・・）

感想、お待ちしております！

## 力の吸収（前書き）

お気づきかもしれませんが、会話シーンで、ハイク達 人間の言葉は「」、ポケモンの言葉は『』で表しています。

## 力の吸収

ジユカインの連続攻撃を食らったレジロックは耐えきれずに、仰向けに倒れた。

「やった・・・のか？」

ハイクはレジロックが倒れている事を確認した。

『・・・・・・・・・・』

ジユカインは攻撃態勢をといた。

「ジユカイン・・・」

ハイクはジユカインに確認したい事があつた。自分は右目に傷のあるジユカインを知ってる。そう思ったのだ。

しかしジユカインはその瞬間、何かを感じたようにピクッと動き、辺りを見渡した。

「ジユカイン？」

『・・・・・・・・待て』

ジユカインはハイクにそう言つとレジロックに近づこうとした。その時

グオオッ！

急にジユカインの周りに黒く、細長い柱の様な物が出現した。

『！何だ、これは！？』

考える間もなく、黒い柱からどす黒い雷が発生し、ジユカインを襲った。

『グワアアアア！！』

「ジユカイン！」

『く・・・そ・・・油断した・・・ガアアア！！』

しばらく攻撃をした後、雷はおさまった。そして黒い柱はジユカインを離れ、レジロックの方へ飛んで行った。

『ハア・・・ハア・・・ハア・・・』

ジユカインは右膝をつき、左手で体重を支える様な形で座り込んだ。

「ジユカイン、大丈夫か！？」

ハイクはジユカインに駆け寄った。

『・・・ああ・・・だが・・・』

ジユカインを攻撃し、さらにどす黒さを増した柱がレジロックに

刺さった。

「なんだ？何が起きているんだ？」

黒い柱はレジロックに吸収される様な形で体内に入っていった。するとゴゴゴとレジロックから妙な音がしたかと思うと、それまで倒れていたレジロックが急に起き上がった。

『！！・・・なんだ・・・と・・・！？』

レジロックは目をチカチカさせながらハイクとジユカインの方に近づいてきた。

『さがっ・・・てい・・・ろ・・・』

ジユカインは無理矢理立ち上がりながらハイクにそう言った。

「待つて、そんな体で戦ったら・・・」

ハイクの言葉をジユカインは無視し、レジロックに接近した。そしてリーフトンファーで攻撃した。しかしレジロックはそれを難なく避けると、素早く殴りかかってきた。

『ぐはっ！』

レジロックのパンチをもろ食らったジユカインは地面に叩きつけられた。

その後もレジロックは攻撃を止めようとしなかった。レジロックが拳を地面に叩きつけると、倒れているジユカインの下から無数の小さな岩が飛び上がった。



『く・・・そ・・・』

ストーンエッジを食らい、ジユカインはさらに飛ばされたが立ち上がろうとした。しかし、

『ぐ・・・は・・・!!』

レジロックが地面に手をかざすと、地面が盛り上がり、岩の槍の様な物が出現した。レジロックはそれを、ジユカインに投げつけてきた。

槍はジユカインの腹部に直撃した。

ジユカインは口から血を吐き、その場にひざまずいた。

「ジユカイン!!」

ハイクはもう一度ジユカインに駆け寄った。

「しっかりしろ、ジユカイン!!」

『離れ・・・て・・・いろ・・・。あいつは普通じゃ・・・ない。ア  
ンタも・・・殺されるぞ・・・』

「目の前に苦しんでいる人ポケモンがいるのに、放つとけるわけないだろ  
!!」

『!・・・まったく・・・お節・・・介な奴だ・・・な・・・』

そう言つとジユカインは倒れた。

「ジユカイン？ジユカイン！」

息はかろうじてあるが、このままでは死んでしまっただろう。

（くそ・・・どうなってるんだ？急にジユカインの動きが鈍くなっ  
たかと思ったら、レジロックの動きが変わった？  
・・・あの柱・・・何か仕掛が・・・）

おそらくあの柱はジユカインを攻撃していた訳ではなく、力を吸  
収していたのだろう。その柱をレジロックは取り込んだ。だから急  
に力が逆転したのだろう。

ジユカインを倒したレジロックは標的をハイクに変えた。

「もう、駄目なのか・・・？」

諦めかけたその時、ドウオン！ という音とともにレジロックは  
よろめいた。本日2度目の不意打ちだ。

「この攻撃は・・・大文字だいもんじ・・・！？」

## 力の吸収（後書き）

いい忘れてましたが、原作に登場するキャラの設定や性格の記憶が曖昧で・・もしかしたら性格が違うかもしれません。その所は気にせず読んでくれるとありがたいです。

感想も待ってます。

## 逃走？（前書き）

どうも、absoluteです。

小説ばかり書いていたら、勉強が疎かになっている事に気づいた今日この頃です！（駄目じゃん！）

今回は新キャラ登場です！

それでは、どうぞ！

逃走？

何者かの不意打ちを食らったレジロックは後ろを振り向いた。

そこには1匹のポケモンと1人の少女が立っていた。

ポケモンの方は、炎を模した様な頭と猿の様な見た目が特徴的なポケモン、ゴウカザルだった。

そして、そのポケモンを連れた少女は、髪の色が黒に近い青で、長さは短くもないが、長すぎでもないくらい。丈が長く、明るい青色のコートを着ていた。

「・・・レイン!？」

ハイクは彼女を知っていた。

「ハイク!大丈夫!？」

レインと呼ばれた少女がそう言った。

彼女はハイクの幼馴染みだった。歳は15歳で、ハイクと同じポケモントレーナーだ。

レジロックは攻撃対象をレインのゴウカザルに変えた。

「やっぱりタイプは岩・・・みたいね・・・」

レジロックはストーンエッジを放とうとした。

「ゴウカザル、インファイト」

しかし、それより早くゴウカザルの守りを捨てた連続攻撃がレジ

ロックに直撃した。

ゴォォ・・・

インファイトをもろに食らったレジロックは大きくのけぞった。

「次は・・・気合い玉！」

ゴウカザルは両手を前に出し、気合いを集中させた。しばらく集中するとそこに玉ができた。そしてその玉をレジロックに向けて飛ばした。

ガンッ！という音を立てて、これも直撃した。

グググ・・・

レジロックはよろめきながらも、拳を地面に叩きつけた。また攻撃が来る！と思った瞬間、ブワッと音を立てて砂ぼこりがまった。

「！ 何！？」

そして砂ぼこりが引いた後、レジロックは姿を消していた。逃げたのだろうか？

「追い返した・・・のか？」

「ハイク！」

レインが駆け寄ってきた。

『ハ・・・イ・・・ク・・・？』

ハイクという名前に反応してジユカインがそう言ったが、ハイク達は気付かなかった。

「大丈夫？怪我はない？」

「ああ・・・俺は大丈夫だけど・・・ジユカインが・・・」

レインはジユカインを見た。

「！　どうしたの？ひどい怪我じゃない！」

「レジロックと戦って、それで・・・」

ハイクは言葉がつまった。

「・・・そう・・・」

「でもレインこそどうしたんだ？どうしてミシロタウンに？」

レインはコトキタウンに住んでいる。なぜここにいるのか疑問に思っただ。

「うん、ちょっとヤボ用だね。でも途中で変な男の人がミシロタウンで起きている事を教えてくれたの」

「変な男の人？」

「そう。黒つばい帽子に髪が長くて緑色の人・・・」

「えっ！？まさか……。そいつ、何て言ってたんだ？」

「君の友達が危ない。早く助けに行った方が良いって……」

「何だって？……一体何を考えているんだ……？」

「ひょっとして、その人と知り合い？」

「まあ……ちょっとな……」

「おい、君達！」

話をしていると白衣を着た1人の男の人が走ってきた。

「オダマキ博士！」

そう、彼がオダマキだ。

「ハイク君に、レイン君も一緒だったのか！レジロックに襲われたそうだね。怪我はなかったかい？……と、そうでもないみたいだね……」

オダマキはジュカインを見て、すぐに状況を理解したようだ。

「レジロックにやられたのかい？」

「はい、そうです……」

「こいつは酷い……。すぐに研究所に運ぼう！あそこなら役に立つ物が揃っている」



「はい。お願いします」

ハイクはジユカインをオダマキに預けた。

「それと、君達も研究所に来てほしい。話したい事があるんだ」

「はい、分かりました！」

ハイクとレインはオダマキと共に、研究所へと向かった。

逃走？（後書き）

やっとバトルが終わりました。戦闘シーンって書くの難しいな・  
・。

感想、書いてくれたら嬉しいです！

## 異変（前書き）

今回はチョイ長めです。

## 異変

研究所に着いてすぐ、ジユカインは怪我の治療を受けた。幸い、命に別状はなく、しばらく安静にしていれば良くなるらしい。

ジユカインが無事だと聞いてホッとしたハイクとレインはオダマキに話したい事がある、と言われていたので、研究所の一室にいた。

「オダマキ博士って、情報収集早いよね」

レインがそう言った。

「あ、ああ」

こんな時に呑気な事を言っているレインにハイクは少し呆れた。昔からレインは、しっかりしてそうだが、少し呑気と言うか、天然と言うか。そんな一面があった。まあ、それもレインの良いところ、と言うことでハイクは受け入れて来たのだが。

「話したい事、というのはね……」

オダマキは話し始めた。

「まずは、ハイク君。君に伝えなきゃいけない事がある」

「俺に、ですか？」

オダマキは静かにうなずいた。

「単刀直入に言おう。君が健康診断に連れてきてくれた6匹のポケモンが……忽然と姿を消した……」

「へ!？」

ハイクは頭の中を整理するのに時間がかかった。

横でレインが「ストレート過ぎですよ……」と言って、ハイクの気持ちを気にしていた。

「それって……一体……どういう……」

「すまない……分からないんだ。何者かが持ち出したのか、それとも彼らが自分達で抜け出したのか……。でも昨日から今日にかけて誰かが侵入したりだとか、抜け出した形跡が無いんだ。それに姿を消したのは君のポケモンだけなんだ。全くの謎だよ……」

「そんな……」

シヨックて言葉が出なかった。共にホウエン地方を旅し、数々の戦いをくぐり抜けてきた、大切な仲間だったのだ。心に受けた傷は大きかった。

「私達も今、全力で捜査している。必ず見つけ出して見せる!それまで……待っていてくれ」

「……はい」

その時、ハイクの心にある決意が生まれた。

「それと、2人に今回起きた事件について話そうと思う」

オダマキは話を続けた。

「今回のように伝説級のポケモンが人前に現れるという事は極めて稀であつて、ましてや人を襲うなんて事はほとんど記録されていないんだ」

するとオダマキはパソコンを操作し、何かのファイルを開いた。

「そして、ここからが重要だ」

ハイクはゴクツと唾を飲んだ。

「同じような事件が1時間22分前、ホウエン地方の2ヶ所で起きている」

「え!?!」

ハイクとレインは2人同時に驚いた。

「そして、その場所は……」

オダマキはキーボードをクリックした。

「ミナモシティとルネシティだ」

するとパソコンの画面に2つの映像が流れた。その映像は、やはり伝説級のポケモンが建物を破壊し、人々を襲っている映画だった。ミナモシティでは、鉄ポケモンのレジスチルが、ルネシティでは、氷山ポケモンのレジアイスが暴れていた。

「そんな…！一体どうして…」

その映像を見た時、ハイクは愕然とした。

「今は騒ぎは収まっているようだがまだ詳しい情報は入ってきてないんだ。この映像も、ほんの数秒だしね」

「それにしても…ミシロタウンの事件とこの2つの騒ぎ、絶対何か関係していると思います。あの3体のポケモンは、大昔に何らかの理由で封印されたと言われているから……」

レインがそう言った。

「うん、私もそう思う。それにハイク君のポケモンが姿を消したという事も…関係はないかもしれないが……嫌な予感がする……」

「少し……」

ハイクが口を開いた。

「少し、心当たりがあるんです。何かを知ってそうな……そんな奴を知ってるんです！」

「！ 誰だいそれは？」

ハイクは昨日から今日にかけての事を話した。Nと言う青年の事、彼が告げた不穏な言葉の事、しかし、オダマキとレインが1番驚いたのは……

「ポケモンの声が聞こえるようになった!？」

と、いう事だろう。

「信じてもらえないかもしれないけど、本当なんです……!」

信じてもらえないと分かっているけどハイクはそう言った。

「うーん、でもハイク君がこんな時に嘘をつく分けないし……本当なんだろうね」

「私も信じるよハイク」

しかし返ってきたのは意外な言葉だった。

「レイン……オダマキ博士……ありがとうございます!」

ハイクの言葉に対して、オダマキはウンツとうなずき、レインはニコツと笑って答えた。

「でも、ハイク君が言っていたジュカインの力を奪った黒い柱、というのが気になるな……」

オダマキはそう言うのと右手を口に当て、考えた。

「オダマキ博士、俺、Nを探して来ます! あいつは絶対何かを知っています。会って話を聞きます!」

「私も行きます!」



「レイン？」

「もう、関わってしまったてんです。どうせなら、私も解決策を見つきたいんです！」

止められると思っていても、ハイクとレインはそう言った。

「分かった……」

しかし、オダマキはあっさりと許した。

「君達の事はよく知っている。止めたって無駄だろう？」

ハイクとレインはお互い向き合った後、オダマキにお礼を言った。

「だけど1つ約束してくれ。…絶対に無事 帰ってくるんだ。いいね？」

「はい！そんな事なら大丈夫です！」

ハイクはオダマキにそう言った。

「でもそうになると、ハイク君には代わりのポケモンが必要だね」

『なら、俺が力を貸そう』

誰かの声を聞いたハイクは部屋の入り口を見た。そこには怪我の治療を終え、傷口に包帯を巻いたジユカインがいた。

「ジユカイン！」

「「え？」」

オダマキとレインも振り向いた。

「怪我は……もう大丈夫なのか？ 安静にしてないと……」

『大丈夫だ。問題ない』

ジユカインはハイクに近づきながらそう言った。

『それに、俺はアンタの父親のポケモンだ。アンタを助ける義務がある』

「やっぱり……父さんの……」

ハイクには父親がいない。5年前、ある事故に巻きこまれ、行方不明になってしまった。

行方不明になる前、父親は大怪我をした1匹のキモリを拾ってきた。命は助かったが、右目の傷は治らなかった。

キモリは父親になついていたが、父親が行方不明になった直後、自らも姿を消した。そのキモリがジユカインに進化し、帰ってきたのだ。

「すごい……本当にポケモンの声が聞こえるんだね」

レインがそう言った。

「あ……ああ。怪我は大丈夫だって。あと、俺に力を貸してくれるみたいなんだ」

と、ハイクは言った。

「ジユカイン、俺に力を貸すのは義務なんかじゃない……。無理にしなくても……」

『無理にではない。それに、俺を舐めてもらっちゃ、困るな……』

ジユカインは少し笑いながらそう言った。

「分かった。ありがとう、ジユカイン」

ハイクはジユカインの中の決意に気づいた。ハイクと共に戦う決意だ。その決意を無駄にできない、と考えたハイクはジユカインを受け入れる事にしたのだ。

「オダマキ博士。俺、ジユカインといきます！」

オダマキは何も言わずに頷いてくれた。

「けど、しばらくは戦わせちゃ、駄目だからね！」

「はい、分かってます」

「私のポケモンもいるので大丈夫です！」

ハイクとレインはそう言った。

「それじゃ、そろそろ行きますね」

荷物を整理したハイクはそういった。

「うん、行っておいで！」

「はい、行つて来ます！」

ハイクとレインはジュカインを連れて研究所を後にした。

異変（後書き）

ポケモンは人間の言葉を理解できるみたいです（笑）

次回、多分短いです。

感想、待ってます。

## 家族（前書き）

宣言通り！

ジユカイン『宣言通り、だな』

おお、ジユカイン！前書きにまで登場ですか！

ジユカイン『たまにはいいだろ…』

はい、それでは始まりまゝす。

ジユカイン『スルーか…』

## 家族

ハイクは自分の家の前にいた。旅立つ前に母親に話しておこうと思っただ。

ハイクはドアノブを回し、扉を開け、家に入った。

「ただいま」

いや、その言葉は今使うのは妥当ではなかったのかもしれない。

「ハイク…？ハイクなのね！？」

家の奥から母親が出てきた。今、ハイクがいるのは玄関だ。

「良かった…心配したのよ？外で騒ぎが起きてるって聞いて…」

「そうか…ごめん、母さん。心配かけて…」

ハイクは少し黙り込んだ。

「でも良かった。ハイクが無事ならそれで……」

母親がそう言うときハイクも口を開いた。

「ねえ、母さん」

「ん、どうしたの？」

「父さんの…キモリがさ、帰って来たんだ。ほら、入って来いよ」

それまで外にいたジユカインが中に入って来た。

「まあ…」

「今はジユカインだけど…」

母親は驚きを隠せずにいた。

「今まで何処に行ってたの？いつの間にか大きくなって……。顔の傷は、まだ治ってないのね…」

『ああ……大丈夫だ。不便はない……』

ジユカインはそう言ったが母親には聞こえないだろう。

「母さん、それともう一つ…」

「…今度は…どうしたの？」

「俺、もう一度ホウエン地方を回らなきゃいけないんだ」

「………」

「色々あって…もしかしたら、世界に危機が迫ってるかもしれないんだ。そうなる前に止めなきゃ…俺が止めなきゃいけないんだ」

母親は目をつぶり、下を向いて何かを考えた。



「……ちょっと待ってなさい」

母親はそう言つと、家の奥へ入って行つた。その後、何かを持  
つて出てきた。

「これ、キモリくんの…今はジュカインくんね。モンスターボー  
ルよ。持っていきなさい」

そう言つと、母親はハイクにモンスターボールを渡した。

「父さんが使つてた…でも、俺が出るの、止めたりしないの？」

ハイクがそう言つと、少し笑いながら母親は言つた。

「もう、子供じゃないしね。あなたが決めた事なんですよ？なら、  
母さんは止めたりしない…」

「母さん…」

「フフ…あなたの父さんにそっくりね。こういう事があると、い  
てもたつてもいられずに、すぐに飛び出して行っちゃう……」

母親には、ハイクとハイクの父親が重なって見えたのだろう。

「さあ、言つてらっしゃい。…あなたの決意を…貫くのよ…」

「うん…行つてきます。必ず…帰つて来るよ」

そう言つと、ハイクは家から出た。

「もう…いいの？」

外で待っていたレインに聞かれたハイクは「うん…」と、答えた。その顔は後悔しているようにも、悔いのないようにも、見ることができた。

「……行こう！」

そう言った後、ハイク達はミシロタウンを後にした。

## 家族（後書き）

ジユカイン『会話が多いな……大丈夫なのか？』

え〜と、まあ、はい、すいません<（――）>

感想、お待ちしております！

ジユカイン『日本語おかしくないか？』

……（言い訳が思いつかない）

## 小さな声（前書き）

え、先日更新した「異変」と「家族」ですが、色々トラブルがありました：一部文字が消えたまま更新してしまいました。今は直しましたが、読者の方々にはご迷惑をかけ、申し訳ありませんでした。

はい、それでは始まります。

## 小さな声

ハイクとレインは、Nの手がかりを探すために、コトキタウンに向かっていた。

「サンダース、10万ボルト！」

今、101番道路で、レインの黄色い犬の様な姿をしたポケモン、サンダースはムクホークと戦っていた。ムクホークは飛行タイプなので、相性はいい。難なく倒す事ができた。しかし、気になる事があった。

「ムクホーク…ハーデリアの次はこいつか…」

ムクホークもハーデリアも、101番道路には生息していないポケモンなのだ。しかし、今日は本来生息しているはずのジグザグマやスバメといったポケモンはほとんど見かけず、逆に生息していないポケモンを大量に見かけたのだ。しかもほとんどのポケモンが人間を見た瞬間、殺気立てて襲いかかってくるのだ。

「くそ、何が起きているんだ？ たった1日でこんな…」

「うーん…突然変異したとか？」

「…いや…流石にそれはないと思うけど………」

レインの妙な発想は置いといて……ハイクの今の手持ちはジュカ

インのみだが、怪我をしているので戦わせる訳にはいかない。レインのポケモンのお陰でなんとか前に進めてはいるが…。

ガサガサ…

ムクホークを倒し、ほつとしたのも束の間、今度は別のポケモンが複数、草むらから飛び出してきた。

『こ…これじゃキリがないよぉ』

サンダースが泣き言を言ったが、無理もない。

「とりあえずここは逃げよう！」

ハイクの提案に対してうなずいて答えたレインは、サンダースをモンスターボールに戻し、ハイクと共に走って草むらを通り抜けた。

「ここまで来れば大丈夫だろ…」

息を切らしながらも、ハイクはレインにそう言った。

「多分、ね。コトキタウンも目の前だし…」

レインに言われ、コトキタウンの入り口がもう見えている事に気づいた。

「…行こう。Nの手がかりが見つかればいいけど…」

ハイク達はコトキタウンに向け、歩き始めた。が、その時、ハイクの耳に誰かの声が響いた。

「え？」

しかし、その声は弱々しく、今にも消えてしまいそうなロウソクの火のような……そんな声だった。

「どうかしたの？」

レインがハイクに尋ねた。

「今…声が…」

『助け…て…』

「！」

はつきりと聞こえた。誰かが助けを求めている！

「こっちだ！」

ハイクは近くの茂みに向かって走った。

「ちょっと待って、ハイク！」

レインも後に続いた。

茂みの中は確実に人が通るような場所ではない。木の枝を押し退

け、歩きにくい茂みを進む。

しばらく進むと、少し広い場所に出た。そこには1匹の小さなポケモンがうずくまっていた。

「こいつは…」

そのポケモンをハイク達は知っていた。しかし、やはり101番道路<sup>こ</sup>にいるはずのないポケモンなのだ。そのポケモンは炎タイプで、火ネズミポケモンのヒノアラシだった。

「大丈夫か!？」

ハイクはヒノアラシに駆け寄り、声をかけたり、体を揺すったりして生きているかどうかを確認する。

『う…う………』

かすかだか反応があつた。まだ死んではいないようだ。よく見ると体中に細かい傷があつた。

「ポケモンセンターに連れて行こう」

ハイクはそう言うと、ヒノアラシを抱きかかえた。

「大丈夫なの、その子?この辺では見ないポケモンだけど…さっきのポケモンみたいに凶暴なんじゃ…」

レインの考えは得策だ。この状況で慎重になる事に超したことはない。しかしハイクは、このヒノアラシが凶暴であろうとなかろうと、関係なかった。



「たとえばそうだとしても、このまま放っておく訳にはいかない」

レインには、ハイクがそう言うとなんとなく分かっていた。ハイクは昔から困っている人、苦しんでいる人を見ると、意地でも助けようとしてしまう。そんな人だった。

今と同じ昔のハイクの姿を思い出し、レインは苦笑していた。

「どうかしたのか？」

ハイクにそう聞かれたが、「ううん、何でもない」と言って首を横に振った。

しかしその直後、何かが急に茂みから飛び出し、ハイクに襲いかかった。アrikuiの様な見た目をした炎タイプのポケモン、クイタランだ。

「なっ!？」

クイタランはハイクに飛びかかってきた。このスピードでは避けきれない。しかし次の瞬間、ハイクの腰辺りにあったモンスターボールからジュカインが飛び出し、クイタランの攻撃を受け止めた。

「ジュカイン!？」

『今の…内だ……!』

傷が完治していないせいか、かなり辛そうだ。

「レイン!」

レインはうなずき、自分のモンスターボールを投げた。

「ミロカロス！」

レインが出したのは蛇の様な美しい姿をした水タイプのポケモン、ミロカロスだった。

「ジユカインを助けて！」

ミロカロスは自分の尻尾をムチの様にしならせ、クイタランに攻撃した。ミロカロスの攻撃を食らったクイタランは、ジユカインから手を離し、吹っ飛んだ。

「ハイドロポンプ！」

ミロカロスは吹っ飛んだクイタランに向け、ハイドロポンプを放った。またもや攻撃を食らったクイタランは、とうとう倒れた。

『ぐっ……』

ジユカインは脇腹を抑え、片膝についてその場に座り込んだ。

「ジユカイン、無理しちゃ駄目よ！」

レインがジユカインにそう告げた。

「まだ怪我が治ってないんだろ？」

ハイクの質問にジユカインは答える。

『傷もそうだが…、奪われた力もまだ戻ってきていない。これでは前のような力は出せない』

ジユカインは自らの体の異変に気づいているようだ。レジロックに奪われた力は一時的に消耗した訳ではなく、完全に消えてしまったようだ。それでも冷静に振る舞うジユカインに、ハイクは感心した。

「もしかしたらレジロックから力を取り戻せるかもしれない……。とりあえず今はモンスターボールの中に戻ってくれ」

『……分かった』

ジユカインはモンスターボールに戻った。

「ねえ、ハイク」

今まで話しに全く入ってこれなかったレインがハイクに話しかけた。

「力を取り戻す、とか言ってたよね？ 本当にそんな事出来るの？」

ハイクの声だけで、そこは理解できたようだ。

「力を奪われたんだ。なら、その逆も出来るハズだ。…まあ、もう1度レジロックに会わなきゃ分からないけど……」

確実に力が戻る、と言い切れる訳ではないが、奪う事ができたのだから取り戻す事もできるハズだ。

「さ、早くこいつをポケモンセンターに運ぼう」

そう言つとハイク達は、ヒノアラシを助けるため、またNの手がかりを捜すため、コトキタウンに向かった。

小さな声（後書き）

今回から2章に突入です！

感想、待ってます！

## 新たな脅威（前書き）

ふう、やっと更新できました。

それでは9話目、どうぞ！

## 新たな脅威

コトキタウンに着いた後、ハイクはヒノアラシのためにポケモンセンターへ、レインはNの手がかりを探すため町へ行く、という2手に分かれて行動する事になった。

レインは誰かNを知った人がいないか、色々な人に聞いて回った。しかし、誰もNを見た、と言う人はいなかった。

手がかりを失い、完全にNを見失ったレインはとぼとぼと大通りを歩いていった。

「……N……いないな……」

コトキタウンの町の大きさはミシロタウンとほぼ同じ。レインとハイクが入ったのは南側の出入り口だ。入ってすぐ目の前にポケモンセンターがあり、右に町が広がっている感じだった。そんな小さな町でもNを見つける事ができなかった。よほど逃げ足が早いのか、それとも影が薄いのか……

とりあえずレインはポケモンセンターに向かう事にした。だがその途中にある小さな電気屋の前で足を止めた。その電気屋にガラス越しに展示されていたテレビから流れているニュースをみて、レインは驚愕した。

「……大変！ハイクに知らせなきゃ！」

レインはハイクと連絡をとるために、携帯電話を取り出した。

ハイクはポケモンセンターにいた。ヒノアラシの怪我を治すためだ。

幸い、怪我は大したことなかった。倒れていた大きな原因は極度の疲労だったらしい。そのため、治療は早めに終わり、ハイクはヒノアラシを受けとるためにカウンターに向かった。

「少し休めばすぐに良くなりますよ」

カウンターの人はそう言い、ヒノアラシをハイクに渡してくれた。

「ありがとうございます」

ハイクはお礼を言いつつ、ヒノアラシを受け取った。

ハイクはヒノアラシを抱きかかえたままポケモンセンターの外に出た。そしてコトキタウンの出入り口付近まで歩いた後、ヒノアラシを降ろした。

「さあ、これで君はもう大丈夫だ。自分の場所に、帰ってもいいよ」

ハイクはヒノアラシにそう言い残し、その場から立ち去ろうとした。



『あ、あの!』

しかしハイクは、ヒノアラシに声をかけられたので、立ち止まり、振り向いた。

『助けてくれて……ありがとうございました!』

ヒノアラシはハイクにそう言った。

「へ? ああ、そんな事か。苦しんでいる人やポケモンを助けるのは、当然だろ?」

ハイクはヒノアラシにそう言った。

予想外の言葉だったのか、ヒノアラシは少し戸惑ったような素振りを見せたが、しばらくすると口を開いた。

『……やっぱり、ボク達の声、聞こえるんですね……』

「ま……まあ、色々あってね……」

ヒノアラシの質問にたいして、ハイクはそう答えた。

『その……人を探しているんですね?』

ヒノアラシはハイクに尋ねた。

「ああ。聞いてたのか」

『え……えっと……その……さ……探すのボクも手伝います! 助けてもら

ったお礼に……」

「え？」

ヒノアラシの考えにハイクは少し驚いた。

「でも、この旅は危険だ。君の仲間達も心配しているだろ？ 帰った方がいいよ」

『ボクには、仲間とか、家族とかいません。…この辺に来たときはお母さんと一緒だったんですけど……ある日突然、帰って来なくなっちゃったです…。だから、心配する人とかいないので、大丈夫です！』

「！……」

ヒノアラシの過去を聞いたハイクは、胸が痛んだ。

「…ずっと…1人だったのか…」

彼は今までずっと1人ぼっちで、生きて来たのだろう。どのくらいの間、彼は辛い思いをしてきたのだろうか。このまま彼を逃がしても、待っているのは孤独だけだ。そう思えば思うほど、ハイクの心はヒノアラシを助けたい、という気持ちでいっぱいになった。

「……分かった」

その答えは、ヒノアラシの厚意を無駄にはできない、という思いよりも、ヒノアラシをこれ以上、1人にさせたくない、という思いから生まれたのかもしれない。

「一緒に行こう」

ハイクは空のモンスターボールを取りだし、そう言った。

『!…ありがとうございます!』

ヒノアラシの頭をボールで、コンツと叩くと、ボールが開き、中から出てきた赤い光にヒノアラシは包まれた。そして、光と共にヒノアラシはボールに吸い込まれた。ボールは少しの間コトコトと動いた後、動きを止めた。

「これから…よろしく!」

ハイクはボールの中のヒノアラシに向かってそう言った。  
と、同時にハイクのポケットの中にあつた携帯電話が鳴った。

「誰だ?…レインから!?……………もしもし?」

ハイクは電話に出た。

「あ、もしもしハイク!?今どこ!?」

「コトキタウンの入り口辺りだけど…」

「大変なの!え…と、すぐに電気屋の前のバス停まで来て!」

「電気屋の前のバス停…?ああ、あそこか。分かったすぐ行く!」

ハイクは電話を切った。

「レイン慌ててたな…大変な事ってなんだ…？すぐに向かった方が良さそうだな…！」

ハイクはレインがいった所に走って向かった。

「レイン！」

ハイクは、バス停の前でレインと再会した。

「ハイク！大変なの！」

「大変って…何が大変なんだ？もしかして、Nを見つけたのか？」

「いや…Nは見つからなかったんだけど…さっきそのテレビでやってたニュースで、カナズミシティが大変なことになってるの！」

「カナズミシティ？」

カナズミシティといえば、岩タイプのポケモンを使うトレーナー

のツツジがジムリーダーのポケモンジムがある、大きな町だ。

「カナズミシティがどうして大変なんだ？」

ハイクはレインに尋ねた。

「ポケモン……」

「え？」

「ポケモンジムから大量のポケモンが溢れ出て来て、人を襲ってるみたいなの！」

「!!」

ハイクは驚き、愕然とした。

「それって、いつ頃だ!？」

「うーん……ちょっと前だと思っけど……」

「そうか……」

次々と起こる不測の事態を前にして、頭が混乱しかけていた。

「どうする?」

レインはハイクに聞いた。

「……カナズミシティに行こう。これまで、こういう事態が起こる

前はNが現れてるし…、それに、俺達も何か力になれるかもしれない」

ハイクはレインにそう、答えた。

「それじゃ、バスで行く？今は午後の3時40分くらいだから…カナズミシティ行きのバスは4時発のがあるね」

バスの時刻表を見ながら、レインがそう言った。

「じゃあ、そうしよう」

レインの考えに、ハイクは賛成した。

こうして、次の目的地はカナズミシティに決まった。

## 新たな脅威（後書き）

ジユカイン『ポケモンセンターのシーン、グダグダだったな…』

はい…すいません…。

感想、待っております！

## 溢れる“闇”（前書き）

やったー、10話目だー！

ジユカイン『よく10話も続いたな…』

な、なんて事 言っんですか！？この小説はまだまだ続きますからね！

ジユカイン『その勢いも、いつまでもつかないかな…？』

…くそ、ジユカインあとで覚えてろよ……

そ、それでは、どうぞ！



## 溢れる“闇”

ハイク達はカナズミシティに向かうため、バスの中にいた。周りを見ると、乗ってるお客さんが少ない事に気づく。恐らく、ポケモンジムの件がニュースで流れた事により、皆カナズミシティを避けているのだろう。妥当と言えば、妥当な判断である。

「そう言えば……」

レインがハイクに話しかけてきた。

「あの、ヒノアラシどうしたの？」

「ああ、一緒に連れていく事になった」

と、ハイクは答えた。

「一緒に！？また賑やかになったね」

「そ、そうだな。…ヒノアラシ、今までずっと1人ぼっちだったらしいんだ。このまま逃がしても、また寂しい思いをするだけだろう？…だからこれ以上、1人にさせたくなくってさ……」

ハイクはレインにそう答えた。

「そう…。相変わらずね、ハイクも！」

「え？どついう所が？」

「そついう所！」

レインは笑つて答えた。

ふとある事に気づいたハイクは、ヒノアラシをモンスターボールから出した。

「そつ言えば、まだ自己紹介まだだつたよな？」

ハイクはヒノアラシにそつ言つた。

『そつでしたね』

「俺の名前はハイク。よろしく！」

『あ、はい！こちらこそ、よろしくお願いします！』

そんな事を話しているうちに、バスはカナズミシティに到着した。

カナズミシティに到着した頃には、太陽は沈み、黄昏時になっていた。

「ポケモンジムは…こつちだな」

カナズミシティはミシロタウンやコトキタウンに比べ、かなり大きな街だ。街灯や建物の量も多く、日が沈んだ後でも街の明るさはなかなか消えない。

しかし、そんな街の普段なら人通りの多い通りが、今日はやけに人が少なかった。その代わり、ポケモンジムの方からは、沢山の人の話し声らしきものが聞こえてくる。

「なんだかポケモンジムの方が騒がしいね」

レインがそう言った。

「そうだな…野次馬やじうまかな？」

ハイク達はポケモンジムへと向かった。

ポケモンジムの周りには、やはり野次馬と思われる人でいっぱいだった。人混みの前の方には、興奮した人々をなだめている警備員が見える。

「うわ、すごい人だな…」

ハイクは沢山の人を見て、少し啞然とした。

「あ…ねえハイク、見てあれ！」

「ん、どうした？」

レインの指さす方向に目を向けた。そこには、人混みの先頭に立っている青っぱい服を着た1人の女性がいた。

「あの人って、ツツジさんじゃない？」

「え？あ、本当だ」

彼女がこのカナズミシティのポケモンジムのジムリーダー、ツツジだった。

「どうしてあんな所にいるんだろ？」

疑問に思ったレインがそう口にする。

「…よくわかんないけど…ツツジさんなら何か知ってるかも…。  
聞きに行ってみよう」

ハイクの意見にレインは賛成した。

「ち…ちよつとすいません…」

人と人の間を潜り抜け、やっとの思いでツツジの所までたどり着いた。

「ツツジさん！」

ハイクがツツジに声をかけた。

「あ、ハイク君に…レインちゃん？久しぶり！どうしたの、こんな所に？」

ツツジがそう言った。

「ジムの事、ニュースで聞いて…。一体何があつたんです？」

ハイクがツツジに尋ねた。

「うーん、私にもよく分からなくて…。ジムからポケモン達が溢れてきた、ていう時にはジムを留守にしていたし…」

「そう…ですか…」

「今はなんとか警備員の人達がポケモンをおさえているみたいだけど」

ジムの方を見ると、何人かの警備員が、入り口を封鎖していた。情報を得られずに、少しがっかりした反面、被害がおさえられている事を知ったハイクは安堵していた。しかし…

ガンッ！

鈍い音と共に封鎖されていた入り口が破られ、中からポケモンが現れた。ポケモン達は首のあたりにバナナのようなフサがあるポケモン、トロピウスを先頭に、列をなして出てきた。よく見ると草タイプのポケモンが多かった。

「ギャオオオー！！」

そのポケモン達は、ハイクとレインに101番道路で襲ってきたポケモンと同じく、人間を見た途端、殺気立てて襲いかかってきた。「うわああ!」「キヤー!」などと人々は叫び、我先にとその場から逃げ出そうとした。その間、ポケモン達はマジカルリーフやエナジーボールを放っていた。

「くそ!」

その姿を見たハイクはポケモンジムに向かって走り出した。

「ハイク!?!」

レインがハイクの事を呼んだ。

「ポケモンジムに突入する!中に絶対 何か原因があるはずだ!」

「ち、ちよつと待ってよ!」

レインもハイクの後に続いて走り出した。

「2人とも!危ないよ!」

ツツジの注意も聞かず、ポケモンジムに走る。

「ゴウカザル!」

レインがゴウカザルを出した。

「火炎放射!」

ゴウカザルが放った火炎放射はトロピウス達を包んだ。

「今の内よ！」

その隙にハイクとレインはポケモンジムに突入した。

「ああ、君たち！」

警備員の人々が止めようと声をかけたが、ハイク達は止まろうとしなかった。

「なんだよ、これ……」

ポケモンジムの中は異様な雰囲気が漂っていた。不自然に草木が生い茂り、足の踏み場もないほどだ。

「何か……少し変わった？」

「少しどころの騒ぎじゃないよな……これ……」

ハイク達は辺りを見渡し、愕然としていた。

ガサツ！

不意に草むらから何かが飛び出してきた。

「！ テッシード！？」

それはテッシードだった。

「く…ヒノアラシ！」

ハイクはモンスターボールからヒノアラシを出した。

「やれるか、ヒノアラシ？」

『は、はい！ハイクさんの役に立って見せます！』

ハイクの確認に対して、目の前の状況に少し怯えながらも、ヒノアラシはそう答えた。

「よし…火の粉だ！」

ヒノアラシは火の粉を放った。

「連発はしなくていい。注意をそらすだけで十分だ」

火の粉は炎タイプ技の中でも最弱クラスだが、今は注意をそらすだけで十分だった。

火の粉を受けたテッシードは思わず目をつぶり、よろめいた。



「いまの内に…！」

その隙にハイク達はジムの奥へ走った。

「なんとか逃げきれたな」

テッシードを振り払い、すこしホツとした。しかしヒノアラシはまだブルブルとふるえていた。

「どうした、大丈夫か？」

ハイクが心配して声をかけた。

『な、何かが…来ます…！』

「え？」

ヒノアラシがそう言った後、足音を立てながら何者かが近づいてきた。

「え、何！？」

それはローブ着た人の様な姿をしている“何か”だった。フードを深く被り、顔を確認する事はできない。

「何だ…こいつ…人間…なのか…？」

その“何か”からは人とは違う、何か別のオーラを放っていた。

『……バトル』

その“何か”はどこからモンスターボールの様な物を取りだし、  
そうつぶやいた。

溢れる“闇”(後書き)

最近、部活や勉強が忙しくて更新速度低下中です(汗)

できれば、感想お書き下さい。お願いします。

## 異常な力（前書き）

サブタイトルがなかなか思いつきませんでした…。

ジユカイン『試行錯誤を繰り返した結果がこれか…？微妙だな…』

…すみません。

## 異常な力

フード付きのローブを着た謎の人物の登場により、ハイク達は少し混乱していた。ちなみにその人物のローブの色は茶色っぽい色だ。

『……バトル』

その人物はどこからかモンスターボールの様なものを取り出した。色は黒で特に模様などは描かれていない。かなりシンプルなデザインだが、そのボールも、何か禍々しいオーラを放っているような気がして、ハイクは背筋がゾツとした。

「バトルって…まさか」

その人物は、黒いボールから1匹のポケモンをくりだした。先ほど戦ったポケモン、テッシーが進化したポケモン、ナットレイだった。その見た目を強引に言えば、ドゲの付いた玉から緑色の触手がのびている、そんな様な姿をしていた。

「！こ、この人トレーナー！？」

レインが尋ねた。

「分からない！でも…何か変だ…あのポケモン…」

そのナットレイは、見た目こそ普通だが、本能的に動いているのではなく、何者かの命令を体だけが忠実に実行している様に感じた。言わば操り人形だ。

「変って、どういう事？」

「何て言うか…誰かに操られているって言うか…」

レインの質問に対して、ハイクは曖昧に答えた。

『…パワーウィップ』

ローブの人物に命令されたナットレイは、自分の触手をムチの様に  
して攻撃してきた。

「うわっ！」

ハイクとレインはそれぞれ別の方向に飛び込み、攻撃を避けた。

「あ…危なかった…」

ハイクは立ち上がりつつも、そう言った。

「ハイク！ここは私達に任せて！」

するとレインは、モンスターボールからゴウカザルを出し、そう  
言った。

「レイン！？でも…」

「流石にあいつ相手じゃキツイでしょ？」

と、レインはハイク達に言った。その間ヒノアラシは小さな体を

ブルブルと震わせ、怯えていた。

「ごめんレイン…ゴウカザル…任せっぱなしで…」

「いいのよ。困った時は助けあわなきゃ」

そう言うとレインとゴウカザルは、ロープの人物とナットレイと向き合った。

『…ラスターカノン』

ナットレイの先制攻撃だ。体中が輝き始めたかと思うと、その光が一点に集中した。そしてナットレイは、その集中した光をゴウカザルに飛ばして攻撃してきた。

『…!』

しかしゴウカザルは素早くサイドステップでラスターカノンを避けた。

「反撃!火炎放射!」

ゴウカザルは火炎放射を放ち、攻撃した。

ナットレイは守備力の高さがとりのポケモンだ。そのかわり、体を動かすスピードはかなり遅い。並のナットレイ相手ならその攻撃は当たっていた。しかしそのナットレイは、常識ではあり得ないスピードで飛び上がり、ゴウカザルの火炎放射を避けた。

『なに!?!』

ゴウカザルが驚いた様子でナットレイを見上げた。

『…アイアンヘッド』

ナットレイは頭をゴウカザルの方に向け、角度をつけて飛び込んできた。やはり物凄い速さだった。

ゴウカザルには避ける隙がなく、アイアンヘッドが直撃した。

『ぐう…！？』

ゴウカザルはそのまま吹っ飛ばされた。

「ゴウカザル！」

『…パワーウィップ』

レインが叫んだが、ナットレイは倒れているゴウカザルに尚も接近し、パワーウィップで攻撃した。

『ゲハッ…！ゲホッ…ゲホッ…！』

パワーウィップが腹部に直撃したゴウカザルは、むせて咳き込み、吐血した。

パワーウィップは草タイプ技だ。炎タイプであるゴウカザルに対しては効果が薄いハズなのだが、常識を超える勢いで攻撃しているため、ダメージ量は大きかった。

「……………！！」

苦しむゴウカザルを見て、レインは言葉が出なかった。



ナットレイはその後も触手でゴウカザルを殴り続けた。

『……！……！……！』

このままではゴウカザルが殺されてしまう。

『やめろ……！』

もう駄目なのか？と諦めかけていた。

『やめろおおお……！』

しかし次の瞬間、それまで震えていたヒノアラシがナットレイに向かって駆け出した。

「……！ ヒノアラシ……！」

ヒノアラシはナットレイに接近し、火の粉を放った。しかしその攻撃は、火に油を注ぐようなものだった。

目障りなヒノアラシにナットレイは怒り、パワーウィップで攻撃した。

『う、うわっ……！』

その攻撃は幸いにも小さな体のヒノアラシをとらえる事はできなかった。

『……調子に……乗るなよっ……！……！』

ナットレイがヒノアラシに氣をとられている内に、ゴウカザルが

背後から大文字で攻撃した。

『!!!』

草、鋼タイプのナットレイは、炎タイプの技で凄まじいほどのダメージを受ける。大文字を食らったナットレイは、その場に倒れた。直撃した体の部分は溶けてしまっていた。

『やった…みたい…?』

倒れているナットレイをみて、ヒノアラシはそう呟いた。

「ゴウカザル!」

レインはゴウカザルに駆け寄った。

「ゴウカザル!大丈夫!？」

息を切らしているゴウカザルは、もはや返事をする元気もないようだ。

とりあえずレインは、ゴウカザルをモンスターボールに戻した。

「ヒノアラシ」

その頃ハイクは、ヒノアラシに声をかけていた。

「よく頑張ったな。凄かったよ」

『そ…そんな…ボクはほとんど何もしてませんよ…』

ヒノアラシは少し照れた様子で、そう言った。

『…マダ終ワツテナイ』

気がつくのと、ローブの人物は倒れているナットレイの近くまで来ていた。

「…レイン達の勝ちだろ」

ハイクはそう言ったが、ローブの人物は無視した。  
ローブの人物は、ナットレイの前で両手を広げた。するとローブの人物の胸の辺りが不気味に輝き出した。

「！ 何をする気だ…！？」

輝きが増したかと思うと、その場所に何か紅い物体が出現した。

「何…あれ…？石…？」

レインの言う通り、それは石にも見えた。  
そしてその石から、不気味な波動が放出されたかと思うと、みるみる内にナットレイを包んだ。

「…これって、レジロックの時と似たようなパターンじゃ…」

その通りだった。倒れていたナットレイがゆっくりと立ち上がる。

「やっぱり…」

『…！！グ…グオオ…』

しかしナットレイは、立ち上がると同時に急に苦しみだした。

「今度は何だ…！」

『ガ…ガガガ………』

ナットレイはそのまま苦しみ続け、やがて倒れた。と、同時にロープの人物の体が、砂になり、崩れた。

「！ どうしたんだ、一体…！」

ハイクは砂となったロープの人物をまじまじと見た後、砂に触ってみた。とてもサラサラしており、これが動いていたとは考えられない。

「ハイク！…このナットレイ………」

レインがナットレイを見ながらハイクを呼んだ。ハイクもナットレイを見てみた。するとある事に気づく。

「…死んでる…！」

ナットレイの瞳は完全に光を失っており、体を揺さぶってみても全く反応がなかった。

ハイク達は驚愕した。レインは目を大きく開き、両手で口を覆っているほどだ。

「何だよこれ…。コイツに何があったんだよ………！」

ハイクはもどかしさを感じていた。

ガサガサ…

すると、ジムの奥からまた複数の草タイプポケモンが現れた。

「！ レインは戻れ！後は俺達がやる…！」

ゴウカザルの事もあるので、ハイクはレインに戻る事をすすめる。

「無茶言わないで！ ランクルス！」

しかしレインは、モンスターボールから緑色の細胞の様な姿をしたポケモン、ランクルスを出しながらも、ハイクの提案を拒否した。

「サイコキネシス！」

ランクルスはサイコキネシスを使った。サイコキネシスを食らったポケモン達は苦しみだし、足を止めた。

「私も一緒に行く！」

レインは決意に満ちた眼差しでハイクを見ながら、そう言った。

「…！…分かった、行こう！」

レインの決意を感じたハイクは、ヒノアラシをモンスターボールに戻し、ポケモン達が止まっている隙にポケモンジムのさらに奥へと走り出した。

## 異常な力（後書き）

「『や』で技名を言っている所がありますが、技名を言っているのは基本トレーナーの方です。はい。

感想、待ってます！

“草”の召喚陣（前書き）

今回はかなりグダグタだと思っています。

ヒノアラシ『こんな作者でさえいけません…』

はい…。

## “草”の召喚陣

ローブの人物を倒したハイク達は、ポケモンが溢れてくる根源を探すべく、ジムを進んでいた。途中、やはり何度かポケモンに襲われた。それも全て草タイプだ。これには何か意味があるのだろうか？

「……どこまで続くんだ……？」

木々が生い茂っているせいで、歩きにくい、という事もあるだろうが、それでも長いような気がした。

そして最後の木の枝を押しのと、少し広い場所に出た。

「……これは……！」

そこには床が一部分だけキレイに草が生えておらず、代わりに緑色の魔法陣の様なものが描かれていた。

「……何かいる……」

その魔法陣の中心に、小さなポケモンらしき者が、佇たたずんでいた。見たことのないポケモンだった。まず目に入ったのは、頭部のピンク色の花の様な物だ。左右1つずつついている。

そして背中の中身の体毛だ。草を思わせる形と色をしていた。もし、このポケモンが、花畑の真ん中で体を丸めていたら、誰も気づかないかもしれない。

『……………』



それまで目をつぶっていたそのポケモンはゆっくりと目を開いた。すると魔法陣の端の方が輝きだした。

「！ な…何を…！？」

輝きがどんどん増していく。しかし突然、その輝きが消えた。代わりに輝いていた場所には新たなポケモンが出現していた。主にクサイハナやフシギソウだ。

「あ…アイツがポケモンを呼び出してるの！？」

レインがそう言った。

それはまるでポケモンがポケモンを“召喚”している様だった。

『グオオ…』

召喚されたポケモンは、すぐにハイク達に襲いかかってきた。

「！ ランクルス、サイコネシス！」

レインのランクルスはサイコネシスを使った。しかし、その１撃だけではポケモンは倒れなかった。

『ま…まだまだ…、最大出力！』

ランクルスはそう言い、さらにサイコネシスを放つ。召喚されたポケモン達は、その攻撃に耐えきれず、たちまち倒れた。

『……………』

すると、魔法陣の緑の輝きが弱まり、それまでたたずんでいた草のポケモンが動き始めた。

「だぶんアイツを倒さないと、ポケモン達は止まらない！」

ハイクは、レインにそう言った。レインは、うなずいて答えた。

『……………』

草のポケモンは、1歩1歩、歩きながら近づいてくる。

「ピョピョパンチ！」

ランクルスは拳を握りしめ、草のポケモンに殴りかかった。

『先手必勝！』

しかし草のポケモンは、素早い動きで難なくかわした。

「早い…！」

ハイクは思わずつぶやいてしまった。

「次、サイコネシス！」

ランクルスはサイコネシスを放つ。しかし、草のポケモンにはあまり効いていないようだ。

「効いてないの!？」

『……………！』

次の瞬間、草のポケモンから衝撃波のようなものが放たれ、ランクルスを襲った。

『な…！？うわぁ！』

ランクルスは少し吹っ飛ばされた。

（アイツ、強い…！たとえ攻撃が当たっても倒せないかも……。  
なら、一か八か…）

素早く動く草のポケモンは、サイコネシスを食らっても、ほとんど堪えていなかった。なら、もっと威力のある技をぶつけるしかない。

「ランクルス…」

レインはランクルスに、次の技を指示した。

「破壊光線」

ランクルスは体の一点に力を集中させた。その後、集中させた力を一気に解き放ち、赤い光線を放った。  
ドーン！という音と共に埃が舞った。

「やった！？」

埃のせいで草のポケモンの姿を確認する事ができないが、流石にこの爆発は避けきれないだろう、と思った。

「！　まただ！」

しかし、ハイクは上の方を指さしてそう言った。見るとそこには、草のポケモンがほとんど無傷で飛び上がっていた。

「…そんな…！」

レインは肩の力が抜けそうだった。

すると次の瞬間、飛び上がった草のポケモンの目が、紅く輝き出した。

「目が…光ってる…」

そう、ハイクがつぶやいた瞬間、ランクルスの足下から、植物の根のような物が、出現した。

『な………！？』

根は、たちまちランクルスの体を拘束した。

『うう…くそ…離せよ…！』

ランクルスはもがいたが、根はビクともしない。

『……………！！』

着地した草のポケモンは、エナジーボールを放つべく、集中した。みるみる内にエナジーボールが大きくなっていく。さらにエナジーボールは、通常の大きさに達しても、巨大化を続けた。

「！……デカイ！」

エナジーボールの大きさは、通常の2倍ほど……いや、それ以上かもしれない。とにかく、かなり大きくなっていた。

『……………』

草のポケモンは、その巨大なエナジーボール……メガエナジーボールをランクルスに放った。

「ランクルス！危ない！！」

体を拘束されているランクルスは、避ける事が出来ず、メガエナジーボールをもろ食らった。

『う……う……』

ランクルスは、拘束されたまま意識を失った。

「そんな……。ランクルスまで……」

レインは、座り込んでしまった。

「レイン……！！」

ハイクはレインに駆け寄ろうとした。その時、ハイクのモンスターボールからヒノアラシが飛び出した。

「ヒノアラシ！？……また勝手に……」

『ハイクさん！次はボクが戦います！』

「え！？そんな、無茶だ！」

『ボクだつて…戦えるんです！』

そう言うのと、ヒノアラシは草のポケモンの方へ駆け出した。

「ヒノアラシ、止める！」

ハイクの言葉を聞かず、ヒノアラシは突き進む。

『食らえ！火の…』

『……………！』

しかし、ヒノアラシが火の粉を放つ前に、草のポケモンはまた根を出現させた。

『うぐ…！そ…んな…！』

根は易々とヒノアラシを捕らえた。

「ヒノアラシ！」

ハイクは胸を突き刺すような感情に襲われた。このままではヒノアラシは…。

『…ハイク』

不意に誰かに話しかけられた。「えっ？」と声を出し、辺りを見渡す。

『俺だ』

するとハイクは、声の主が、ボールの中のジュカインだと気づいた。

「ジュカイン？中から話しかけているのか…？」

『出るぞ』

そう言つと、ジュカインはボールから出てきた。

「！…大丈夫なのか？怪我は…」

ハイクは、今日何度目かの言葉を口にした。ジュカインは何も言わず、草のポケモンの方を見た。

『…後は俺に任せろ』

その後、ジュカインはハイクにそう言った。

「え？何を…」

『あのシェイミは俺が止める』

ジュカインは草のポケモンをシェイミ、と呼んだ。ジュカインはあのポケモンの事を知っているようだ。

「止めるって…まだ怪我が治ってないじゃないか…！」

『……俺に心配は無用だ…』

ジユカインはそう言った後、シェイミに向かって駆け出した。

「ジユカイン！」

ハイクのこの叫びは、虚しく空を響かせただけだった。



“草”の召喚陣（後書き）

ジユカイン『absolute…』

ん？どうした、ジユカイン？

ジユカイン『この小説のタイトルだが…』

ああ、ポケットモンスター デステニーエピソード1 へ憎し  
みを砕く絆？

ジユカイン『…長すぎじゃないか？』

え、だってそれは、仕方ないじゃないですか。…僕だって結構前  
から気づいてたし…。

ジユカイン『せめて略とか考えたらどうだ？』

略？うゝん…略ねえ…。

ヒノアラシ『あ、あの…』

うお！ヒノアラシ！？いつの間に…！

ヒノアラシ『ま、前書きの時からいましたよ！』

そうだったけ？

ヒノアラシ『……………略、ポケエピ1、とかどうですか？』

おーそれいいね。いただき！

と、言う訳で…略してポケエピーという事で（＾－＾）

## 深紅のロープ（前書き）

今日はいつもより長めです。頑張りました

ジユカイン『…まあ、最後の方のはなくても良かったがな…』

そ、そんな事ないですよ！…たぶん。

## 深紅のロープ

「現在、ポケモンの進行は尚も止まっておらず、警備隊は苦戦を強いられている状態です。また、ジムの中に飛び込んで行った、ゴウガザルを連れた少年と少女の安否は、まだ分かっておりません」

カナズミジムの前、テレビカメラの前でアナウンサーはそう報道していた。

「ハイク君達…大丈夫かな…？」

それを横目に、ツツジは何も出来ずにソワソワしていた。

ハイクは一応、ホウエンリーグを制覇した現チャンピオンだ。…まあ、彼の顔を見て、1目でハイクだと分かる人は少ないのだが。大丈夫だと思っけていても、心配してしまう。

カナズミジムからは何度か爆発音が轟いていた。その度に聞こえる人々の悲鳴。いつもと同じ長さの時間が、今日はより一層長く感じる。

「早く帰ってきて…」

ツツジには祈ることしか出来なかった。

『…行くぞ!』

ジユカインはシェイミに突っ込み、ドラゴンクローで攻撃した。ガンツと地面に叩きつけられる音がしたが、シェイミは素早くそれをかわしていた。

『…速いな』

シェイミの動きを見て、ジユカインは少し感心していた。

「ジユカイン…エナジーボールだ」

と、ハイクはジユカインに話しかけた。

『ハイク…? 止めに来たかと思ったぞ…』

ジユカインはハイクにそう、言った。

「…俺、昔からよく誰かに止められても無茶をする、て言われるんだよな。…お前と同じさ。だから、なんとなく気持ちが分かるんだ」

ハイクは、少し笑顔でそう言った。

『俺はアンタとは少し違う…。目の前に倒すべき相手がいるから戦っている』

しかしジュカインはプイツとそっぱを向き、ハイクにそう答えた。  
「素直じゃないなあ。誰かを助けたい、って言うちゃえばいいのにさ」

ハイクは苦笑しつつも、そう言った。

『…悪いな。…俺は不器用なんだ』

ジュカインは冗談めかした口調でそう言った後、もう1度シェイミと向き合った。

『エナジーボール…だったな？』

ジュカインはハイクに確認した。

「ああ。アイツは素早く動き回っているから、攻撃を当てるのは難しい。エナジーボールで上に飛び上がらせてから、ドラゴンクローで追撃するんだ。流石に空中じゃ、アイツも自由に動けないだろう？」

ハイクの妙に説得力のある案を聞いたジュカインは、フツと苦笑した。

『……どうやらアンタがチャンピオンという事は本当らしいな』

感心したジュカインが、そう言った。

「誉め言葉として受け取っておくよ」

その後、ジユカインはハイクの指示通りに、シェイミにエナジーボールを放った。するとハイクの思った通り、シェイミは上に飛び上がり、攻撃をかわす。

『よし…』

ジユカインも飛び上がり、シェイミに接近した。その後、ジユカインは、ドラゴンクローを使う為に構える。ジユカインの爪が紅く光り、独特のオーラを放った。そしてその爪でシェイミに斬りかかった。やはりシェイミは上手く身動きする事が出来ず、直撃した。シェイミは吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「よし！行けるぞ、ジユカイン！」

シェイミにダメージを与えた後、ジユカインは拘束されていたランクルスとヒノアラシの近くに着地した。

そして、何も言わずに拘束していた根をリーフトンファアで斬り裂いた。

『助…かった…』

ヒノアラシは力なく座り込み、ランクルスは倒れこんだ。

「レイン！早くランクルスを！」

それまでほぼ放心状態だったレインはようやく我を取り戻し、ランクルスをボールに戻した。

「ご、ごめんハイク…。私…何だか頭の中が真っ白になって……」

「大丈夫。無理もないよ」

申し訳なさそうに言うレインに対して、ハイクは励ますように、そう言った。

ランクルスとヒノアラシを助けた後も、ジュカインはシェイミに攻撃を仕掛けていた。ジュカインのドラゴンクローを食らい、ダメージが残っているせいか、シェイミは今まで通りに攻撃をかわすが、動きが鈍くなっているようにも感じる。

『ハ…ハイクさん…』

するとヒノアラシが、ヨロヨロと近づきながらも弱々しくハイクに声をかけた。

「大丈夫か、ヒノアラシ!？」

心配したハイクは、それに応じる。

『ごめん…なさい。ボク…役に立てなくて…』

ヒノアラシは震える声で、ハイクに謝った。

「…お前が責任を感じなくていいんだよ。後はジュカインに任せ、お前は休んでくれ」

そう、ハイクは言った。ヒノアラシはうつむいたまま、モンスターボールに戻った。

「さて…」



ヒノアラシを戻した後、ハイクは立ち上がり、ジユカイン達の方を見た。

その間、ジユカインはシェイミに、攻撃しつづけていた。

『はぁ！』

『……！？』

シェイミはいよいよ攻撃が避けきれなくなり、ジユカインのドラゴンクローに当たった。

『よし、動きが読めてきた…』

ジユカインは手応えを感じていた。

『………！』

シェイミはヨロヨロと立ち上がると、ジユカインを睨み付けた。するとランクルスの時と同じように、ジユカインの足下から、植物の根が出現した。

『…芸のない奴だな』

ジユカインはそれを察してたかのようにリーフトンファアを構えると、素早く根を斬り裂いた。

『……………！！』

負けじとシェイミも、次々と根を出現させるが、ジユカインはリ

ーフトンファアでそれを蹴散らしつつ、シェイミに接近した。そしてギリギリまで接近してから、渾身のドラゴンクローで攻撃した。シェイミは避ける事が出来ず、吹っ飛ばされた。

「よし、何とか押してるな…」

『！くっ…』

しかし、ジュカインは攻撃した後、顔をしかめて包帯が巻かれている腹部を押さえた。

「ジュカイン？傷が痛むのか！？」

ハイクが心配したが、『大丈夫だ』とジュカインは言った。

『それに、見てみる…』

「え？」

シェイミはまた根で攻撃して来たが、難なく斬り裂いた。するとシェイミも、顔をしかめてフラついていた。

『エナジープラント。奴は自らの命を削り、植物を異常に成長させている。このままじゃ自滅するだろう』

ジュカインはストレートにそう、言った。

「そんな！早く止めないと…」

しかしハイクは、相手が命を狙って襲いかかっているのにも関わ

らず、シェイミの身を心配していた。

『…やっぱり、アンタ、変わってるな…』

ジユカインは苦笑しながらそう言った。

「へ…？」

『だが、俺は嫌いじゃないがな。そういうの…』

そう言つと、ジユカインはシェイミに最後の攻撃を仕掛けに行つた。エナジープラントの使いすぎのせいでフラついていたシェイミは、ジユカインのドラゴンクローを避ける事が出来ず、吹っ飛ばされた。シェイミは、魔法陣の近くまで飛ばされ、意識を失つた。

「やった！」

レインは弾けるように、そう言った。

『心配するな。死んでない』

ハイクに気を使ったのか、ジユカインはそう言った。

「…やっぱり似てるよ。俺とお前…」

ハイクはジユカインの好意が嬉しかった。次々と起こる事態を前に曇っていた心が、少し晴れる瞬間だった。

「！ ハイク！」

その時、レインは驚いた様子でハイクに声をかけた。

「どうした、レイ……！」

レインの名前を言い切る前に、驚いている理由が分かった。魔法陣が、また輝いているのだ。

「今度は…なんだよ…」

そこに現れたのは、1人の人物だった。先程 戦ったローブの人物と似たローブを着ているが、深紅の色をしている。顔は、やはりフードを深くかぶっているため、確認することが出来なかった。

「！ お前は……？」

ハイクが問いかけたが、深紅のローブの人物は無視し、倒れているシェイミを担ぎ上げた。そして振り返り、魔法陣に向けて歩きだした。

「待て！」

ハイクが引き留めようと声をかけたが、深紅のローブの人物は、チラッとこちらの方を向いただけで、歩き続けた。

深紅のローブの人物は、魔法陣の中央で立ち止まり、魔法陣に手をかざした。すると魔法陣は、今まで以上につよく輝き出した。

「！ くっ……」

ハイク達は、思わず手で顔を覆った。

――輝きがおさまった頃には、深紅のローブの人物も、シェイ

ミも、魔法陣までもが消えてしまっていた。

「消えた…！？」

驚きのあまり、それ以外の言葉が見つからなかった。

メキメキ…

「！ 何の音だ！？」

今度は、妙な音が空間に響いた。

「あ、あれ！」

レインが指差す方を見ると、音の正体があった。シェイミによって異常に成長してしまった植物が、急激に枯れて崩れていく音だった。

「ヤバくない、これ！？」

このままでは、枯れた木々の下敷きになってしまう。

『…こつちだ』

気がつくと、ジュカインが手招きしていた。そこは一カ所だけ草木が生えていない場所…魔法陣があった所だった。

「レイン！」

ハイクはレインと共に、必死になってそこを目指した。

そしてハイク達が辿りついた瞬間、草木が全て枯れ果てた。

「……………」

ハイク達は、少し原形を取り戻したジムを無言で眺めた。色々な気持ちが入り乱れ、言葉が出なかった。

「おい、大丈夫か!？」

ハイク達は、救助隊のその言葉で我を取り戻した。

その後、ハイク達は救助され、ジムから脱出する事に成功した。

ジムの外に出ると、真っ先に駆けつけて来る人物がいた。

「2人とも！よく帰ってきてくれたね…。心配したのよ！」

ツツジだった。

「す、すみません」

ハイクは申し訳なさそうに謝った。

「大丈夫ですよ！ハウエンリーグチャンピオンの、ハイクがついていましたから！」

レインはかなり大きな声で、そう言った。

「ちょ、レイン！声が大きい……」

「え！？君がああチャンピオンのハイク君！？」

近くにいた女性がいち早く反応した。

「何！チャンピオンだって！？」

「チャンピオンがここにいいのか！？」

すると付近の人々がどんどん集まってきた。

「すげー！本物のチャンピオンだ！」

「お、俺サイン貰おうかな……」

人々は次々と数を増やしていく。

「……だから言わないで欲しかったのに……」

レインを横目に、ハイクはそうつぶやいた。レインは「ごめんね」と顔の前で両手を合わせて謝った。ハイクはレインを少し恨んだが、それを見て渋々レインを許してしまった。

その後、ハイクは1時間近く沢山の人々にもみくちゃにされた。  
……ある意味 今日で1番疲れる時間だった。



## 深紅のロープ（後書き）

今回で第2章は終わりです。次回から第3章に突入です！  
一応、1章 6話ペースで進んでいます！

ジユカイン「…いつ崩れるか分からないがな…」

……否定はしない。

ヒノアラシ「いや、そこは否定しなきゃ駄目ですよ！」

次回をお楽しみに！  
感想も待ってます！

深まる絆（前書き）

第3章、突入です！

サブタイトルがなかなか思いつきませんでした…（汗）

## 深まる絆

「ハアゝ…疲れた……」

ハイクは、宿のベッドにダイブした。

沢山の人々にもみくちゃにされた後、ハイク達は1度ポケモンセンターに向かった。レインのゴウカザルとランクルスのためだ。今は、2匹とも意識ははつきりとしているらしく、すぐに良くなるらしい。しかし、念のためもう少し綿密に検査を行うらしく、時間がかかるようだ。その間、レインは「ゴウカザル達のそばにいたい」と、ポケモンセンターに残るらしく、ハイクと彼のポケモンだけが、先に宿に来ていたのだ。

ハイクはチラリと時計を見てみた。…現在、夜の9時。寝るのに早い時間だ。しかし、疲れきったハイクの体に容赦なく睡魔が襲いかかり、今にも眠ってしまいそうだった。

そんな中、ハイクの視界にあるものが入り、眠気が覚めてしまった。それは宿の小さな部屋で、申し訳なさそうに ちょこんと座る、ヒノアラシの姿だった。

「ヒノアラシ？」

ハイクは体を起こし、ヒノアラシの姿を確認する。

ヒノアラシも、治療を受けたのだが、1番 傷が軽かったらしく早めに終わり、今はこうしてハイクと共にいた。

『……ハイクさん…あの…えっと……』

ヒノアラシは何かを言おうとしたが、言葉がつまってしまい、う

つむいてしまった。…なんとなく気まずい雰囲気、辺りを覆う。  
今の季節は冬。カナズミジムの一件のせいで火照っていた体が、  
冬の冷たい空気によって冷やされる感覚が気持ちよかったが、それ  
も気にならなくなるくらい重い雰囲気だった。

『ボク…その…すみませんでした!』

沈黙の末、ヒノアラシが最初に口にした言葉がそれだった。

深々と頭を下げているヒノアラシを見て、ハイクは何故自分が謝  
られているのか分からなかった。

「ちょ…ヒノアラシ!? どうしたんだよ、いきなり…」

驚いたハイクが声を上げる。

『だって…ボク…自分の感情だけに身を任せて…突っ走って……。  
皆に迷惑をかけてばかりじゃないですか…』

どうやら先程のシェイミの時の事を気にしているようだ。意気込  
んで突っ込んだのは良いものの、何も出来ずにやられてしまった事  
で、落ち込んでいるらしい。

ピンツと糸を張ったような緊張感の中、ハイクは慰めの言葉を探  
していた。

「…ヒノアラシは頑張ったって。テツシードの時も…」

『ボクなんか弱虫で…戦いもてんでダメで…役に立とうと思って  
もすぐに空回りしちゃう……』

ヒノアラシ耳にはハイクの言葉は全く入っておらず、話はどんど

んネガティブな方向に進んでしまう。

「（うーん…まずいな…どうしたら良いんだ…）」

とにかく、ヒノアラシを立ち直らせようと、ハイクは四苦八苦し  
ていた。

『…ボクなんて…何の役にも立てない、使えない奴、ですよね…』

しかし、自分の事をそんなふうに言うヒノアラシの姿を見て、ハ  
イクの中の何かが吹っ切れた。

「そんなことないよ！」

ハイクは思わず むきになり、大きな声を出してしまった。ビク  
ツと驚いたヒノアラシは、愚痴を止めた。

太陽は完全に沈み、部屋の電気もつけていないので、本来なら真  
っ暗のはずだが、窓から漏れる月や街の明かりのお陰で、視界に不  
自由は無かった。

「……確かにヒノアラシは、少し臆病で、戦いなんて向いてない  
かもしれない…」

高ぶった感情を抑えるべく、ハア〜と息をはきだしたハイクは、  
ヒノアラシに、そう語りかけた。

「…でも、ヒノアラシは、俺達の誰にも負けない優しい心を持っ  
てる…。それだけで、十分だよ…」

ハイクは、慰めるようにそう言った。

『優しい…心…?』

「そう…。まだ会って1日も経っていないのに、苦しめられてるゴウカザルの姿を見て、真剣になって怒ってくれたじゃないか…。人にも、ポケモンにも、そういう優しい心が必要なんだよ。使える使えないとかじゃなくてさ」

『……………』

ハイクのまつすぐな眼差しと言葉を受けたヒノアラシは、黙り込んでしまった。

「……………もし、借りとか、責任とか感じて俺達について来てくれてるんなら、無理に一緒に来なくてもいいんだよ……………」

少しの沈黙の後、ハイクはヒノアラシに、そう告げる。

『そんな…そんなんじゃないんです!』

ヒノアラシは焦るように答えた。

『…ボクも…誰かの役に立ちたい…、皆を…助けたいんです!』

ヒノアラシは、心の底から沸き上がる想いを言葉にして、ハイクにぶつけた。

『…だから、もう少しだけ、ハイクさん達と一緒にいてもいいですか……………?』

ヒノアラシは、モジモジとハイクに尋ねた。

「……ああ。勿論！でも、もう自分をそんなふうに考えちゃ駄目だからな」

ハイクは笑みを浮かべ、そう答えた。

『……ありがとうございます！』

ヒノアラシも笑みを浮かべて、それに応じるのだった。

こうして、ハイク達の旅の1日目の夜が終わった。

……まだまだ多くの謎が残されている。

戦いは、始まったばかりだ……。

## 深まる絆（後書き）

今回は短めでしたね。はい。

では、感想、待ってます！



## 次の目的（前書き）

すみません。更新 遅れました！

そろそろテストなんで、勉強しないとヤバイんで（汗）

今回は、自分が思ったより若干長めでした。

ジユカイン『頑張りました …とか言っなよ…』

…ジユカインが言つと、恐ろしく気味が悪い……。

それでは、どうぞ！

## 次の目的

朝日が窓から部屋に注ぎ込む時間、ハイクは目をさました。

「う…ん…この格好のまま寝ちゃったか…」

ハイクは起きた時の自分の格好を見て、そうつぶやいた。コートも脱がず、鞆も降ろさず眠ってしまったようだ。

ちなみに、ハイクの鞆は大きめのショルダーバッグで、中には空のモンスターボールや、傷薬などが入っている。（傷薬は切らしているようだ。）ハイクは、出かける時いつもこのバッグを持っている。本人曰く、何かあった時に便利だかららしい。忠実な人物だ。

『……起きたか』

フと見ると、ジュカインがモンスターボールから出ている事に気づく。

「ジュカイン？」

ジュカインは、腕を組んで部屋の壁に寄り掛かっていた。

『…全く、アンタは見れば見るほど変わった奴だな』

ジュカインはフツと苦笑しつつ、ハイクにそう言った。

「へ…？」

『昨日のヒノアラシの事だ』

「あ…ああ。聞こえてたのか。……そんなに変わってるかな…？」

ハイクは少し考え込んだ。

『少なくとも、かなりのお人好しだな…』

ジュカインがからかうように、そう言った。それを聞いたハイクも、苦笑して返した。

『…それで、これからどうするんだ？』

するとジュカインは、いつもの表情に戻ると、ハイクにそう尋ねた。

「う…ん、まずは情報収集かな。Nの手がかりも見つけないといけないし…」

昨日の数時間で色々な事がありすぎて手が回らなかったが、Nを探すという1番の目的は果たされていない。

「さてと…」

現在AM8:00。まだ出かけるのには早い時間だが、ただボ―ツとしているのももったいないので、外に出る事にした。ジュカインをボールに戻し、部屋を出てフロントの方へと向かった。

「あ、ハイク。おはよう」

そして、フロントのソファ―に腰掛けているレインに声をかけられた。

「レイン！いつ帰って来たんだ？ゴウカザル達は…」

昨日、1人レインは、ポケモンセンターに残ったので、ハイクはその事が気になった。

「うん、昨日の夜の10時半くらいかな…。ゴウカザル達はもう大丈夫だって！」

笑顔で話すレインを見て、ハイクはホッとした。

「そうか…。良かったな。大きな怪我にならなくて」

ハイクも笑顔で、そう答えた。

「…俺はカナズミシティでNの手がかりを探しに行くけど…、レインはどうする？」

と、ハイクはレインに尋ねた。まだ朝早いので、無理に行く必要が無いからだ。

「あ…、Nの事 忘れてた…。うん、私も行くよ」

レインはすっかりNの事を忘れてたらしい。ハイクは少し呆れた反面、色々あったからしょうがないか、という気持ちもあった。

「じゃあ、行こう」

ハイク達は、宿を後にした。

冬の朝は寒かった。肌を刺すような冷たい空気がハイク達を襲う。1歩 歩く度に、顔などの肌が露出している部分が冷やされていく。その寒さに耐えつつ、ハイク達はNを探した。

まだ早い時間のハズなのだが、意外と人通りは多い。街の賑やかさが収まる時間は遅いが、目覚める時間は早いようだ。

カナズミシティを回り、Nの事を聞いて回ったが、やはり有力な情報は手に入らなかった。

「はあ…」

思わず溜め息が出るほどだ。

そんな事をしている内に、カナズミジムの前まで来ていた。

「…ツツジさん？」

そこには、ジムリーダーのツツジがいた。

「あ、2人とも、おはよう。早いね」

ハイク達に気づいたツツジがそう言った。

「おはようございます。…どうですか、ジムのほうは…？」

ハイクは静まりかえったポケモンジムを見て、ツツジに尋ねた。

「…まだ復興が終わってなくて…。しばらく中には入れないわね」

ツツジはそう答えた。

「大変そうですね…」

「でも、ハイク君達のお陰で助かったわ。ありがとう」

「へ？あ、いや…。俺の方こそ…、無茶して…。心配かけてすみませんでした」

昨日の事を思い出し、悪く思ったハイクは謝った。

「いいのよ。帰って来てくれたんだし…」

しかし、ツツジはそう言ってくれた。それを聞いたハイクの表情が、少し晴れた。

「ところでツツジさん。ちょっと聞きたい事があるんですけど…」  
すると、レインが口を開いた。

「何？私に分かる事なら、答えるよ」

「ありがとうございます。私達、人を探してて…」

「人？どんな人なの？」

「え…と、髪は緑色で長くて、黒っぽい帽子に白い上着を来た男の人なんですけど…」

レインはNの特徴を説明した。

「うーん…見たことないね…。そんな人…」

「そう…ですか」

結局、ツツジからも有力な情報は得られなかった。

その後、ツツジと別れたハイク達は、カナズミシティのデパートに来ていた。何だかんだでもう10時になっていた。  
カナズミデパートは、ミナモデパートほどではないが、結構大きいうえに、色々な商品が揃っている便利なデパートだ。

ハイクは、切らしている傷薬を買いに立ち寄ったのだ。

「うーん、すごい傷薬でいいかな…。満タンの薬はちょっと高いし…」

ハイクが傷薬を選んでいると、

「見てー！ハイク、もふもふー」

近くのファンシーショップから、ムンナのぬいぐるみを抱えたレインが、そう言った。

「ムンナのぬいぐるみ？どれどれ…」

ハイクもぬいぐるみに触ってみた。

「おお、本当だ。気持ちいいな」

なんとも言えない感触に、思わず表情が緩む。

周りから見れば、2人はカップルのようだが、そういう事に関してはかなり鈍感なハイクと、やや呑気なレインは、あまり気にしていない。

そんなこんなで、すごい傷薬をいくつか買い、カナズミデパートから出た。

「…これからどうする？」

レインが尋ねたが、ハイクは答える事が出来なかった。完全に手がかりもないので、何処に行ったら良いものか…。



『…ハイク』

考えてると、モンスターボールからジユカインが出てきた。

「ジユカイン？…いい加減、勝手に出るの止めろって…」

『１１５番道路だ』

「え？」

『力を貸してくれそうな奴を知っている。１１５番道路に向かつてくれ』

珍しくジユカインの方から要求してきたので、ハイクは少し驚いた。

１１５番道路と言えば、カナズミシティを出て、すぐの所だ。

「１１５番道路か…。よし、そこに向かおう」

とりあえず一行は、１１５番道路に向かう事にした。

## 次の目的（後書き）

ヒノアラシ『ほのぼのって感じでしたね』

…たまにはいいですね？

感想、書いて頂けるとすごく嬉しいです！

ジユカイン『いまだに0件だしな…』

き、気にしている事を…！

## 本当に思っていること（前書き）

他の作者さんの小説を、読ませて頂きました。5000文字や、8000文字超えている方、結構いますね。

僕もそんな小説を書いてみたいな……、と思いますが、なかなか実現できずにいます（涙）

## 本当に思っていること

ハイク達は、115番道路に来ていた。ジユカインが言うには、ここに力を貸してくれそうな人がいるらしい。今のハイクの戦力では、この先戦っていくのには少し不安があった。

ジユカインは力を奪われたままだし、ヒノアラシは戦いにはてんで向いてない。そんな彼らを無理に戦いに投じる訳にはいかないのだ。

そもそも敵が1人なのか、複数いるのかも分からない状況だ。そんな中での戦力の増強は、ありがたかった。ひよっとしたらNの手がかりも得る事が出来るかもしれない。

115番道路はカナスミシティの北側の出入り口から出た所にある道路だ。木々に囲まれた道を抜けると、明るい青の海が見えてくる。夏には海水浴をするために、沢山の人々が集まり、盛り上がりを見せる。この辺では有名なスポットだ。もっとも、現在の季節は冬なので人は誰もいないが……。

と、思ったが、そこには人の代わりに1匹のポケモンがいた。

青い体に、灰色で固そうな甲羅を背負っている。首は長く、頭には小さな角を思わせる突起物がついていた。

「あのポケモンが力を貸してくれそうっていう……」

『……そうだ。俺の友人でな……』

ハイクとレインは、そのポケモンを知っていた。結構有名なポケモンだ。

タイプは水と氷で、乗り物ポケモンとも称されるポケモン、ラプラスだった。

体長はかなり大きく、背中の甲羅には、ハイクとレインぐらいなら、楽々と乗れてしまいそうだ。まさに、乗り物ポケモンという名前にふさわしいポケモンだろう。

『…待っていましたよ…。貴方達を…』

「え…？」

ラプラスはゆっくりと目を閉じ、ハイク達にそう告げた。

待っていた、とはどういう意味なのだろう？

声と雰囲気からして、恐らく雌だろう。静かなしゃべり方からも分かるように、人のいい性格のようだが、どこか不思議な雰囲気を出している部分もあった。

『…そんな不思議そうな顔をしないで下さい。……貴方達の噂は聞いていますから。…ハイクに、レイン、ですよね？』

ハイクの妙な視線を感じたのか、ラプラスは苦笑しつつ、そう言った。

「噂…？」

噂を聞いている、と言う言葉にもハイクは疑問を感じた。

ハイク達がミシロタウンから旅立ったのは昨日だ。たった1日でこんな所にまで噂が広がるものなのだろうか？

『……ラプラスは顔が広いんだ』

そんな疑問にジユカインが答えた。

「ただけ広いんだよ！　と思わずツツコミそうになったが、初対面のラプラスにいきなりツツコム訳もないので、ハイクは我慢した。」

『そして、ハイク……。貴方が私達ポケモンと会話が出来る、という事も、知っています』

「……知っていたのか……」

ハイクは少し驚いた。一体誰から聞いたのだろうか？

『……ところで、ラプラス』

そこで、ジユカインが本題を持ち掛けた。2匹の表情が、真剣なものになる。

『あんたも気づいているだろ。ハウエンの異変に……』

ジユカインの問いかけに対し、ラプラスは『ええ……』とうなずいて答えた。

『……昨日から、ですか。急に風の流れが変わりました。と、同時に感じた事のない異常な力が、この、ハウエンから流れてくる事を感じました。……強力すぎる力です。この力を感じた私以外のポケモンは、怯えてハウエンから離れていきました……』

ラプラスの話の内容は、ハイクにとっていまいちピンっとこなかったが、ハウエン地方に異変が起きている、という所は理解出来た。

そんな事は、ハイクでも感じていた。急に目の前に伝説級のポケモンが現れ、自分に襲いかかってきたし、本来 生息していないポケモンも、ハイクの前に立ちふさがった。……目の前で、ポケモンが息絶えた事もあった。今 思い出してみると本当に酷い状況だった。感情が高ぶり、握る拳にも自然と力が入る。

ハウエン地方は、一体どうなってしまったのだろうか？

「…君は知っているのか？」

ハイクはラプラスに尋ねた。

「…ハウエン地方の異変の、全ての根源を……」

なんとしてでも根源を絶たなければならない。これ以上、被害を増やしたくなかったのだ。

しかしラプラスは、首を横に振った。

『…残念ながらそこまでは…。分かっているのは、あのポケモン達は力に捕らわれ、己を見失っている、という事だけです』

「…ちから…」

異常な力。紅い波動。ローブの人物。カナズミジムで起きた出来事は、これから先 忘れられそうにない。

自分の意思ではなく、何者かの命令を忠実に実行しているだけのポケモン。彼らは、まるで心を失ってしまったかのような瞳をしていた。

それがラプラスの言う 力の影響なのだろうか？

そもそも、あの紅い石はなんだ？あの石の波動のせいで  
ナットレイは 力 を手にしてしまった。そして息絶えた。それは  
明確な事実だ。

と、いう事は、あの石がラプラスの言う 力 の正体なのだろうか？

……考えても分からない。今は情報が少なすぎるのだ。

『……ラプラス……。力を貸してくれないか……？』

すると、ハイクが言おうと思っていた事を、先にジュカインに言  
われてしまった。

『……すべての根源を見つけるためにも、あんたの力が必要なんだ』

鋭い眼差し、真剣な口調でジュカインはラプラスにそう提案した。

『……私も、そのつもりでここに来たんです……』

しかしラプラスからは、あっけなく答えが返ってきた。

『……私も、故郷であるホウエンのために何か出来る事をしたい。

そう思ってたんです。……しかし、私1人の力じゃ何もできず、もど  
かしさを感じてしました。……そんな中、貴方達の噂を耳にしました。  
力に捕らわれてしまったポケモン達を前にしても物ともせず、平和  
を取り戻すため、真実を追い求めて前に進む……。そんな話を聞いて、  
自分がついていけるのは彼らしかない……。そう思ってたんです』

そんな風に思っていたのか。ハイクは思った。



しかし、少し大袈裟かもしれない。

真実を知りたい、と言う事は事実だが、ハウエン地方を救うとなると、微妙なところだ。

ハイクはヒーローでは無いのだ。

『……ですから、微力ながら私の力も使って下さい……』

ラプラスは、頭を下げてそう言った。こっちがお願いするつもりだったのに、逆をお願いされてしまったのだ。

「……俺なんかで……いいのか？」

しかし、ハイクは自信をなくしていた。自分はラプラスが思うほど、強くないのだ。

「……確かに、救えるものなら救いたい……。けど、自信がないんだ。……俺は……君が思っているほど、強くない……」

そもそも、自分は本当にハウエン地方を救いたいと、思っているのだろうか？ただの自己満足ではないか？

そう思うと、不安になってきていた。

しかし、ラプラスはそんなハイクを見て、優しく微笑み、

『……私は貴方の力に引かれた訳ではありません……。貴方の、心に引かれたのです。……皆を救いたい。そんな、優しい心に……』

そう答えた。

ラプラスの言葉を聞き、ハイクの心が揺らぐ。

ハイク自身も、本当に思っているか自信がなかった事を、信じてくれたのだ。

「…優しい心…か。俺自信も迷っていた…俺の心を…信じてくれる人がいる……。なら…俺は……」

信じてくれている人がいる。なら、その気持ちを裏切りたくない。

……俺は救いたい…。助けたいんだ。…ホウエン地方も…。俺を信じてくれている皆も…。

今のハイクは、心の底からそう思っていた。

自信なんて関係ない。救いたいと言う心だけでも、道は開けるのだ。

「……分かった」

ハイクはラプラスに告げた。

「…君がよければ…俺と…一緒に行こう…!」

彼女も自分と同じだ。誰かの力になりたいと思っている。皆を救いたいと思っている。

そう思っていると、不思議とその言葉が溢れてきた。

ハイクの言葉に対し、ラプラスはうなずいて応じた。

ハイクはモンスターボールを取りだし、ラプラスにかざす。ボールから放たれた赤い光がラプラスの体を包み、ボールに吸い込まれていく。

ボールは何度かコトコトと動き、やがて動きを止めた。

「……………」

ハイクはその様子を無言で見つめていた。

「ねえ、何だつて？」

話の内容が気になったレインが、そう尋ねてきた。

「分かったんだ。……俺の心が……」

ハイクはレインに、それだけを伝えた。

今はそれ以外の言葉を言ってしまうては、いけないと思ったから……………。

## 本当に思っていること（後書き）

何か気になる点がございましたら、お気軽に感想の所にお書き下さい。

お願いします。

## 2つの道ともう1つの戦い（前書き）

更新遅れました！すいませんm（――）m

ラプラス『もはや、2日に1話ペースがかなり崩れてますね』

…はい。

それでは、どうぞ！

## 2つの道ともう1つの戦い

ラプラスを仲間に加えた後、話はこれからどうするのか、という方向になった。ラプラスも、Nについては何も知らないようで、手がかりが何もない事に変わりはなかった。

「なあ、レイン。俺の手持ちも充実してきたし、ここは2手に分かれてみないか？」

ハイクは思い切ってレインにそう提案した。

この広いハウエン地方で、2人でかたまつてNを探しては、らちが明かない。手分けして情報収集した方が有効だと考えたのだ。自分が無理を言っているのは分かっている。しかし、一刻も早くNを見つきたいこの状況で、この提案をレインに承知してほしかった。

「…うん、私もそうした方がいいと思う。携帯もあるから、連絡もとりにあえるしね」

しかしレインは、あっさりと提案を呑んだ。どうやらハイクと同じことを考えていたようだ。これなら話が早い。

「それじゃあ、さっそく分かれて行動しよう。レインは、このままハジツゲタウンの方向に向かってくれ。俺は116番道路に行く」

と、ハイクはレインに言った。

ハジツゲタウンは、115番道路を北に進んだ所のある「流星の滝」を越えた所にある農村だ。116番道路は、カナズミシティの

北西の出入り口を出た所にある道路なので、1度カナズミシティに戻らなくてはならない。なので、ここでレインと別れる必要があった。

「うん。じゃあここでお別れだね」

「ああ。何かあったら、携帯に連絡くれ」

「分かった。じゃあ、私もう行くね」

「うん。気をつけるよ」

「ハイクもね」

こうして2人は分かれて行動することになった。しかし、この時はまだ、この先ハイクに大きな悲劇が襲うという事を、知る予知もなかった。

時は、1日前の黄昏時に遡る……。

1人の青年が、104番道路からカナズミシティの様子を窺っていた。背中からは冷たい汗が流れ落ちている。かなり焦っている雰

困気だった。

ホウエン地方の異変が起こってから、もうだいぶ経つ。ミシロタウンの次はカナズミシティまでもが被害を受けていた。

彼の傍らには、1匹のポケモンがいた。2本脚で直立している、黒い狐のような姿をしており、頭の長くて赤い体毛は、まるで髪の毛のように揃えられていた。体長は青年よりも小さめだ。

「くそ……。こんな事が……。まさか本当に予言が……」

青年はそう、ブツブツとつぶやいていた。

今は治まっているようだが、カナズミジムの方からは、ポケモンの鳴き声と、爆音が轟いていた。自ら赴いて真相を確かめたいが、今、自分の姿を見られるのはまずい。自分の横にいるポケモンの力を使えば、なんとかかごまかせるかもしれないが、騒ぎに巻き込まれた場合は対処しきれない。

行く、行かないという言葉が、自分の中で振子のように揺らいでいた。その時、また爆発音が轟き、人々の悲鳴が木霊した後、ある少女と少年の声が青年の耳に飛び込んできた。

「ハイク!?」

「ポケモンジムに突入する!中に絶対 何か原因があるはずだ!」

ハイクだって!?まさか彼がここに……?ジムに突入なんて、そんな無茶な……!

青年はいてもたってもいられず、飛び出して行きそうになった。しかしそんな感情も、背後から聞こえた何かの物音によって抑え込



まれた。

「！ 誰だ！？」

「ひいつ！」

物音の正体は、白衣を着た研究員のような姿をした1人の男だった。どうやら、手に持ったトランクケースを何処かに運ぼうとしていたようだ。

男は、青年の姿を見たたん、カナズミシティに走って逃げ込んだ。

「待て！」

青年も走って男を追った。彼の後に、黒い狐のポケモンも続く。男は、路地裏に逃げ込み、青年を振り切ろうとした。しかし行き止まりにまで来てしまい、立ち往生してしまった。

やがて青年は男に追いついた。

「や…やめろ…。来るなあ！」

男は後ずさりしつつ、青年に叫んだ。

「落ち着いて…。なんで逃げたりしたんだ？」

青年が質問したが、男は聞く耳を持たない。抵抗するかのように、モンスターボールを取り出し、ポケモンをくり出した。棺桶のような姿をしたポケモン、デスカーンだった。

「！ くそ…。ゾロアーク！」

ゾロアークと呼ばれた黒い狐のポケモンは、青年の前に出てきた。グルル…と唸り声を上げ、デスカーンに威嚇している。

「で…デスカーン、し…シャドーボール！」

先に動いたのはデスカーンだ。黒い球体をゾロアークに向けて放った。

「ゾロアーク、かわせ！」

ゾロアークは大きくサイドステップで難なくそれをかわした。

「そ…そんな…。もう1発…」

男はもう一度デスカーンにシャドーボールを使うよう、指示した。

「ゾロアーク、影分身だ」

しかしそれより早く、ゾロアークが影分身を使用した。ゾロアークの体が霞み、次々と分身を生み出していく。デスカーンは狙いを定める事ができず、辺りをキョロキョロと見ている。

「ナイトバースト！」

その隙にゾロアークは、デスカーンに暗黒の衝撃波を飛ばし攻撃した。

効果抜群。ナイトバーストを食らったデスカーンは倒れた。

「ば…馬鹿な……」

男は、信じられない というような顔をし、ヘナヘナと尻餅をついた。その際、手に持っていたトランクケースを地面に落としてしまった。地面に落ちたトランクケースはガラガラと音を立てて滑り、青年の足元で動きを止めた。

「?…トランクケース?」

青年はトランクケースを拾い上げ、フタを開けて中を確認しようとした。

「ま、待て!中を見ては…」

男が止めようとしたが、青年は無視し、ケースを開けた。

「!…なんだ、これ?」

中には不気味に紅く輝く石が入った、透明なケースが6つ入っていた。見る限り、決していい物とは言えないだろう。

「これは一体なんだ!?!どこに運ぼうとしていた!?!」

青年は男に質問した。思わず声にも力が入る。

男は、ビクツと体を震わせてから、

「し、知らない!私はただ白いローブの男に、それを115番道路まで運んでくれと頼まれたただけ!本当だ!だから助けてくれえ!」

と言った。

「白いローブの男…？」

青年は話のその部分が気にかかった。白いローブの男とは、誰のことだろう？

「そ、そうだ！その石！」

すると男は石を指さしながら、しゃべりだした。

「それから出る特殊な波動が、ポケモン達を凶暴化させているみたいなんだ！」

「！なんだって！？」

それを聞いた青年は驚愕した。

石から出る波動がポケモン達を凶暴化させている？どついう事だ？そもそもなんでこの男はそんな事を知ってるんだ？

青年は疑問に思ったが、深く追求はしなかった。

「……分かった。もういつてもいい」

男はこれ以上、何も知ってそうになかったので、青年は男を逃がす事にした。男はそれを聞いた途端、慌てて立ち上がり、デスカーンをボールに戻してから、そそくさとその場から立ち去った。

何が起きている？くそっ！情報が少なすぎる！…1度調べた方がよさそうだな……。

青年…Nは石を眺めながら、そう思った。

その後、彼はすぐに、カナズミシティを後にした。  
……………長居  
は禁物だ。

2つの道ともう1つの戦い（後書き）

物凄くグダグダ……すいません。

では、感想、待ってます！

passed memory - 異変の1日目 - (前書き)

更新速度がグチャグチャ… (焦)

今回の話は、ハイクと再会する直前のジュカインについて書いてみました。

それでは、どうぞ！

passed memory - 異変の1日目 -

101番道路には、1匹のポケモンが歩いていた。

緑色の体は170?くらいの大きさで、葉を模したような大きな尻尾。密林ポケモンとも言われているポケモン、ジュカインだ。

しかし、彼には他のジュカインとは異なる部分が1つある。それは右目にある大きな傷だ。この傷のせいで、右目は全く使い物にならないが、彼自身、不便には思っていない。

正直、何故こんな傷ができてしまったのかも、はっきりとは覚えていない。ただ、それを思い出そうとすると、この右目の傷が疼くという事だけは確かだ。まるで、思い出すのを拒んでいるかのよう……。

『あの町は……』

すると彼の目の前に、ミシロタウンが見えてきた。大きな町ではないが、それなりに区画整備が進んでいる、なかなかいい町だ。……まあ、ポケモンであるジュカインにとって、区画整備の進みぐあいなどは、あまり関係ないのだが。

そんな事よりも、ジュカインには気になる事があった。

『まさか本当に帰ってきてしまうとは……。あれからもう5年か……』

そう、あの町はジュカインの故郷なのだ。5年前までは、ジュカインには主人がいた。しかし、彼はジュカインにある事を告げた後、行方不明になってしまったのだ。

「家族を守ってくれ」その一言だけを残して……。



『家族を守れ、か…。俺はあいつらを守るほど…強くなったのか…？』

ジユカインは拳を握りしめ、そうつぶやいた。

あの時の自分は、彼らを守るほどの力は、持ってなかった。力がないのなら、手に入れるしかない。そう思ったジユカインはミシロタウンを飛び出し、今まで自らを鍛えていたのだ。

ハアと息を吐いた後、ジユカインはもう一度ミシロタウンを見据えた。そろそろ帰ってもいい。そう思っていたのだ。

しかし、久しぶりに帰るとなると、なんとなく照れくさいような気がしていた。

『…フツ。全く…、何を考えているんだ俺は…』

ジユカインはらしくない自分に気づき、苦笑していた。

そんな事をつぶやいた後、決心がついたジユカインは、ミシロタウンに向けて歩き始めた。…その時だった。

『…！』

ドーン！

炎を纏った何かが、ジユカインに突進してきた。敵の強襲にいち早く気づいたジユカインは、素早い動きで、なんとかそれをかわしていた。

ジユカインの動きを捉える事が出来なかった何かは、地面に激突。辺りを砂埃が立ち籠めた。

『何だ…？』

ニトロチャージで突進してきた何かの正体を確かめるべく、ジユカインは砂埃の中の様子を探った。しかし、思ったより砂埃は濃く、なかなか中の様子は分らない。

ジユカインが少しいら立ちを感じていたその時、そのいら立ちを払うかのように砂埃は消え、何かの姿があらわになった。

『…ウルガモスか』

そのポケモンの特徴を一言で言うなら、巨大な蛾 だった。

まず目に入るのは、背中の中羽だ。赤とオレンジの鮮やかな羽が左右3枚ずつ、計6枚生えており、その羽の所々に、灰色の斑点模様がついていた。そして、巨大な体。体長はジユカインよりも小さめだが、虫タイプポケモンの中ではかなり大きなサイズだ。虫が苦手でも、思わず顔をしかめてしまう。

羽を広げた姿や、古い言い伝えから、太陽ポケモンとも称されている。

ウルガモスは、羽を大きく羽ばたかせ、空中に浮かんでいた。その羽からでる風圧はかなりのもので、そのせいで砂埃が一気に吹き飛んだのだ。

しかしなぜウルガモスが、こんな所にいるのだろうか？滅多に見る事が出来ないポケモンで、伝説のポケモンに近い存在だ。そんなポケモンが、ここ101番道路にいるはずないのだ。

考えていたその時、ウルガモスがまた動き出し、ジユカインに襲いかかってきた。

『くっ…！』

ウルガモスは羽を細かく揺らし、その振動で音波を発生させて攻撃してきた。

その攻撃、虫のさざめきは目に見えない技なので、ジユカインには防ぐ手段が無かった。

『くそ……！急になんだ？なぜ攻撃してくる……！？』

虫のさざめきの影響で頭痛を感じながらも、ジユカインはそこが疑問に思った。ウルガモスに襲われるような事など、していないのだ。

『……………』

次にウルガモスは、炎の渦で攻撃してきた。特に鳴き声も上げず、ただ淡々と攻撃しているので、よけいに不気味に感じる。

『チッ……』

ジユカインはギリギリでその攻撃をかわし、反撃すべくウルガモスに接近、その後、ドラゴンクローで攻撃した。

ドラゴンクローをもろに受けたウルガモスは吹き飛ばされ、木に叩きつけられた。

『やったか？』

ジユカインはそうつぶやいた。しかし、ウルガモスは何事も無かったかのように立ち上がった。かなりの勢いで叩きつけられたハズなのだが、まるで堪えて無いように見えた。

『…!…なんだこいつ? 普通じゃないのか…!?!?』

ジユカインは、ウルガモスから何か奇妙なものを感じていた。普通じゃない何かを…。

ウルガモスは尚も攻撃して来る。ニトロチャージ、虫のさざめき、炎の渦。

ジユカインも何度が反撃はしたものの、まるで効いている気がしなかった。

『…はあ!』

しかし、それまでドラゴンクローで攻撃していたジユカインがリーフトンファーで攻撃すると、ついに耐え切れなくなったのか、ウルガモスがフラつき始めた。

『やっぱり、俺はこっちの方が向いてるな…!』

ジユカインはニヤリと笑いつつも、もう一度リーフトンファーを構えた。

『……………!』

すると、急にウルガモスの身体が急に炎に包まれた。それを見たジユカインは、さらに警戒を強める。

次の瞬間、ウルガモスが大きくはばくとほぼ同時に、纏っていた炎がジユカインに向けて放たれた。

『何！？』

ジユカインは、素早く体をひねらせて攻撃をかわそうとするが、避けきれず、肩にかすってしまった。

『うぐ…！？』

大怪我にはならなかったが、かなり腕に響いた。直撃すれば、ひとたまりないだろう。

『あれを受けたらまずいな…！』

そう思ったのもつかの間、ウルガモスはまた同じ技で攻撃しようとしていた。

ジユカインはウルガモスの 炎の舞い を止めるべく、エナジーボールで攻撃しようとした。腕を前に突出し、力を集中させると緑色の球ができていく。

『エナジーボールを食らわせてやる…！』

ジユカインはエナジーボールを放った。すると、ウルガモスも炎の舞いで攻撃した。両者の技がぶつかった瞬間、大きな爆発がおきた。

ドーン！と音を立て、爆風が2匹を襲った。ジユカインは思わず腕で顔を覆い、踏ん張った。

爆風が治まった後、そこには力尽きて倒れているウルガモスの姿

があつた。どうやら爆発の中心付近にいたらしく、巻き込まれてしまったようだ。

『終わった…か』

ジユカインは倒れているウルガモスの姿を見て、そうつぶやいた。しかし一体何だったんだ？ 確証は無いが…、こいつは普通じゃない……。

ドーン！

そう思っていた時、今度はミシロタウンから大きな音が響いた。

『町の方から…！？くそ！』

気がつくと、ジユカインはミシロタウンに向かって走りだしていた。

待っている…。俺が守ってやる…！

ジユカインは、主人との約束を思い出していた。

passed memory - 異変の1日目 - (後書き)

グダグダすぎて泣けてきました… (涙)

あと、最近思い出したんですけど、ポケモンセンターに宿泊施設  
ありましたね…。ってやつちまったああああ！「深まる絆」！

すいません、記憶曖昧で…。

次から気をつけたいと思います。

## 116番道路での出会い（前書き）

第4章、突入です！

なんだか1章1章の話数が少ないような…。



## 116番道路での出会い

ハイクは息を切らしながらも、116番道路を走っていた。彼の背後には2匹のポケモンの姿がある。そう、今彼は追われているのだ。

なぜかハイクは、像の様な姿をしたポケモン、ドンファン2匹に追いかけていた。体長はそれほど大きくないが、体重は100?を超えている。踏み潰されたらひとたまりもない。

「ハア…ハア…でも流石に疲れてきたな…ハア…」

ハイクは体力がある方ではないので、流石にもうダウンしそうになっていた。

追いかけている理由は不明だが、116番道路に来てすぐから追いかけれ続けているのだ。泣き言を言うのも無理ないだろう。ポケモンを出して戦いたい、正直そんな余裕はない。

「うわっ、行き止まり!?!」

走っていると、目の前に大きな岩山が立ち塞がった。これでは逃げられない。

『グオオオオ!!!』

ハイクが岩山の前で立ち往生していると、やがてドンファン達が追いついてきた。ドンファン達は、ハイクの姿を見ても止まる気配すら見せない。どうやらそのまま突進しようとしているようだ。

ヤバい！逃げなきゃ！という言葉が、頭の中でグルグル回る。しかし、そう思えば思うほど余計に体が動かなくなってしまう。

「うわっ！」

ハイクが状況を整理した頃には、ドンファンはもう目の前にまで接近していた。咄嗟に真横に飛び込み、攻撃をかわそうと試みた。

ハイクは、間一髪のところまで攻撃をかわす事に成功し、地面に滑り込んだ。

「いてて…。くそ、行け！ラプラス！」

急いでモンスターボールを取出し、ラプラスをくり出した。

ハイクを捕らえる事が出来なかったドンファンは、そのまま岩山に激突した。ガラガラと音を立てて、岩山の一部が崩れていく。しかしドンファンはそんな事は気にも留めず、もう一度ハイクに突進すべく地面を蹴っていた。

相手はドンファン2匹でこちらはラプラス1匹。部が悪いと考えたハイクは、ジュカインも戦いに加勢させるべく、モンスターボールを取った。

『ハイク、待ってください』

しかし、ラプラスが言葉でそれを制する。疑問に思ったハイクがラプラスの様子を窺った。

「どうしたんだ、ラプラス？」

『…私1人で十分です！』

自身に満ちた瞳でハイクを見つめ、ラプラスはそう告げた。どうやらラプラスはかなりバトルに慣れているようだ。その言葉と瞳だけで、ハイクにはそれが伝わってきた。

「分かった」

ハイクはラプラスの意見を尊重する事にした。

一方、それまで地面を蹴っていたドンファンはというと、有り余った力を解放するかのように2匹同時にハイクとラプラスに向かって、転がってきた。

「ラプラス、水の波動2連発だ！」

ハイクの指示を聞いたラプラスは、うなずいて答えた後 転がる攻撃を仕掛けてきたドンファン2匹に、 水の波動 で攻撃した。

水の波動 は見事に2発とも命中した。片方のドンファンは悲鳴を上げて、攻撃を中断した。その後、フラフラと覚束無い足取りで丸めていた体をもとに戻した。どうやら混乱しているようだ。

水の波動 の特殊効果だった。

しかし、もう片方のドンファンは 水の波動 を食らっても、少し体が揺れただけで突進する勢いはほとんど緩めず、そのまま転がる攻撃を続行した。

「よけろ、ラプラス！」

ハイクは咄嗟にそう叫んだが、ラプラスもそんなに早く対処できるハズも無く、攻撃が直撃した。

『うぐう…！』

水、氷タイプのラプラスにとって、岩タイプの 転がる 相性が悪い。攻撃をまともに食らったラプラスは顔をしかめ、うめき声を上げた。

ラプラスに転がる攻撃をしたドンファンは、ラプラスの身体でバウンドし、身体を丸めたまま地面に着地した。そして、その勢いでもう1度ラプラスに転がる攻撃を仕掛けた。

ガンッ！

「ラプラス！」

鈍い音がした。2発目の 転がる もラプラスに直撃してしまったのだ。ラプラスはまたうめき声を上げ、後ずさりした。

転がる は攻撃する度に威力が上昇する、という特殊な技だ。その能力に加え、2発の 転がる ラプラスの身体1点に集中していたのだ。その分、ダメージ量は多かった。

2発の 転がる が直撃したラプラスの身体は、赤く腫れ上がった。その生々しい傷跡が、ダメージ量の多さを物語る。

さらに、ドンファンは3発目の転がる攻撃を仕掛けようとしていた。これ以上攻撃を食らったら、戦闘不能になるような致命傷になりかねないだろう。

「ラプラス、冷凍ビームで迎撃するんだ！」

避けるのは難しいと判断したハイクは、ラプラスに次の指示をだした。

「攻撃こそ最大の防御」というように、攻撃で攻撃を制するとい

う事を一か八か試したのである。

相変わらずラプラスの攻撃の命中率は素晴らしく、冷凍ビームは見事ドンファンに直撃した。その結果、ドンファンの身体は氷結し、動きを止める事に成功した。

「やった……！」

思わずハイクも歓喜の声を上げて喜んだ。

『……どうやら彼らも 力 に捕らわれているようですね……』

傷は痛々しいが、あまり呼吸は乱れていないラプラスが静かに口を開いた。

意外にタフなラプラスを見て、少し驚きながらもハイクはうなずいて返した。

相変わらず 力 の意味は分からないが、もともとハウエン地方に生息していなかったポケモンが、その 力 とやらに捕らわれているのは事実だ。ドンファンも、116番道路には生息していないのだ。

ドンファンの攻撃を止め、ホツとしたのもつかの間、それまで水の波動 で混乱していたもう1匹のドンファンが 雷の牙 で飛びかかってきた。すでに混乱は解けているようだ。

「もう1発、冷凍ビームだ！」

ドンファンの行動にいち早く気づいたハイクは、もう1度 冷凍ビーム を放つという事をラプラスに指示した。

ハイクの指示に素早く反応したラプラスは、雷の牙で飛びかかってくるドンファンに向けて、冷凍ビームを放った。もう一步でラプラスに、雷の牙が直撃する、いう所でドンファンは、冷凍ビームを受け、空中で氷結した。カチコチと音をたてて、ドンファンは空中で氷漬けになっていく。

ドスン！と音を立てて凍りついたドンファンは地面に落下した。

これで文字通りドンファンを2匹とも動けなくした事になる。

「よし。今のうちに逃げよう！」

これ以上ドンファンを痛めつけても意味がない。ハイクはラプラスをモンスターボールに戻し、走ってその場から立ち去った。

「ここまで来れば大丈夫かな……」

ハイクはラプラスの傷を、すごい傷薬で手当てしつつ、辺りをキョロキョロ見ながら、そうつぶやいた。

ドンファンから逃げ切り、ホッとした気持ちとは裏腹に、ハイクは少し胸が痛むような感情に襲われていた。

なぜ彼らは俺を狙う？俺が何をしたって言うんだよ…。

考えても分からない。分からないからもちかしい。

それに研究所から姿を消したポケモン達の事も気がかりだ。有力な情報がほとんど入って来ないこの状況では、心がどんどん不安な気持ちに包まれていく。

ハイクは、ハーツとため息を吐いた。しかし、そんな事しても頭の中のもやもやした気持ちは消えない。余計に虚しくなるだけだ。

ガサツ…

そんな気持ちで立っていると、ハイクの耳に何かの物音が飛び込んできた。

「…なんだ？」

不振に思ったハイクは、ラプラスをモンスターボールに戻し、物音が聞こえた茂みに歩み寄った。念のため、ジュカインが入ったボールを手に持っておく。さすがにバトルしたばかりのラプラスを、また戦わせる訳にはいかないだろう。

ほとんど足音も立てずに茂みに近づいた後、ボールを持っていな  
い方の手で一気に草をかき分けた。

「うわ、ちょっと待って下さい！」

しかしそこから現れたのは、1人の少年だった。

身長はハイクよりも小さいくらいで、緑色っぽいジャケットを着ており、茶系の長ズボンを穿いていた。歳はおそらく、ハイクと同

い年か年下だろう。」

「ご、ごめん。驚かせたよな…。君は…？」

驚いている少年を見て、悪く思ったハイクは彼に謝った。敵ではないと思ったが、一体何をしていたのかは、確認することにした。

「僕、タクヤっていいいます。急にポケモンに襲われて…それでここに隠れていたんです」

タクヤと名乗った少年の言葉を聞いて、ハイクは少しホッとしていた。彼が良い人そうという所もそうだが、本来 生息していないポケモン達は、どうやらハイクだけを攻撃している訳ではなさそうなのだ。

「…そっか」

俺は何かをしてしまったのか？と少し罪悪感を抱いていたので、その言葉を聞いたハイクの表情は自然と和やかな物になる。

「…ひよつとして…、あなたはハイクさん!？」

そんなハイクの表情を見て、タクヤも緊張が解けたのかハイクにそんな質問を投げかけてきた。初対面の人にズバリ自分の名前を当てられたのは初めてだったので、ハイクは少し驚きながらも、

「あ、ああ。そうだけど…」

と、答えた。



「やっぱり！あなたがハウエリーグチャンピオンの、ハイクさ…むぐう！？」

それを聞いたタクヤが急に大きな声を出したので、驚いたハイクがタクヤの口をふさいだ。

「ちょ…、声が大きい！」

むがむがと抵抗するタクヤに向けて、ハイクは小声でそう言った。もし誰かが聞いていたら、また人が集まって来てしまうかもしれない。正直、カナズミシティの時のような状態には、もうなりたく無かった。疲れるし…。

「むぐぐ…。意外とシャイなんですね！」

するとタクヤが、無理矢理ハイクの手を口からどけ、笑顔でそう言った。

「別にそういう訳じゃ…ない訳でもないけど……」

タクヤの言葉を否定すると嘘になってしまうので、ハイクは曖昧に答えた。正直な所、少し恥ずかしという所もある。

この話題はあまり触れないでほしな…、とハイクが思っていると、

「ところで、ハイクさんはどうしてこんな所にいるんですか？」

ちょうどタクヤが話題を変えてくれた。

よかった…とハイクは心の中で安堵していた。

「今、ハウエン地方に異変が起きているんだ。俺はその真相を確かめる為に、旅をしている」

別に秘密にする理由もないので、ハイクは事実を話した。

「本当ですか！？実は僕もハウエン地方の異変を、調査しているんですよ！」

するとそれを聞いたタクヤが、先ほどにも増して目を輝かせながらそう言った。それを見たハイクは、ハハハ…と苦笑していた。

「それじゃあ、目的は一緒なんですし、一緒に旅をしませんか！？」

「え…？」

しかしハイクは、少し表情を曇らせた。協力してくれるという厚意は嬉しいが、関係ない人をハイクの危険な旅に巻き込みたくないのだ。

「それは…」

「ねえ、いいですよ？ハイクさあ〜ん！」

考えていると、タクヤがハイクの腕にしがみつき、旅の介入をねだってきた。腕を振るっても、離れてくれる気配はない。

「は、離れてくれよ、タクヤ！」

「嫌です！連れてつてくれるまで離しませんよ！」

子供っぽく駄々をこねるタクヤを見て、ハイクは苦笑するしかなかった。

「分かった。分かったから離れてくれ…」

ついに降参したハイクは、渋々タクヤの旅の介入を許した。内心、ハイクは自分の弱さを呪っていた。

「やったあ！ありがとうございます！」

ようやくタクヤはハイクから離れ、飛び跳ねて喜んだ。

「そんなに嬉しいのか？」と、ハイクは思いながらも、今日で1番大きなため息をついた。モンスターボールの中からヒノアラシやラプラスが慰めてくれるのだが、放つというほしい、と言っのが本音だったりする…。

「それで、これからどうするつもりなんですか？」

ボーっとしているハイクに、タクヤが質問した。

「え…、ああ。このまま116番道路を進んでカナシダトンネルを抜けて、シダケタウンに向かうつもりだけど…」

少し反応が遅れたが、ハイクはタクヤの質問にやや曖昧に答えた。すると、

「じゃあ、今すぐ行きましょう！」

急にタクヤがハイクの手を取り、引っ張るような形で強引に歩き

始めた。

「いてて…！ちょっと待ってタクヤ！」

引きずられるように、ハイクも彼に続いた。

そんなせつかちなタクヤを見て、ハイクの心はいろんな理由で不安に包まれていった。

## 116番道路での出会い（後書き）

ちなみにタクヤはオリキャラです。

最近、少しづつですがこの小説のアクセス数が増えてきたので、作者のモチベーションが上がっています（笑）

感想を書いていただけるとさらに急上昇すると思うので、よろしくお願いします！

## 第一印象（前書き）

今回から書き方を少し変えます。本当に“少し”ですが…。

## 第一印象

ハイク達は、カナシダトンネルの入口前まで来ていた。文字通りカナズミシティとシダケタウンを結ぶトンネルで、開通されてから間もない比較的 新しいトンネルだ。

開通工事は当時、最新のテクノロジーを駆使して開発された機械を使用し工事が進められていたらしいが、そのまま機械で工事を続けると周囲のポケモン達に悪影響を及ぼすため、工事を断念したらしい。しかしその後、とある人物が人の手だけでトンネルを掘り進み、開通を成功させたらしいが、ハイクは詳細をよく知らなかった。

「ふう…。これを越えればシダケタウンだな…」

さんざんタクヤに振り回され、必要以上に体力を消耗したハイクがため息をつくかのように、そうつぶやいた。

「ささ、早く入りましょうよ！」

疲れた顔をしているハイクを見ても、お構いなしにタクヤは急かした。それまでハイクの腕を引っ張って行くような感じだったが、今度は背中に回り込み、無理矢理 押して行くような感じになった。

「タクヤ、ちょっと…押すなって！」

ハイクも口では抵抗するものの、半分 されるがままだった。タクヤの今までの行動から察するに抵抗するのは無駄だろうと考えていた。

そんなようにしてカナシダトンネルの入口から、中に入った瞬間…

ブウン！

「！」

突然、何か赤い生物がハイクに襲いかかってきた。かなり急だったので反応が遅れたが、ハイクは素早く体をひねらせて攻撃をかわそうとした。

その攻撃によって左頬を少し切ってしまったが、なんとか避けることが出来た。切傷からは血が滴り落ちている。

「ハイクさん！？」

その奇襲に気づいたタクヤは素早くトンネルの外へと逃げ出したが、ハイクの身を心配したのかそう叫んだ。

「ああ。大丈夫」

それに対して、右手の甲で血を拭いつつもハイクは答えた。その後、自分を攻撃した者の正体を確認することにした。

赤い体には羽が生えており、<sup>はすみ</sup> 鋏のような腕をもつ虫タイプのポケモン。ハイクの記憶には、思い当たるポケモンは1匹しかいなかった。

「ハッサム！？」

そう、鋏ポケモンのハッサムだ。鋏を振り上げ、ハイクを激しく威嚇している。

またか…とハイクは内心想った。これで理由もなく襲われるのは



何回目だろう？

そう思っていると、ハッサムはまた攻撃しようとハイクに素早く接近した。

しかし、それより先にハイクのモンスターボールから勝手にジユカインが飛び出し、ハッサムとの戦いに備え、戦闘態勢になっていた。

「ジユカイン！？ちよつと…」

ハイクがジユカインを止めようとしたが、聞く耳を持っていない。相変わらずだ。

ハッサムは、それでもお構いなく“シザークロス”でジユカインもろともハイクを斬り裂こうとした。

しかしジユカインは冷静に攻撃を受け止め、そのまま力で押し返した。

ジユカインに力技で負けたハッサムは、悔し紛れに一声を上げた後、どこかに逃げて行ってしまった。

「え…もう終わり？」

いつも以上に呆気ない終わりだったのでハイクは少し間の抜けた声を出してしまった。少し奇妙に思いつつも、ホッとしたハイクは肩の力を抜いた。

「ハイクさん、すごいですね！もう追い払っちゃうなんて」

それまでトンネルの外で戦いの様子を見守っていたタクヤがハイ

クに駆け寄ってきた。

「うん。たぶんもう大丈夫だと思うけど、油断はできないかな」

タクヤの言葉に対し、ハイクはそう答えた。

「ジユカイン、まだ怪我治ってないんだから、あんまり無理しちゃ駄目だろ」

相変わらず無茶をするジユカインを見たハイクは、心配になつてそう伝えた。今は普通に動いているが、無理に戦うと傷口が開きかねない。その点、さっきジユカインを戦わせようとしてしまった自分を、ハイクは反省していた。

『俺の怪我はもう心配いらない。…だが奴は…』

ジユカインはタクヤを一瞥してから、そう言った。何かを疑っているような眼差しだった。

「?…とりあえずボールに戻ってくれ」

いつもと違うジユカインの態度をすこし変に思いながらも、ハイクはジユカインをボールに戻した。

基本、ジユカインは自分の考えを表に出す事は少ない。照れてくさいのか、それとも単にクールなだけなのか…よく分からないが、今回のように何かを疑うような仕草をするのは珍しいのだ。

「それじゃ、敵もかたずいた事ですし、先に進みましょう!」

相変わらずのテンションでタクヤが言った。一体どこにそんな

元気があるのか、ハイクは不思議に思っていた。

「ハイクさん…？」

「しっ…」

いつになくピリピリした雰囲気の中、不意に話しかけてきたタクヤの口をふさいだ。今は物音を立ててほしくないのだ。

「（くそ…。何であいつが…）」

岩陰に隠れているハイクの視線の先には、見覚えのある恰好をした人物が立っていた。

茶色のローブにフードを深くかぶった人物…。そう、カナズミジムで異常な力のナットレイをくり出してきた、あの人物だった。いや、もしかしたら別人かもしれないが、少なくとも同じ格好だ。

「…どうしよう？」

ハイクは困惑していた。今飛び出せばあの人物との戦いは避けられないだろう。極力戦闘は避けたいこの状況で、厳しい立場に立つ

ていることになる。

「ハイクさん、戦うしかありませんよ。僕が援護します。2対1なら勝てるはずです」

「…そうするしかないか」

ハイクもタクヤの考えに同意せざるおえなかった。たしかに、このままじつと隠れていても埒が明かない。

「準備はいいか、タクヤ？」

ハイクはラプラスのモンスターボールを手にし、タクヤに確認した。

「…いつでもどうぞ」

タクヤはつぶやくように、そう答えた。

「よし…、行こう…！」

そして、ハイクがローブの人物に攻撃を仕掛けようとした、まさにその時、

ポンッ！

「え…？」

モンスターボールの解放音。その次の瞬間の光景を見て、ハイクは驚愕した。

開いたモンスターボールは紛れもなくハイクの物。その中から出てきたのはジユカインだ。そして彼は、自らの“リーフトンファー”をタクヤに突き出している。しかし直撃している訳ではなく、あくまでタクヤの動きを封じるのが目的のようだ。

「ジユカイン！？」

もちろん、ハイクは声を上げてしまった。そのせいで、ロープの人物にもこちらの存在に気づいてしまったようだ。

「ちょ…ハイクさん！彼をなんとかして下さいよ」

タクヤも焦った様子でハイクに助けを求める。いきなり命が危うい状態になってしまったのだ。焦るのも当然だろう。

ハイクは慌ててジユカインを止めようとした。

「ジユカイン！何やってるんだよ！タクヤを…」

『いい加減、正体を現したらどうだ？』

「え…？」

しかし、ジユカインはタクヤにそう言い放った。無論、ジユカインの言葉を聞き取れているのはハイクだけだろう。

ハイクはジユカインの言っている事が分からなかった。

『…おかしいと思ってたんだ』

ハイクが愕然としているとジユカインは口を開き、話し始めた。

『…話が出来すぎている。こいつにそそのかされてトンネルに入った瞬間、ハッサムに襲われた…。まるであのハッサムは俺達がここに来るのを知っていたかのような。そして、タイミング良く表れたローブの人物……』

そこまで聞いた瞬間、ハイクは背筋がゾツとした。頭の中に最悪の事態が浮かび上がり、自然と心臓の鼓動が速くなる。

「タクヤ…お前は……！」

そして、事態は現実の物となる。

「クツ…クフフフ……」

タクヤは、ハイクが今まで感じた事のない不気味な雰囲気を感じ出し、静かに嘲笑った。周囲の空気が一気に変わる。

「あゝあ…。もうバレちゃったか…」

タクヤのその言葉は、ハイクには悪魔の囁きのように聞こえた。  
…こんな事、信じられる訳がない。

「どうやら、ポケモンと会話が出来るとい話は本当らしいな、ハイク」

裏切り。そう、裏切りだ。受け入れがたい真実。

ハイクの心臓の鼓動はさらにスピードを増し、逆に試行のスピードは低下してしまっている。トンネルの中の静けさが、ハイクの身

体をさらに硬直させる。

「タ…クヤ…？そんな…こんな事って…」

「言つとくけど、俺は裏切つてなんかないからな。…最初からお前の命を狙っていた、敵だったんだから…！」

タクヤがそう言い放った瞬間、逃げたかと思っていたハッサムがどこからか現れ、ジユカインを攻撃した。あまりに急な事だったのでジユカインには避ける間がなく、そのまま吹っ飛ばされてしまった。

『チッ…。やはりグルだったか……』

しかしジユカインは、冷静に地面に着地し、舌打ちをしつつもそうつぶやいた。

「お前が何を聞いたのか知らないが、俺は少々お前のジユカインの洞察力を甘く見ていたようだ…」

タクヤはどこからかモンスターボールを取出し、弄びながらそういった。おそらくあのハッサムの物だろう。

「まあ、第一印象で俺を判断したお前も悪いよな！」

タクヤは、さも自分だけが悪くないと言うかのように、ハイクにそう言った。なんて奴だ！

何…？何だよこれ…。何だっていうんだよ……！

ついにハイクは感情を抑えきれなくなり、叫んだ。

「何なんだよ！何が目的なんだよ！？どうしてこんな…」

「さつきも言つたる。お前を消す…、殺すことだ」

しかしタクヤは、ハイクとは正反対の比較的落ち着いた様子でそう言い放った。

「殺す…？俺を…？一体何のために…！？」

「ある奴に依頼されたんだ。金で雇われてな。それに、現チャンピオンであるお前を倒せば、俺こそ真のチャンピオンとして最高の地位を手に入れる事が出来る。一石二鳥だろ…？」

「依頼…？雇われた…？」

だからハイクに近づいた。だからハイクをここまで導いた。少々強引だった…。だからハイクに仲間だと思ひ込ませたのだ。すべては雇い主との契約を果たすため…。罠を張り、ハイクを出し抜こうとしたのだ。

「さあ、おしゃべりは終わりだ。無駄だと思うが抵抗したっていいんだぜ。もつとも、苦しむ時間が増えるだけだな！」

ついにタクヤは本気でハイクを殺しにかかるうとしてくるようだ。ハイクの中では様々な思いが混沌としており、いまだに現実をはつきりと見れずにいた。

『ハイク、覚悟を決めろ。奴は本気で殺しに来るぞ…！』



そんなハイクの心を動かす為、ジユカインは手を差し伸べた。

「やるしか……ないのか……？」

ジユカインの言葉を受け、ハイクは決意を固めた。タクヤと、戦う決意だ。

『バトル』

そこで、待ちかねたローブの人物が黒いモンスターボールを取り、ポケモンをくり出した。紫色の魔導師のような姿をしたマジカルポケモン、ムウマージだ。

「やっぱり……、あいつもタクヤの仲間なのか……？……行け、ラプラス」

ハイクはムウマージに対抗すべく、ラプラスをくり出した。

ローブの人物も敵と考えると、もはや逃げ道はない。前にも、後ろにも進めないのだ。2対1のバトルは必須だろう。

「ヒノアラシ、ジユカインを援護してくれ」

そこで、ハイクはヒノアラシをジユカインの援護に回す事にした。自分はラプラスと共に、ローブの人物との戦いに集中したかったのだ。

「ジユカイン、行けるか？」

おそらく、この中で一番戦い慣れているのはジユカインだ。タク

やはジユカインに任せて問題ないだろう。

『…俺を誰だと思っている？』

ジユカインのその言葉からも分かるように、彼自身もかなり自信があるようだ。

「よし。ヒノアラシ、もしもの時は頼んだぞ」

『は、はい！任せて下さい！』

しかし、念のためヒノアラシを援護に回らせた。彼の内なる勇氣は、いざという時頼りになる。

「作戦会議は終わったか？…どっちにせよ、そろそろやらせてもらう……。さあ、ショーの始まりだ……。！」

こうして、ハイクVSタクヤ&ローブの人物の戦いの火蓋が切って落とされた。

もし、これが悪い夢なら早く覚めて欲しい。

ハイクは心の奥では、必死にそう願っていた。

## 第一印象（後書き）

はい、タクヤが裏切りました。早っ！とツツコミが飛んできそうですね（笑）

今回は約1週間ぶりの更新でした。…ですが、相変わらず文章はグダグダ……。本当に申し訳ないです。

この言葉の使い方 変だ、という所があるかもしれないので、見つけたらご指摘下さい。お願いします。

## 小さな怒り

「ハッサム、“シザークロス”！」

タクヤのハッサムは、“シザークロス”でジユカインに攻撃した。腕の鋏を使って×を描くように斬りつける。その攻撃に対し、ジユカインはバックステップでかわそうとするのだが、ギリギリで飛距離が足りず、腹部の包帯だけをかすめてしまう。

「もう、これはいらないな……」

斬り裂かれ、ボロボロになってしまった包帯を見て、ジユカインはそうつぶやいた。そして、その包帯を自ら取り、捨ててしまった。ジユカインの腹部は、不思議とすでに傷が治っており、ジユカイン本来の身体に戻っていた。

「まだまだああ！もう1度“シザークロス”だ！」

ジユカインにダメージを与えていないと知ったタクヤは、もう1度ハッサムに“シザークロス”を使うよう指示した。今度は、ジユカインは“リーフトンファア”を上手く使い、それをガードする。

「クツ……」

しかしハッサムは、そのまま力でジユカインをねじ伏せようとしてくる。ハッサムの力はかなりのもののようで、少しづつ押されていく。

「おいおい…。そんなもんか？もつと楽しませてくれよ……！」

タクヤが挑発の言葉を飛ばすが、ジユカインはそんな事をいちいち気にするキャラではない。だが、今の状況を良いとは言えない、という事は確かだ。

『ジユカインさん！』

そこでヒノアラシが“火の粉”で援護した。しかし、その攻撃はかなり頼りなく、ハッサムは受けてもビクともしない。

『あ、あれ？…そんな……』

ヒノアラシも、まさかそこまで効かないとは思わなかったらしく、オドオドしている。

「さあ、もう諦める！お前等の力じゃ、俺のハッサムには勝てない！」

もう勝った気にいるタクヤを、ジユカインは一瞥したが、言い返す気などは無かった。タクヤに聞こえないのならば言っても意味がないし、このピンチの状況が覆る訳でもないからだ。

『ま、まだボク達は諦めません！』

そんな事を考えていたジユカインの横で、ヒノアラシはタクヤに叫んだ。だがそんな事をして、実行に移さなければ、負け犬の遠吠え同然だ。実行しなければ……。

『くううう…！』

しかし、ヒノアラシは動いた。脅えて半分硬直した体を無理矢理動かし、ハッサムに突進した。その攻撃は、タクヤやジユカインから見ればかなり無謀な試みだ。しかしどんなに無謀でも、強い思いでぶつかれば、常識を覆す事だってある。

『ボクだって…ボクだって…！』

その時、ボウツ！という音とともに、突進中のヒノアラシの身体が炎に包まれた。その炎はヒノアラシの小さな身体をより大きく見せ、頼りなげな雰囲気も熱いものが包む。

「なっ…！？」

タクヤが声を上げた頃にはもう遅く、ヒノアラシは炎に包まれたままハッサムに突進した。

流石のハッサムもこれには耐え切れなかったようで、小さくうめき声を上げた後、ジユカインを解放し、距離を取った。

『フツ…。 “火炎車” か。…助かった。礼をいう』

意外にもヒノアラシに助けられたジユカインは小さく笑った後、そう言った。

その言葉に対してヒノアラシも笑って返すのだが、“火炎車”一発だけでかなりの体力と精神力を消耗してしまったらしく、ゼエゼエと息を切らしてしまっていた。

『後は俺に任せて、お前は休んでろ』

『…へ？』

キョトンとするヒノアラシを横目に、ジュカインはハッサムに向き直った。

ハイクのラプラスと、ローブの人物のムウマージとの間では、激しい攻防戦が繰り広げられていた。

『…“シャドーボール”』

「ラプラス、“冷凍ビーム”だ！」

ムウマージが“シャドーボール”を放ち、ラプラスが“冷凍ビーム”でそれを打ち落とす。ただそれだけの繰り返しだったが、2つの技がぶつかる度に大きな音と共に爆発が起きており、空気を震わせる。砂埃が舞い上がり、敵の姿が見えなくなった瞬間、ムウマージが“シャドーボール”を放つ。それをラプラスが迎撃する。

一瞬の油断も許されないこの状況で、ラプラスはもはや 防戦一方だった。

『ハイク、これではキリがありません！何か策は…？』

ついにラプラスはハイクに助けを求めた。

分かっている…。分かっているんだけど、なかなか良い策が思い浮かばず、ハイクは困窮していた。

フとハイクはトンネルの様子を眺めてみる。

この辺りは機械を使わず、人の手だけで掘り進んだ場所らしく、なんとなくこちなさを感じてしまう。

内部自体は広めだが、人が通れるのはステンレス製の柵で区切られた所だけで、それより先には大きな岩がゴロゴロしている。トンネルと言うより洞窟だ。

「（ん…？洞窟？）」

その時、ハイクは頭の中で自然が作り出した洞窟を想像していた。そして、その洞窟に高確率で存在する“ある物”を連想した。

「（“水の波動”は…、拡散する…！なら…）」

そこまで考えて、ハイクはある策を思いついた。かなり無理があるかもしれないが、今は四の五の言ってられない。

「ラプラス、トンネルの天井に“水の波動”。その後そこに“冷凍ビーム”だ」

『えっ…？』

ラプラスが不思議そうな目でハイクを見つめる。どうやらハイクの考えが読めていないようだ。

『…分かりました。……私は貴方を信じます』

しかし、ラプラスはそれでもハイクを信じると言ってくれた。

「うん…。頼む」



それに対して、ハイクも笑って答えた。

そんな事をしている間も、ムウマージは休まず“シャドーボール”を放ってくる。そして最後の攻撃を打ち落とした後、すぐにラプラスはハイクの指示通り、技を使った。

ラプラスが放った“水の波動”は天井に当たると同時に拡散し、飛び散りそうになる。しかしそれより先に“冷凍ビーム”が放たれ、たちまち水を凍らせた。凍った水はまるで鍾乳石のような巨大な氷柱となり、天井に下がっていた。

第1段階、終了。

ムウマージは、“水の波動”と“冷凍ビーム”が自分に向けられたものではないと知ると再び“シャドーボール”を連発する。それを“冷凍ビーム”で打ち落とす。

「ラプラス、“ハイドロポンプ”使えるか？」

ハイクがラプラスに次の指示を出そうとした。

『…なるほど。かなり無理のある策ですね…。使ったことはほとんどありませんが、やってみます』

ラプラスは、ハイクの策になんとなく気づいたようだ。

「よし…。一か八か……」

こうして準備は整った。後はラプラスが“ハイドロポンプ”を放

てればいいだけだ。しかし、ムウマージは攻撃の手を緩める気は微塵も無いらしく、次々と“シャドーボール”を放っていく。

「また…」

しつこくワンパターンな戦法を繰り返すロープの人物とムウマージを見て、ハイクはいら立ちを募らせていた。

『ダメージ覚悟で行きます』

「え…？」

するとラプラスは、ムウマージの“シャドーボール”を無視し、一か八かの“ハイドロポンプ”を放とうとした。スウーと息を吸い込み、肺いっぱい溜まったところで、一気に吐き出す。

『くう！？』

その間、“シャドーボール”が幾つかラプラスに直撃するが、持ち前のタフさでそれを乗り切る。

そしてティアの口から大量の水が勢いよく発射された。その名の通り、まるでポンプから発射される水のようなのだ。

ビュン！と轟音を立てて発射される水は、残った他の“シャドーボール”の間を上手く潜り抜け、そのまま直進する。しかし、ラプラスが狙ったのはムウマージ本体ではなく、先ほど作り上げた氷柱だった。

ゴオウン！と直撃音がしたかと思うと“ハイドロポンプ”に貫かれた氷柱が弾け飛んだ。

『……………！？』

その弾け飛んだ氷柱の大きな破片1つがムウマージに直撃し、そのまま押し倒した。

あまりに急すぎる攻撃だったため、ムウマージは対処することが出来なかった。

「よし！なんとか上手くいった…」

ハイクは自分の策が上手く達成出来た事に安心し、胸をなでおろした。

『安心するのはまだ早いですよ、ハイク。彼はまたすぐ起き上がります』

しかしラプラスのその言葉で少し緩んでいた気持ちが一気に緊張する。まだ、バトルは終わって無いのだ。

「ああ…。起き上がる前に、“冷凍ビーム”だ」

ハイクはラプラスに次の指示を出した。

ティアはムウマージ“冷凍ビーム”を放った。

ムウマージは、ようやく自分の身体にのしかかっていた氷柱の破片を押しのかけた所だったらしく、“冷凍ビーム”に反応した頃にはもう遅かった。

みるみる内にムウマージの身体が凍りついていく。やがて、身体全体が氷に包まれた。

『終わり…ましたか？』

ラプラスがハイクに確認するが、正直ハイク自身も分からなかった。これまで戦ったポケモンの中には、倒したと思っけていてもすぐに立ち上がってくるような、異常なほどタフな肉体を手に入れてしまったポケモンもいたからだ。

チラリと、ハイクはジュカイン達の戦いの様子を窺った。

ジュカインとハッサムの戦いはまだ続いていた。しかし、現在はジュカインの方が優位な立場に立っているようだ。

ジュカインはただがむしやりに攻撃を仕掛けている訳でなく、ハッサムが攻撃を仕掛けてきた時に上手くその攻撃をかわし、“リーフトンファア”でカウンター攻撃を仕掛ける、と言う事を繰り返していた。

「チッ…。面倒くさい奴だな……。ハッサム、これ以上の攻撃はやめろ」

しかし、タクヤも馬鹿じゃない。悪い状況に立たされていると悟ったタクヤは、ハッサムに攻撃をやめるよう、指示した。

「同じ手がそう長く続くと思ったか？ハッサム、“高速移動”」

『な…！？“高速移動”を覚えていたのか…』

ハッサムは今までしまっていた羽を大きく広げ、ブーンとばたつかせた。

“高速移動”。自らの移動速度、瞬発力、反射神経を飛躍的に上昇させる技だ。ポケモンによって発動のスイッチとなる行動が違うらしく、ハッサムの場合はこのように羽を大きくばたつかせるよう

だ。

“高速移動”の発動はジユカインも予想外だったらしく、驚きを隠せずにいた。

「さあ、ハッサムの動きを捕らえられるかな…？ “シザークロス”だ！」

“高速移動”で素早さを高めたハッサムは、ものすごいスピードでジユカインとの距離を詰めていく。

『クツ…！』

ジユカインはハッサムの動きについていけず、悉く“シザークロス”が直撃した。ザンツとジユカインの身体が斬られる音がする。

「ジユカイン！」

ジユカインはハイクの近くまで吹き飛ばされていた。

「よし！もう1発だ！」

ハッサムはジユカインに追い打ちをかけるべく、距離をとった。

『チツ…ここまでか……』

『まだです！ジユカインさん！』

すでに諦めかけていた。しかしジユカインの視界に、それまで休んでいると思っていたヒノアラシの姿が飛び込んできた。

『な…！？』

無謀すぎる。

しかし、『逃げる！』と叫ぼうとした瞬間のヒノアラシのといった行動を見て、ハイクとジユカインは息を呑んだ。ヒノアラシの背中から、大量の黒い煙が噴き出したのだ。その黒い煙がハッサムの視界を遮る。

「！？ くそ！ “煙幕”だと！？小賢<sup>こけん</sup>しい真似を…！」

それは土壇場で発動した“煙幕”だった。

“煙幕”によって視界を遮られたハッサムはジユカインに狙いを定める事が出来ず、あたふたしていた。

「チャンスだ、ジユカイン！」

ハイクがジユカインの士気を促す。それに対し、『ああ』と答えた後、ジユカインは次の技の準備をした。

右手を前に突出し、力を集中させる。するとそこに緑色の光球“エナジーボール”が作り出される。

『…ヒノアラシに助けられてばかりじゃ、俺も駄目だな……』

そうつぶやいた後、ジユカインは左手にも同じ“エナジーボール”を作り上げる。

『…俺も、頑張らないとな』

その後、ジユカインは両手の“エナジーボール”を交差させた。すると、2つの“エナジーボール”が上手く混ざり合い、やがて1

つの巨大な光球と化した。

「これは…」

『…“メガエナジーボール”』

ボソリと技名をつぶやき、ジユカインは巨大な光球を煙幕に放った。

「な…！？来るぞハッサム！“破壊光線”で向かいうて！」

ジユカインの行動にいち早く気づいたタクヤは、ハッサムに“破壊光線”を使うよう指示した。それに素早く反応し、ハッサムは“破壊光線”を放つ。

神秘的な光を放つ“メガエナジーボール”と、紅く輝く“破壊光線”は煙幕の中で激突した。

一瞬、激しい光が放たれたかと思うと、大爆発が起きた。2つの技が衝突することで起きた爆発が、煙幕に引火したのだ。

「うわっ！」

これはハイクにも計算外だった。もくもくと煙が立ち籠め、トンネル全体が脈動する。しかし、ハイク達は爆発の中心からかなり離れていたため、爆発に巻き込まれることはなかった。

『やったか？』

やがて煙が引いた。そこには、今にも戦闘不能になりそうだが、

ギリギリで持ちこたえているハッサムの姿があった。

「まだ立ち上がるのか!？」

思わずハイクが声を上げる。

「……だが、もうほとんど体力は残っていないハズだ」

と、ジユカインがつぶやいた。確かに、この状況では勝ったも同然だろう。

「……終わったかと思っただか？」

しかし、タクヤは余裕の表情を見せる。

「いったい何を……」

「……“ギガインパクト”」

「えっ……?」

ハイク達の背後から、何者かの声が聞こえた。弾かれるように振り向くと、そこにはローブの人物と一つの間に氷の中から脱出していたムウマージの姿があった。ジユカイン達との戦いに夢中で、すっかり忘れていた。大失態だ。

ムウマージはものすごい勢いで突っ込んでくる。“ギガインパクト”はリスクが大きいが、“破壊光線”と同等の威力を持つ強力な打撃技だ。

ムウマージはまっすぐこちらに突進して来ているように見える。



しかし彼の狙いは、ジユカインでもヒノアラシでもない。ラプラスだった。

「まずい！ラプラス！」

ラプラスの素早さでは、この“ギガインパクト”をかわす事は出来ないだろう。

ハイクは咄嗟にラプラスのモンスターボールに手が伸びるが、ボールに戻すにも間に合わない。

『…フン』

しかし、それより先にジユカインが動いた。腰を低く落とし、ムウマージの軌道上の真横に回り込む。そしてタイミングを計り、“リーフトンファー”で斬り上げた。

『……………！？』

“ギガインパクト”で突進していたムウマージにとって、予想外の間合いからの攻撃だったらしく、小さくうめき声を上げる。

さらにはあらぬ方向に力が逃げ、軌道が斜め上にずれてしまった。これではムウマージは勢いを殺す事が出来ない。ティアの上を通り抜け、そのままトンネルの天井に激突した。

ドォーン！と音を立て、またトンネルが揺れる。

「！　なんだと！？」

タクヤも驚きが隠せずにいた。声だけでなく、表情からもそれが伝わってくる。

ジユカインも『よし…』と歓喜の声を上げていた。

『あ…危なかった…。ありがとうございます。助かりました』

『…礼には及ばないさ』

ラプラスがお礼を言い、ジユカインがそれに答える。

「タクヤ、もうやめよう？決着はもう着いた」

ハイクが宥めるようにタクヤにそう言った。しかしタクヤは、納得が出来ないような眼差しでハイクを睨みつけていた。その時、

ゴゴゴ…

急にトンネルの揺れが大きくなった。

「な、何だ！？」

ハイクはキョロキョロ周りを見渡し、揺れの根源を探したが、それはすぐに見つかった。

先ほどの爆発でトンネルの天井が脆くなっていたらしい。そこにムウマージの“ギガインパクト”が直撃したせいで、天井が崩れ始めていたのだ。

ガラガラ…！

大きな音を立てて、ついに天井が大きく崩れた。

「や、ヤバい！」

急いでハイクはジユカイン、ヒノアラシ、ラプラスをモンスターボールに戻し、シダケタウンの方向に走った。

「間に合え！」

ハイクは一か八か大きく跳躍した。

ズサササ…と地面に滑り込む。幸運にもそこで天井の崩壊は止まった。

「…助かった…のか？」

パラパラと小石が落ちる中、ハイクは自分が無事である事を確認した。

「良かった…けどタクヤは!？」

安心するのもつかの間、ハイクはタクヤの姿がない事に気づく。

「どこにもいない…!？まさか…」

急にハイクの心が不安な気持ちでいっぱいになり、背中から冷たい汗が滴り落ちる。しかし、そんな気持ちも次の瞬間には消えてしまった。

「この勝負はお預けだ！だが、次は必ずお前を…お前たちを殺す…」

瓦礫の越しにタクヤがハイクにそう叫んだのだ。その声には悔し

さと怒りが込められていた。

「無事…だったんだ…」

ふう、と息を吐き出し、そこでハイクはようやく肩の力を抜くことが出来た。

しかし、ハイクの中には安心した気持ちと、タクヤに裏切られた事による小さな怒りが、入り乱れていた。

## 小さな怒り（後書き）

今回は計7000文字超えと最長でした…。

ヒノアラシは思ったより活躍してくれました。しかし、ハイクの策はかなり無理矢理でしたね……（汗）

“高速移動”の発動のスイッチと言うのは僕が勝手に考えた物なので、あまり気にしないで下さいね（笑）

……………え!!?(前書き)

ラプラス『この小説って変更が多いですね』

な、何だよ急に…。

ラプラス『タイトルを変更したと思ったら、シリーズ紹介、あらすじも変更したじゃないですか』

え?…だって、やっぱり良い小説に仕上げたいじゃん?

ラプラス『そうですか…うん、そういう事にしておきましょう』

……………久々に前書きに登場したと思ったら……………酷いな…。

それでは、22話目、サブタイトルは気にせず、どうぞ!

.....え!!？

カナシダトンネルでのバトルの後、タクヤは不貞腐ふてくされた表情で16番道路へと出てきた。不貞腐れている理由は言うまでもなく、ハイクとのバトルの行方である。

あと一步の所で負けた…。いや、負けてない。あの“煙幕”が無ければ勝っていたハズだ。そもそもハツサムはまだ戦闘不能になっていない。あのままバトルを続けていれば…。

いら立ちを静める為に自分にそう言い聞かせていたタクヤだったが、そんな彼に追い討ちをかけるかのように、タクヤの耳に何者かの声が響く。

「しくじったな？」

聞き覚えのある声。タクヤの記憶が正しければ、今彼が最も会いたくない人物だ。

そんな独特の音響を聞いてさらにいら立ちを募らせつつも、舌打ちをして声の主の方に振り向く。タクヤの想像通り、彼は白いローブを着ており、フードを深くかぶった男だった。

「…まだ負けてない。あの勝負はお預けだ」

タクヤはローブの男に言い返した。  
端はたから見ればそれは情けない言い訳だ。ローブの男もそう解釈したようで、フツツと苦笑した後、

「だが、あのまま戦っていても、勝てたとは思えないがね？」

と、言い放った。

タクヤはその言葉に対し、言い返そうしたが、言葉が詰まってしまった。ローブの男の言葉は、タクヤにとって満更でもないのだ。

ローブの男はさらに続けた。

「貴重なヘルドールまでも失うとは…。いやはや……」

「次は必ず仕留めてやる！」

タクヤは怒鳴るようにローブの男に言い返した。

しかし、そんなタクヤを見て、ローブの男は小馬鹿にするように「フフフ」と笑っていた。勿論、タクヤはさらに怒りを買い、ついにはプイッと振り返り、その場から立ち去ろうとしてしまった。

「私も、あまり気が長い方ではなくてね…。チャンスはあと1回だ。もしそれも失敗したら、金の話は無しになるが…？」

タクヤの背中に向かって、ローブの男はさらに追い討ちをかける。歩いていたタクヤが思わず足を止めた。

既にタクヤの怒りは爆発しそうだったが、ここで言い返して金の話が無くなるのはまずい。何としても大金を手に入れなければ…。どんなに汚い手を使っても…。

グツと怒りを我慢した後、タクヤは吐き捨てるようにローブの男に言った。

「心配しなくても、すぐに見せてやるよ…。ハイクの死に顔をな！」



## シダケタウン

現在、カナシダトンネルは通行禁止となっていた。ハイクとタクヤのバトルのせいでトンネルの天井が崩れてしまったからだ。

「ちょっとやり過ぎたかな…？」

ハイクは少し気まずい思いをしながら、そう呟いていた。

ハイクはトンネルから出た後、警察から事情聴取を受けたのだが、とりあえず適当な事を言って真実を隠したのだ。大事にしたくない、というハイクの思いがそうさせたのだろう。もし、ハイクは命を狙われていると知ったら、どんなことになっていたのだろうか？

そんな事を思った後、また何か事件に巻き込まれる前にここから離れようと、その場から立ち去ろうとした時、ハイクは不意に声をかけられた。

「ハイク君！」

「え……あ！」

ハイクが振り向くと、そこには1人の女性が立っていた。

ハイクの背丈、167? よりも少し大きいくらいの身長で、赤を主としたパーカーを着こなしている女性だ。

ハイクは彼女の名前を知っていた、と言いか知り合いだ。以前、ホウエンリーグに出場する際の旅で知り合い、そのまま親しい中となっていた。

「ハルカさん！」

ハイクに名前を呼ばれた女性、ハルカはにっこりと微笑んでそれに答えた。

ポケモントレーナーの最終的な目的は、リーグ優勝の他にもう1つある。ポケモンコンテストの制覇だ。リーグ優勝を目指すトレーナーが各主要都市に点々とするジムのバッジを集めるのに対し、コンテスト制覇を目指すトレーナーは、地方に散らばるコンテスト会場を回っていくのだ。会場では、定期的にコンテストが行われており、それに出場し優勝することで、その証としてリボンが捧げられるのだ。

ハルカは、既にホウエン地方のすべてのコンテストに優勝しており、幾つものリボンを手にしていた。そのセンスはホウエンの中で右に出る者はいない、とまで言われている。

「お久しぶりですね!...でも、どうしてここに？」

ハルカと会うのはハイクがリーグ優勝を果たした時以来だ。現在、ハルカはホウエンだけでなく、他の地方のコンテスト制覇

も目指しているらしい。そんな彼女がなぜこんな所にいるのか、ハイクは疑問に思ったのだ。

「フフフ…それはね…」

ハルカは笑顔でハイクに歩み寄って来た。彼女はなんとなく色っぽい雰囲気を出しているが、ハイクはあまりそういう事を気にしない。というか気づかないのだ。

そんな鈍感少年のハイクでも、次の瞬間にハルカが口にした台詞を聞いて、平常心を保ってはいただろう。

「ハイク君に逢いに来・た・の？」

「……………え！！？」

誘惑する時ような口調で言うハルカの言葉を聞いて、一瞬止まった思考が再び動き出した瞬間、ハイクは思わず声を上げてしまった。

「ちょ…ま……………え！？ハルカさん！？」

頭の中で整理が出来ていない状態で無理に喋ろうとしたので、舌が回らなくなる。なんとかハルカの名前を言う事は出来たが。

ハルカは、コンテストでも屈指の実力者だが、彼女自身のスタイルの魅力も人目を引くほどだ。

八頭身の身長で、足もスラリと長い。栗色の長髪は、彼女の白い肌と黒い瞳にベストマッチしており、キラキラと輝いて見えるほどだ。

ハイクの場合、ホウエンリーグチャンピオンとして名前だけが知られているが、ハルカの場合、彼女本人のファンもいるほどにまで

有名になっていた。

「（え！？……ちょ…えっ！？ええ！？…なにこれ？えっ！？）」

そんなモデル宛らの女性に、急にそんな事を言われたのだ。混乱するのも無理ないだろう。

慌てふためくハイクを見てハル力は、「フフッ！」と悪戯が成功した子供の様な笑みを浮かべた後、「冗談！」とハイクに告げた。

「え！？冗談……？あ…冗談か…」

混乱する中で、いきなり投げかけられた言葉に戸惑いを見せたハイクだが、冷静になってハル力の言葉を整理し、ようやく状況を把握する事が出来た。

「は、ハア…。ハル力さんも人が悪いですよ……」

「フフフフ！ゴメンね！」

胸を撫で下ろすハイクに対し、たいして反省もしてないような口調でハイクに謝った。しかしハル力は、また何かを思いついたような表情を見せた後、さらにハイクに冗談攻撃を仕掛けた。

「ところで、レインちゃんとは上手くいってるの？」

「……え！！？」

ハル力は本当に冗談が好きなのようだ。まあ、それを本気で受け止めてしまうハイクもハイクだが…。

今回は、先ほどよりも反応が早かった。

「い…いや、そんな…！別に俺達 付き合っていないですよ！ただ幼馴染なだけで…」

交際を本気で否定するハイクを見て、ハル力はわざと「ふーん…」とつまらなさそうな声を上げてみた。

「そ…それより！ハル力さんは本当はなんでこんな所に来たんですか？…まさか俺をからかうためだけに来たわけじゃないでしょ？」

ハル力は次のハイクの反応を楽しみにしていたが、ハイクは、ハル力のそんな行動は気にも留めず、慌てて話題を変えてしまった。

…さすがに、これ以上ハル力のペースに流されたままでは身が持たない。

「あ、そうだった！ハイク君をからかうの面白いから、すっかり忘れてた！」

それを聞いたハル力は何かを思い出したかのように手をポンツと叩き、そう言った。

「（からかうの面白いからって……。酷くないか……………？）」

ハイクは内心そう思っていたが、口には出さなかった。

「実は、ある男の子を追ってここまできたの」

「男の子？」

そこでようやくハルカは話題を変えてくれた。ホッと一安心したハイクだったが、すぐにハルカの話に集中する。

「そう。歳は14歳で、身長は……これくらいかな？」

ハルカは自分の手で、男の子の身長を再現する。なるほど、ハイクよりも少し小さいくらいか。

そんな事を思っていたハイクだったが、次にハルカが口にした男の子の名前を聞いて、驚愕した。

「名前は、タクヤ君って言うんだけど……」

「タクヤ……!？」

これはどう言う事だろう？ハルカとタクヤは知り合い、と言う事になるのだろうか？

「……ハイク君、何か知ってるの？」

ハルカがいつにも増して真剣な表情でハイクにそう尋ねた。

ハイクは、「はい……」と返事をした後、タクヤについて話し始めた。

「そう、だったの……」

緊迫した雰囲気の中、ハイクはタクヤについてハルカに話した。周りの人が、「何事だ？」とチラチラ様子を窺っていたが、そんな事は気にせず、ハルカだけに聞こえるような声の大きさで話した。

「タクヤ君……そんな事まで……」

ハイクは聞き取る事が出来なかったが、ハルカはボソリとそう呟いていた。

「ハルカさんは……タクヤとはどんな関係なんですか？」

「う……ん。ちょっとね……」

ハイクが質問したが、ハルカは曖昧にそう答えた。ハイクは不信感を抱くものの、深く追求はしなかった。

「タクヤを、追ってるんですね？……ごめんなさい。俺がカナシダトンネルの天井を崩しちゃったから……追えなくなっちゃって……」

「う、ううん！ハイク君は悪くないよ」

責任を感じて俯くハイクに、ハルカは慰めの言葉を飛ばした。タクヤが116番道路に行ったとしても、別の場所から回り込めばい

いのだ。

「そついえば…、ハイク君も、何でシダケタウンにいるの？」

自分がした質問と同じような質問をされたハイクは、ハルカに答えた。

「実は、俺も人を探してて…」

ハイクは自分が探している人物、Nの特徴をハルカに説明した。うんうん、と頷きながらハルカは話を聞いていたが、ハイクの説明が終わると少し考え込んでしまった。しかしすぐに顔を上げ、口を開いた。

「私、その人見たことあるかも！」

「え！？本当ですか！？」

ハイクは初めて有力な情報を入手した。すぐさま、どこで見たのか場所を聞く。

「え…と、たしかキンセツシティ辺りだったかな…？」

「キンセツシティ…？すぐ近くじゃないですか！」

キンセツシティはここから歩いて1、2時間ほどでつく場所にある町だ。自然とハイクのテンションも上がる。

「よし！すぐに行ってみます！」



いてもたってもいられず、ハイクは走り出そうとした。

「あ、待って！」

しかし、それはハルカの一声で制されてしまふ。とりあえず落ち着いてから、ハルカの話聞いた。

「せっかくだし一緒に行かない？私もカナズミ方面に行かないといけないし、今はここからじゃいけないでしょ？」

ハルカはそう提案した。なんとなくハイクはこうなる事を想像してはいたが。

「え…？まあ、いいか。そうしましょう」

今は一刻も早くキンセツシティに行きたかったので、この時ハイクは提案を呑んだ。

しかし、ハルカの性格から考えて、途中、ハイクにお得意の冗談攻撃を仕掛け、騒ぎを起こすであろう事を、ハイクは考えていなかった。

.....え!!?(後書き)

僕はセンスがほとんど無いので、ハルカのファッションやスタイルが本当に良いかは、よくわかりません(汗)  
詳しい人がいたら、どうかアドバイスを下さいorz

## 嘘と冗談（前書き）

活動報告でも述べましたが、元々 投稿済みだった「プロローグ」と「出会い」を結合して新たな「出会い」とし、新たに「プロローグ：起こりうる出来事」というのを執筆、投稿しました。ぜひ、ご覧になって下さいね。

それでは、どうぞ！

## 嘘と冗談

太陽は既に西に傾いていた。

赤オレンジ色の日光が、ちょうど視野に入り、思わず手で目を覆ってしまう。

117番道路。今ハイク達がいる場所の名前だ。キンセツシティとシダケタウンの間にある道路で、広がる花畑や心地よい風、おいしい空気といった、自然豊かでのどかな林道として知られている。

無論、ホウエン地方の異変はここも対象外ではないようで、チラリチラリと見覚えのないポケモンの姿を見かける。ただ、ここは101番道路などと比べると、力に捕らわれたポケモン、数は少ないようで、何度か見受けられた人達は、異変を多少は察知しているもののパニックにはなっていないようだった。

ミシロタウン。思えば今どうなっているのだろうか。ハイクが見てきた中で、あの辺りが1番多く、力に捕らわれたポケモンを見かけただろう。今頃大騒ぎになっているのではないか。

「ハイク君どうしたの？」

ボーと考えていると、心配になったのかハルカが声をかけてきた。

「あ……いえ、別に……」

ハルカの質問に曖昧に答えるハイク。

今はミシロタウンの事を気にしてもしょうがない。ハイクにはや

りたい事、やるべき事がある。それを真つ当するだけだ。

ハルカも、それ以上は追求しなかった。

「そういえば、ハルカさんは大丈夫だったんですか？」

フとあることに気づいたハイクは、ハルカに尋ねた。

「へ？何の事？」

しかしハルカは、質問の意味を理解できなかったらしく、ハイクに聞き直してしまう。

自分の言葉が説明不足だと知ったハイクは、

「ミナモシティの事です。……レジスチルが襲ってきたんですよ？」

と、補足した。

それを聞いたハルカはようやくハイクの質問の意味が分かったらしく、「ああ、その事」と声を出して納得していた。

「……その時はもう、タクヤ君を追ってミナモシティを離れてたから……。私は大丈夫だったの」

ハルカは少し時間をかけてそう答えた。

ハルカは元々ミシロタウン出身なのだが、最近ミナモシティに引っ越したのだ。

第二の故郷であるミナモシティが、今回の中でも大きな件に巻き込まれたのだ。この話は持ち出さない方が良かったかな、とハイク

は少し後悔した。

「ミナモシティが大変な事になってた、て聞いたのは今朝だったから……。もし私がある場にいたら、何か出来たのかもしれないけど……」

少しずつ雰囲気重いものになる。……この話題を持ち出したのは本当に失敗だったようだ。

「あ、ごめんね！変な雰囲気にしちゃって……」

「いえ……話題を持ち出したのは俺の方ですから……。ハル力さんはあまり気にしないで下さい」

場の雰囲気が重いと、いち早く察知したハル力は、明るい声でハイクに謝った。ハイクはそんなハル力を宥めるようにそう言ったのだが……。もう少し気分を明るくしても良いのでは？

「あれって……」

そんなこんなで、先を急ぎ歩いていると、目の前に赤い屋根の小さな小屋がポツンと立っていた。

もう建築されてから かなりの年月が経っているようで、所々シミのような物が残る木製の小屋には、補強されたような跡が残っていた。その部分だけが妙に新しいので、目立って見えてしまう。

そしてその小屋から、やはり木製の柵が連なっていた。普段なら、その柵の先からは、ポケモン達の鳴き声が聞こえるハズなのである。しかし、今日は不思議と静まりかえっていた。

育て屋、という物をご存じだろうか。1度は聞いたことがあるはずだ。

トレーナーのポケモンを預かり、ある程度育成してくれる一種の公共施設だ。基本的に、ポケモンを預けられる期間は無制限だが、ポケモンを受け取る際、預けた期間に合った代金をトレーナーは支払わなければならない。

有料ではあるが、比較的安価な上に、プロのブリーダーが育成してくれる。その為、まだポケモンを育てなれてない、駆け出しのトレーナーに人気のある施設だ。

育て屋は、いつもなら預かったポケモンを柵で囲まれた庭のような場所にポケモンを自由に放し、育成しているが、なぜか今日は1匹もポケモンを放していない。どういう事だろうか。

「こんにちは」

不穏に思いつつも、ハイクは、小屋の前に立っていた1人のお爺さん声をかけた。

「おお、君は確か……ハイク君じゃったか？こりゃまた随分久しぶりじゃのう……」

お爺さんも、老人独特の口調でハイクに答えた。

実は、この老人は育て屋の1人なのだ。周りの人からは、育て屋爺さんと呼ばれ、親しまれている。

現在、育て屋はハウエン地方ではこの場所にしかない。しかも運営しているのはたった2人で、どちらも老人なのだ。

2人とも、まだまだ現役で育て屋を続けたいらしく、引退する気は微塵も無いらしい。

ハイクは、この2人とは知り合いだった。前にホウエン地方を旅した際、お世話になったのだ。

「ん？そちらのお嬢さんは……？」

育て屋爺さんはハイクと共にいたハルカについて、尋ねてきた。

「お前さん、テレビで見たことあるぞ……はて、何じゃったかの？」

「やだなあ、ハルカですよ！前にもお会いしましたよね？」

ハルカは育て屋爺さんにそう答えた。なるほど、ハルカも育て屋爺さんを知っているようだ。顔が広いんだなあ、とハイクは思った。

「おお、そうじゃったそうじゃった。名前が、出てこなくての」

育て屋爺さんは、笑いながらハルカにそう言っていた。それに釣られて、ハルカも苦笑していた。

「じゃが、何でハイク君と一緒にいるんじゃ？」

すると、育て屋爺さんがハルカにそう尋ねた。

テレビに出る程の有名人が、なぜハイクと一緒にいるのか、不思議に思ったのだろう。

ん？その質問は……ああ、何か嫌な予感が……。



「実は私たち、付き合ってるんです!」

「はあ!?!?」

やっぱり……。多少は予想していたが、やはり声を出して驚いてしまう。

ハイクは、この日だけで何回そんな声を出して驚いただろうか。

「ほう……。こんなに綺麗な方とお付き合いしてるとは……。ハイク君も、なかなか隅に置けんのう」

「ちょ……。違うんです!勝手に話を進めないで下さいよ!」

ハイクは慌てて否定するのだが、それを無視してハルカが話を進めた。

「フッフ私の自慢の恋人なんです!」

「ホッホッホ!若たって良いのう」

話がどんどん膨らんでしまう。このままではさらに変な方向に進んでしまうだろう。

「待って下さい!冗談、冗談ですよ!冗談ですよ、ハルカさん!と言うか、これはもう冗談では済まされませんよ!」

さらに慌てたハイクが、叫ぶようにしてそう言った。

ハイクの必死の叫びのお陰で、ようやく育て屋爺さんも冗談だと気づいてくれたようだ。

「なんじゃ、冗談じゃったか……」

「いやいや！何ちよつとつまんなそうな顔してんですか？」

残念そうにしていた育て屋爺さんに、ハイクはツッコんだ。  
そんな風に慌ててふためくハイクを見たハル力は、苦笑した後、宥めるようにハイクに言った。

「どう？少しは元気出た？」

「え……？」

「さっき、私が変な空気にしちゃったから、元気が無くなってたでしょ？」

「あ……」

どうやらハル力は、先ほどの事を気にしていたようで、ハル力なりに気を使ってくれたようだ。本当に、悪い事しちゃったなあ……とハイクは思い、ハル力に謝った。

「あ、そういえば……」

フと育て屋を見たハイクは、ある事を不思議に思った。

「今日は、ポケモン達を見かけませんが……どうかしたんですか？」

ハイクは今 気になっている事を育て屋爺さんに尋ねた。やはり  
ホウエン地方の異変の影響なのだろうか？

「ふむ、リーグから指示があつての。急ぎよ、別の場所に移動させ  
たんじゃよ」

「リーグから、ですか？」

育て屋爺さんの答えを聞いたハイクは、つい声に出してしまった。

ポケモンリーグは、それぞれの地方で定期的にポケモントレーナ  
ーの大会を開いているだけではなく、地方の政権の一部を、握って  
いるらしい。いわゆる知事のようなものだ。

そのリーグから直接指示があつたのならば、かなりの大事だろう。

「やっぱり、ホウエン地方の異変の影響ですか？」

「おそらく、な。……明日、リーグがホウエン地方の全面的な調査  
を開始するらしいのじゃが……」

「え……？　そうなんですか？」

ハイクの質問に対し、育て屋爺さんが答えた内容は初耳だった。

異変が起きてから、明日で三日目。リーグも事態がかなり悪い  
と判断したのだろう。

そんな事を思っていると、育て屋爺さんがハイクに別の話題を持  
ち出した。

「ところで、前に君に渡したタマゴの子、元気にしとるか？」

しかし、ハイクの表情はその言葉を聞いた瞬間、暗いものとなる。ちょうど育て屋爺さんに背を向けていたのでその表情を読み取られる事は無かったが、ハイクは何て答えればいいか分からず、言葉が詰まってしまった。

「ハイク…君？」

ハイクの異変に気付いたハルカが、心配そうに見つめてきた。それに気付いたたハイクは、慌てて表情を明るい物とし、振り返って育て屋爺さんの質問に答えた。

「あいつは……元気ですよ」

ハイクは、嘘をついた。

「ほう、そうじゃったか。それは良かった」

ハイクは前の旅の途中に、育て屋の夫妻に身寄りのないポケモンのタマゴを、譲ってもらった事がある。

初めてのポケモンのタマゴだったので、どんなポケモンが生まれるか、わくわくしながら旅を続けていた。そして、ようやくタマゴが孵ったのだ。あの時の溢れるような感動は今でも忘れない。

タマゴから孵ったポケモンはすぐにハイクに懐いてくれた。そしてそのまま、ずっと一緒に旅を続け、ずっと一緒に暮らしてきたのだ。そう、あの時まで。

研究所から忽然と姿を消したハイクのポケモン。その中に、彼は含まれていたのだ。

今は、どこにいるのかも分からない。また会えるのかさえも分か

らない。ハイクに最も懐いてくれた、そのポケモンに……。

「あの……それじゃ俺たち、もう行きますね。行かなきゃいけない所があるので……。お婆さんにも、よろしく伝えといて下さい」

「ん？そうじゃったのか。……分かった、婆さんにも伝えておこう」

「……はい、お願いします」

考えれば考える程、ハイクの胸はどんどん苦しくなる。

これ以上、笑った表情を続けるられるかどうか、自身が無くなったハイクは、そう言い残してその場から立ち去ってしまった。

「あ、待つてよ、ハイク君！それでは、またお会いしましょう」

慌ててハルカもハイクの後を追った。

「うむ、氣いつけてな」

育て屋爺さんが見送っている中、ハルカは少し小走りでハイクを追った。

「ハイク君？一体どうした……の？」

ようやくハイクに追いついたハルカは、ハイクの顔を見て言葉を

失った。その表情は、育て屋爺さんと話した時の明るい表情とは別の、厚い雲に覆われた空のような表情だった。

## 嘘と冗談（後書き）

前回と今回でふざけすぎました……。

次回、「いかずち雷”の召喚陣”です。  
お楽しみに！

感想、お待ちしていますので、どしどしお書き下さい！

“雷”の召喚陣（前書き）

予告通りです。

今回は、かなり長くなってしまいました……。



## “雷”の召喚陣

「やっと……着いた……」

ハイク達は、ようやくキンセツシティに到着した。シダケタウンから歩くこと一時間弱、辺りはすっかり暗くなっていたが、何とか着くことが出来た。

キンセツシティは、ミナモシティやカナズミシティと比べると劣るが、そこそこ大きな街だ。

また、この街には雷タイプのポケモンの使い手、テッセンが管理するポケモンジム、キンセツジムがある事でも有名である。ホウエンリーグを目指すなら、必ずしも潜らなければならない関門だろう。ホウエンリーグは半年ほど前に開かれたばかりなので、少なくとも後 半年から一年以上は開かれなだろうが、今のうちに早めにバッジを集めておこうと考えるトレーナーも多いようで、ジムの休暇は少ないようだ。

「それで、どの辺りでNを見たんですか？」

ハイクがハルカに質問した。

ただ一口にキンセツシティといっても、完全に場所を特定できる訳ではない。勿論、かなりの時間が経ってしまっているので、Nがまだそこに留まっているとは考えにくいが、多少の手がかりだけでも今のハイクにとっては大きな助けとなる。

「うーん……。確か、ジムの近く辺りだったような……」

ハルカは曖昧に答えた。しかし、それだけで十分な情報だった。

ジムならば仮にそこにNがいなくても、普段からかなりの人々で賑わっているため、ジムの人がNへと繋がる手がかりを握っている可能性が高いのだ。

「あ、でも確信は出来ないから……、一応 手分けして探した方が良いと思うよ。私も手伝うから」

「良いんですか？ すいません……。じゃあ俺はジムの方に行ってみます」

ハルカの厚意に申し訳なさそうに甘えつつも、ハイクはジムへと向かった。ハルカも少しでも良い情報を得る為に、ハイクとは別の方向に足を運んだ。

キンセツジムは、赤い屋根といい自動ドアといい、カナズミジムと比べても大差ない作りをしていた。と、言うかポケモンジムは他の街でも同じような作りをしていた。多少の違いはあるものの、どんなトレーナーでも一目で分かるように、といった配慮だとか。まあ、例外は有るのだが。

「よし……」

自動ドアの開放音と共に、ハイクはジムの中へ入った。

外は暗いが、ジムの中は眩しいくらい明るかった。

天井に敷き詰められた多くの蛍光灯だけでなく、規則的に床に置かれた何かの装置が光を放っているため、明るさは普通の建物の倍近くだった。まさに、雷タイプのジムに相応しい光景だろう。

「こ、こんばんは」

ハイクはジムの奥まで進み、このジムのジムリーダー、テッセンに声をかけた。

「ん？おお！こりやまた懐かしい顔がやって来たぞ！」

テッセンはハイクは見た途端、懐かしそうな声を上げてそう言ってきた。どうやら半年前とほとんど……いや、全く変わってないようだ。

テッセンはハウエンのジムリーダーの中でも、最も高齢なお爺さんだが、その元気と健康さはジムリーダーの中でも随一だろう。その健康の秘訣は、本人曰く、とにかく笑う事、らしい。控えめなハイクとは正反対な性格だ。

「ど、どうも……」

「わっはははは！相変わらず元気がないのう！もっと元気をだすのじゃー！」

「ははは……。お元気それで何よりです」

相変わらずの高いテンションで出迎えてくれたテッセンのペースに、いつの間にかハイクは流されてしまった。もともとハイクは人前では大声で笑う事はないので、こんなにも清々しく笑えるテッセンが少し羨ましかった。

「ハイク君、あの後ホウエンリーグを優勝してチャンピオンになったそうじゃな！まったく、君には驚かされてばかりじゃよ！わっははは！」

「え？あ……いや、リーグチャンピオンになれたのは、ほとんどまぐれみたいなもんで……。運も良かったっていうか……。レインも、俺と同じくらいの実力ですし………」

思わぬタイミングでテッセンにその話を持ち出されたので、照れ隠しをするかのようにハイクはそう答えた。ハイクはあまり煽てられたりするのが得意では無いので、どうしてもそんな受け答えになっってしまう。

「あ、あの！実はテッセンさんに伺いたい事がありまして……」

そこでハイクは、隙を見てようやく本題に入る事が出来た。ハルカもN探しに協力してくれているというのに、ハイクだけいつまでも世間話をしている訳にいかないだろう。

ハイクはテッセンにNのたまかな特徴を伝え、このジムを訪れていないか、などの質問をした。

しかし、テッセンは少し考え込んだ後、

「うーん……そんな奴は来とらんのか……」

と答えた。

それを聞いたハイクは、がっくしと肩の力が抜けてしまった。  
ようやく手がかりを掴んだかと思ったら、またどこかへ逃げられ  
……。雲を掴むような話、とは正しくこの事だろう。

「あ、あのお……ちょっと良いですか？」

すると、がっかりしていたハイクにジムのトレーナーが声をかけてきた。不意な事だったので、ハイクはやや反応が遅れたが、

「あ、はい。俺に用ですか？」

と、トレーナーに答えた。

「あの、そんなような人なら僕 見ましたよ。……たぶん」

そのトレーナーの言葉を聞いた瞬間、ハイクの心臓の鼓動は速さを増した。

驚くべき事に、そのトレーナーはNらしき人を見たと言うのだ。

「え！？……あの、その、どこで見たんですか？」

思いがけぬ収穫。動揺を隠せずに、ハイクはトレーナーに詳しい情報を尋ねた。

「えっ…と、確か煙突山の麓 辺りを歩いていたと思いますが……」

「煙突山、ですか。分かりました。ありがとうございます！」

煙突山と言えば、ここキンセツシティから111番道路を経由した所の、112番道路に存在する活火山の事だ。毎日のように山頂から煙が立ち籠めており、その姿が煙突のように見える事からそんな名前が付いたと言われているらしい。

だが、キンセツシティの次は煙突山……だんだん離れているような気がするが、情報が何も無かった時と比べるとかなり気が楽だった。

「良かったのう、ハイク君！君がそんな大声出してるの初めてみたぞ！はっはっはっは！」

またテッセンが大声でハイクにそんな事を言っていた。

よくそんなに笑っていて疲れないな……、と内心テッセンを関心し、羨ましがっているハイクがいた。

## 数時間

「う……ん……？」

ここはキンセツシティのポケモンセンターの宿泊施設。真夜中にハイクは目が覚めた。

あの後、もう一度テッセンとトレーナーにお礼を言った後、キンセツジムを後にした。その後、ハイクはハルカと合流した。

ハルカはあまり良い情報を得る事が出来なかったようだが、ハイクがキンセツジムのトレーナーから、Nの目撃情報を得ていたので、支障はきたさなかった。

一刻も早く煙突山に向かいたかったが、二人が合流した頃にはかなり遅い時間になっていたので、出発は明日という事になったのだ。

「……………」

チラリと時計をしてみる。現在夜中の三時五分。あまりに中途半端な時間だったので、ハイクは思わずため息をつきそうになった。こんな時間に起きている人と言えば、徹夜で勉強している者か、夜更かしてテレビを見ている者、またはゲームに没頭している者くらいだろう。当然の如く、外をフラフラとろついている奴はそういないはずだ。

「……………何だろう？何か眠れない……………」

布団の中でもぞもぞと動きながら、ハイクはそう呟いた。一度起きてしまっただけからというものの、何だか目が冴えてしまい、なかなか寝付かれなかった。

布団に入ってから目が覚めるまでの数時間、ハイクには寝ている

間の記憶が無かった。と、いう事は夢を見なかった、あるいは忘れていたのだろう。

おそらく、変な夢を見たせいで起きてしまった訳では無さそうだからと言って、トイレに行きたい訳でも無い。

「ん？……！？」

何もする事がなく、ただボーッとしていると、急にハイクの頭に頭痛のようなものが走った。

「（何だ……！？）」

キーンと頭の中で弾けるような頭痛だったが、痛すぎてどうしようもないほどでは無い。そんな事よりも気になる事が一つ。

「今のつて……一体………？」

ハイクの頭の中には、頭痛と共にあるイメージが過っていた。ぼんやりとしているけど、何だが妙にリアルで頭に外部から直接流れ込んでくるようなイメージ。

胸騒ぎを感じたハイクはベッドから飛び降り、寝る時の薄着から、急いでいつもの私服に着替えた。

ハイクの頭の中に流れ込んできたイメージ。それは101番道路のヒノアラシの時と同じ、誰かに助けを求めている。そんなイメージだった。

着替え終わったハイクは、導かれるようにして部屋の出入り口まで歩き、ドアノブに手を取った。

ハルカとハイクの寝ている部屋は別。ハルカを起こしてしまう心



配は無いだろう。

「（なんだ、この感じ？……懐かしいような、寂しいようなイメージ……。俺は、こいつを知っている………？）」

そんな事を考えながらも、ハイクはノブを回し、部屋から出た。そしてそのまま、何かに引っ張られるように、ポケモンセンターからも出る。

無意識の内に、体が動いていた。

キンセツジム

「ここって……」

ハイクが向かった場所、そこは先ほど情報収集の為に赴いたキンセツジムだった。

もう遅い時間なので、キンセツジムは静まり帰っており、人の気配は無かった。ジムに幾つかある窓はシャッターが閉まっており、中を確認する事が出来なかった。しかし、シャッターが閉まってない場所が一カ所……。

『……どうした、ハイク？』

「ジユカイン……？」

そんなキンセツジムの様子を眺めていると、モンスターボールの中からジユカインが声をかけてきた。

いつから起きていたかは分からないが、ボールの中からハイクの異変を察知したのだろう。勘が鋭いジユカインの事だ。なぜハイクがこんな時間にこんな所に来てしまったのか、なんとなく分かっているのかもしれない。

『……何か、感じるのか？』

思った通り、ジユカインはハイクにそんな質問を投げかけてきた。

「ああ……誰かが、俺を呼んでいる……そんな気がするんだ」

『……ヒノアラシの時、みたいにか？』

「うん……けど、今回は何だか……」

ハイクはそこまで言った後、キンセツジムに歩み寄った。

一カ所だけシャッターが閉まっていない場所、入口である自動ドアの前に立った。

本来ならこの時間、ジムは既に電力を落としているハズなのである。勿論、自動ドアも作動しないハズ……。しかし、ジムの自動ドアはハイクが前に立った途端センサーが反応し、ウーンと音を立てて開いた。

「開いた……？」

驚きを表情に現しつつ、ハイクはそう呟いた。

今日の天気は快晴。夜空に浮かぶ満月の月明かりでさえ、眩しく感じてしまう。そのお陰で、明りのついていないキンセツジムの内部の様子を窺う事が出来た。ただし、入口から入る少量の月明かりなどたかが知れており、あまり詳しくは様子を窺う事は出来なかった。

「……………」

ハイクは無言でジムの中に入った。一步一步慎重に、少しずつ入っていく。糸を張ったような緊張感のせいで、たった一秒が何倍もの長さを感じてしまう。

ハイクが完全にジムの中に入った、その時だった。

「え……！？」

急にハイクの背後から大きな音が聞こえたかと思うと、ハイクの視界が真っ暗になった。慌てて後ろを振り向くと、その原因が一瞬で分かった。

シャッターが、閉まってしまったのだ。

「これって……閉じ込められた！？」

真っ暗な闇の中、思わずハイクは大きな声を出してしまった。目の前が見えないため、余計にそわそわしてしまう。

「あ……そうだ。あいつに頼めば……。出てこい、ヒノアラシ！」

ある事に閃いたハイクは、モンスターボールからヒノアラシを出した。ポンツという音と共に、ハイクの近くに淡い光が灯った。思った通り、ヒノアラシの背中 of 炎が明り代わりになってくれたのだ。

「よし……。ありがとう、ヒノアラシ」

ハイクは辺りを見渡した。見た限りでは、特に変わった所はない。ではなぜ急にシャッターは閉まったのだろうか。

『は、ハイクさん……。あれ……。』

「ヒノアラシ？ どうし……。！？」

脅えた様子のヒノアラシが、ハイクに何かを指摘した。それを確認しようとした瞬間、辺りの様子が変わった。

真っ暗だった部屋に急に明りが灯り、機械の作動音がした。しかし、そんな事さえも気にならなくなるほど、ハイクは驚愕していた。

目の前に、見覚えのあるようなものが描かれていた。

それは、カナズミジムで見た、魔方陣のようなものそっくりだった。

「これって……。まさかカナズミジムと同じ……。！？」

嫌な予感がしていた。カナズミシティと同じ事が起きようとして

いる。そんな気がしていた。

そんな風に魔方阵を眺めていると、バチバチと音を立てて、陣から光が溢れだした。

やはりこれは、カナズミジムのと同じ物。だとしたら、次に起こることは……。ハイクには予想がついていた。

「やっぱり……」

予想は的中。魔方阵の真ん中に、一匹のポケモンが現れた。

まず目に入るのは長い尻尾。その先端には、雷を模したようなものがついていて。そして、薄いオレンジ色のネズミのような身体。

ねずみポケモン、ライチュウ。そのポケモンの名前がそうである事は、一目で分かった。

「……………ジュカイン！」

ハイクは、モンスターボールからジュカインを出した。今まで通りなら、あのライチュウは敵。ハイク達を、殺そうとするだろう。ならば、あらかじめバトルの準備をする必要があった。

「（ライ…チュウ……か。まさかな……………）」

頭のなかで、ある事が連想されるも、ハイクは無理矢理それを振り払った。

『ハイク……どうする？』

ジユカインが、ハイクの指示を待つ。

「……まずは、こっちから攻めてみよう。“エナジーボール”だ」

「……分かった」

ハイクの指示を聞いたジユカインが、“エナジーボール”の準備をした。

右手に出来上がった“エナジーボール”を、ライチュウに飛ばした。大きな音が轟き、“エナジーボール”が爆発する。

「……どうだ？」

煙が舞っているせいで、どうなったのかを確認する事は出来ないが、これぐらいじゃ終わりはいらないだろう。

しかし、ライチュウは一向に動きを見せない。

「……なぜ、動かない？」

「っ！？避ける、ジユカイン？」

「なっ？」

ライチュウは、一向に動きを見せない。その為、少し気を緩めてしまった。

気づいた頃には、もう遅い。

ライチュウは、ジユカインの背後に回り込んでいたのだ。ビリビリと音を立て、頬の電気袋が発光する。

そして、ピヨンと小さくジャンプすると、頬に溜め込んだ電気を

一気に解放、ジユカインを襲った。

『くっ？』

ライチュウの“10万ボルト”を受けたジユカインは、ガクンと脚の力が抜け、座り込んでしまった。

『チイ……！』

ジユカインを攻撃したライチュウは、綺麗に地面に着地した。ジユカインは、“10万ボルト”の影響で痺れた身体を無理矢理動かし、ライチュウを“リーフトンファー”で攻撃した。

『なっ？』

その攻撃は当たっていた。当たっていたハズだ。しかし、手応えがない。“リーフトンファー”は、空を斬っていた。

『ジユカインさん、後ろです！』

ライチュウは、凄まじいスピードでまたジユカインの背後に回り込だ。あまりに凄まじ過ぎるスピードの為、常人ではその姿を捕らえる事でさえ難しいだろう。

ライチュウはまた、“10万ボルト”で攻撃した。

「“電光石火”で相手を翻弄しつつ、隙を見て“10万ボルト”で攻撃……」

ライチュウの戦い方を見たハイクは、そう呟いた。この戦い方、

どこかで……。

「?うぐう?」

その瞬間、頭痛がまたハイクを襲った。だが、今回の頭痛はポケモンセンターの時と比べ、遥かに激しい頭痛。

『ハイクさん?』

ハイクの身を心配したヒノアラシが、そう言った。が、それに答えることさえ、出来ない。

これは、ただの頭痛ではない。頭の中に直接イメージが流れ込んでくる感じだ。それも、どれもハイクの頭の中に存在していた、数々の思い出ばかり。

『ハイク?』

ボールの中からハイクの異変に気づいたラプラスが、勝手にボールから飛び出し、ハイクに呼びかけた。しかし、そんな事は気にならない。気にする事さえも出来ない。

「くう……ハア……ハア………」

頭痛が収まり、ハイクはゆっくりと立ち上がる。戦っていたジユカインも、ハイクの異変に気づいているようだ。

『ハイク、大丈夫ですか?』

ラプラスが声をかけるが、反応がない。顔を覗きこんでみると、目を大きく開き、息を切らしていた。明らかに普通でない。



「嘘だ……」

ボソリとハイクが呟いた。

『嘘……？何が嘘なのですか？』

ティアが質問するが、やはり反応はない。  
ハイクは意識を失いかけていた。

## “雷”の召喚陣（後書き）

今回は、色々と詰め込み過ぎ+グダグダでしたね……。そこが反省点です。はい……。

次回で多分、4章ラストです。

なるべく早く更新出来るように頑張りますので、楽しみにして下さい。

哀しみと苦しみと……（前書き）

お待たせしました！

第4章ラスト、どうぞ！

哀しみと苦しみと……

ハイクは、暗い表情のまま俯いていた。相変わらず息を切らしており、顔には汗が浮かんでいる。

『ハイク、しっかりして下さい！』

ラプラスが呼びかけても、返事はおろか反応すらない。完全に周囲の音をシャットアウトしているようだ。

何かに迷っている？いや、何か受け入れ難い真実を知ってしまったような、そんな表情だった。

ハイクの異変は、ライチュウと戦っている最中のジユカインでも察する事が出来た。しかし、今は目の前の敵との戦いに集中すべき時だ。ハイクを呼びかける事は出来ない。

ジユカインはしばらくの間ライチュウの攻撃を受けている内に、だんだんと動きが読めるようになってきた。

基本的に“電光石火”と“10万ボルト”の繰り返し。だが、ライチュウの姿を確認してから攻撃を仕掛けるのでは遅すぎる。なら、あらかじめライチュウが動きを止める場所を予想すれば良い。

相手の攻撃を見切る技、“見切り”を使うのが一番手っ取り早いのだが、残念ながらジユカインは“見切り”を使う事が出来ない。自分の感覚だけを頼りに、ライチュウの位置を把握するしかない。

『クッ……』

なんとかライチュウの“10万ボルト”を避けた後、ジユカインは目を瞑り神経を集中させる。

そして、今までのライチュウが動きを止めていたポイントを思い出す。ライチュウは、必ずジユカインの視界の外に回り込むような動きをしていた。と、いう事は次にライチュウが動きを止めるポイントとは……。

『……そこだ』

ジユカインは素早く後ろを振り向き、“リーフトンファア”で攻撃した。

今回は手応えあり。

ジユカインが攻撃したちょうどその場所に、ライチュウは動きを止めたのだ。

思わぬ反撃にライチュウはなす総べなく、吹っ飛ばされた。大きな音を立てて壁に激突する。

ジユカインは、『よし……』と歓喜の声を上げていた。

『………』

ライチュウは、無言で立ち上がる。ダメージは受けたハズだが、何事も無かったかのようだ。

“リーフトンファア”が直撃した所は赤くなっていたが、ライチュウはまるで動じない。

『(ダメージは……受けているのか?……いや、受けているハズだ……。やはりこいつも、あの時のシェイミと同じ……)』

ジユカインは、心の中でそう考えていた。カナズミジムの事を思い出していたのだ。

あの時 戦ったシェイミと同じならば、普通のライチュウと同じ感じで戦っていたは勝てないだろう。

おそらく、あのライチュウも 力に捕らわれているハズ……。なら、少しでも油断したら、あっという間に殺されてしまうだろう。

そんな事を考えていると、またライチュウの姿が消えた。ジユカインに反撃をするつもりだろう。

それを見たジユプターは攻撃に備えるのだが、いつまで経ってもライチュウは攻撃してこない。

ジユカインは、少しずつ妙に思ってきた。

「（なんだ……？ 攻撃しないのか……？ それとも俺を狙っていないのか……？。だとすると……）」

ハッとジユカインはある事に気づいた。

「ラプラス！ ハイクとヒノアラシを連れてそこから離れる！」

「え……？」

ジユカインは叫んだ。しかし、もう遅かった。

「……………！」

ライチュウは、今度はラプラスの真上で動きを止めたのだ。そして、そこで力を集中させ、身体に雷を纏う。その後、勢いよくラプ

ラスに突っ込んできた。

『ハイク、ヒノアラシ！』

それを見たラプラスは、咄嗟に頭でハイクとヒノアラシを押し飛ばした。一人と一匹は、訳の分からないまま、何メートルか飛ばされる。

「っ！？」

『で、ラプラスさん！？』

ラプラスに押し飛ばされて、ハイクはようやく我に返った。しかし、何が起こったか今一理解出来て無いような表情でラプラスを見つめていた。

一方、ヒノアラシは声を張り上げ、ラプラスの名前を叫んでいた。

次の瞬間、激しい光が放たれた。

ライチュウの使った技、“ボルテッカー”は、落下スピードをプラスした影響で勢いを増し、通常とは比べものにならない程の攻撃力になっていたのだ。

渾身の“ボルテッカー”はラプラスに直撃した。

『う……わ……あ……』

光の中、ラプラスは呻き声を上げる。今までに感じたことの無い感覚。激しい痛みが、ラプラスを襲った。

「ラプラス……？」

光が治まった後、そこにあったのは、力尽き横たわるラプラスの姿と、それを見据えるライチュウの姿だった。

『チィ……！』

その時、ジユカインの中の何かが切れた。

“リーフトンファア”を構え、物凄い勢いでライチュウに接近する。しかし、その攻撃が当たる直前にライチュウは素早い動きで軽々しくそれをかわした。

「ラプラス！」

その隙に、ハイクはラプラスに駆け寄った。揺さぶったり、声をかけたりしてラプラスの意識を確認した。

『ハ……イク………？』

力無い眼差しでラプラスはハイクを見つめ、弱々しくそう呟いた。意識は辛うじてある。しかし、既に動ける力は残っていなかった。

一撃。たった一撃でこの中で一番 体力があるラプラスを戦闘不能にしたのだ。もし、ティアが押し飛ばしてくれなかったら、ハイクやヒノアラシは命に関わっていたかもしれない。

『ラプラスさん……ラプラスさん………』

ヒノアラシは目に涙を浮かべ、何度もラプラスの名前を呼んでいた。



「ごめん……ラプラス……」

ハイクはラプラスに向かって、そう呟いた。

自分のせいでこうなった。

ハイクはそう思っていた。

あの時、いつまでも躊躇していなければ…。

「ライチュウ……。どうして……」

ハイクはボソリと呟いた。

『……？ いったい何を言ってるんだ……？』

その呟きが耳に入ったジュカインが、ハイクに尋ねた。

その質問を受けたハイクは、躊躇うような表情を見せた後、口を開いた。

「俺がオダマキ博士の研究所に預けたポケモン……。あの日、研究所から姿を消したポケモンの一匹が、あいつなんだ……」

ハイクのその言葉を聞いたジュカインとヒノアラシ、そして辛うじて意識が残っていたラプラスは、驚愕の表情を浮かべていた。

一体どういう事なのだろう？

それではハイクの仲間……友達だったポケモンが、ハイクを殺そうとしている事になる。

『確か……なのか？』

「……言葉じゃよく表せないけど……あいつから伝わってくるイメージ……あいつの思いそのものが、ライチュウの物なんだ……！」

ジユカインの投げかけてきた言葉に対し、無言で頷いた後ハイクはそう言った。

『どういう意味だ……？』

「あいつは、俺に助けを求めている……。暗い、深い闇の中……一人ぼっちで、もがき苦しんでいるんだ……！」

言葉じゃ言い表せない。ただ、なんとなく なのかもしれない。しかし、ハイクには分かる。たとえ牙を向けられても、あのライチュウは友達だ。

ハイクがタマゴから育て続け、ずっと共に時を過ごしてきた大切な仲間だ。

それは、どうなろうと変わらない事実。ハイクとライチュウの絆は、絶対だ。

ジユカインの攻撃をかわしたライチュウは、距離をとって様子を窺っていた。

「俺が、ライチュウに呼びかけてみるよ。…俺の声が届けば、こんな事 やめてくれるハズだ……」

ハイクはラプラスをモンスターボールに戻し、そう提案した。

『だが、危険だ。あいつがあんたを襲わないとも限らない……』

しかし、ジユカインはハイクにそう言った。

その意見はもつともだ。今までハイク達を殺そうとしていたライチュウが、急に大人しくなるとは思えない。

だがハイクは、そんなジユカインの案を吞まず、一言だけ言い残し、ライチュウに歩みよった。

「……やってみるよ」

ただ、その一言だけ。しかし、その一言にはハイクの多くの思いが詰まっていた。思わず圧倒されてしまいそうな、強い思いが……。

「ライチュウ……」

ハイクが名前を呼ぶと、ライチュウはピクリとだけ反応した。しかし、依然としてハイクを威嚇している。

「やっと……会えたな……」

ハイクはすこし小さな声でそう言った。その間、ライチュウはじりじりと距離を詰めてくる。

ハイクを殺そうとしているライチュウにとって、これは願ってもないチャンスだ。警戒しつつも、隙をみて飛びかかろうとしているのだろう。

「ずっと、お前を探してたんだ。いなくなっってからずっと……」

ジユカインは、いつでも攻撃できるよう構えていた。ライチュウは今にもハイクに襲いかかってきそうなのだ。

「心に穴が開いたみたいだった。だって……急にいなくなっちゃうんだからな……。もう二度と、会えないかもしれないって、何度も思った」

これ以上は限界だ。ジユカインはそう思った。このままではハイクは殺されてしまう。

「力に捕らわれて、苦しい……だろ……？ 暗い中、一人ぼっちで……辛かっただろう？ ……でも、もう苦しまなくていいんだよ……。こんな事、しなくていいんだ……」

その時、ライチュウの動きが止まった。目の前から向けられる数々の強い思いに、体が自然と動かなくなったようだ。

『こんな事が……』

ジユカインは驚きを隠せずにいた。目の前の光景が、信じられないのだ。

ハイクとライチュウの強い繋がりが、奇跡を起こしたと言っのだろうか。

気が付くと、警戒し、逆立っていたライチュウの体毛が、少し弱くなっていた。

警戒を、緩めたのだ。

それを見たジユカインも、警戒を緩める。  
もう大丈夫だ。そう思っていた。

「一緒に、帰ろう……？」

最後にハイクがライチュウにそう言った。今まで鋭い眼差しでハイクを睨んでいたライチュウは、少しだけその眼差しを緩めていた。

これで終わったと、誰もが思った。

しかし、

『……………！？』

「っ！？ライチュウ！？」

急に、ライチュウが苦しみ始めたのだ。

ハイクが声を上げてライチュウに駆け寄ろうとするが、

「なっ！？」

ライチュウが、大量の電気を身体から放出した。

『ハイク！』

ジユカインがハイクの名前を呼ぶ。しかし、ハイクにの耳にはそれが入っていないかった。

「ライ……………チュウ……………」

ハイクが無理矢理ライチュウの所へと突き進もうとするが、電気のせいでなかなか進めない。

ライチュウは、大きな鳴き声を上げながらも、電気を放出しな

がら後ずさる。

そしてしばらくそうした後、動きを止めた。

「ライチュウ……？」

ようやく進める。そう思ったハイクはもう一度 駆け出そうとした。

『ハイクさん！だめです！！』

しかし、ヒノアラシのその叫びが耳に入り、足を止めた。

駄目？何が駄目なんだ…？

ハイクはそう思いかけたが、次の瞬間にはそんな思いも、どこかへ消えてしまった。

「え…？」

ライチュウがハイクに向けて“ボルテッカー”を使ったのだが、ハイクはすぐに この状況を整理出来る訳がない。

雷を纏い、グングンとスピードを上げてハイクに突進してくる。

「（そんな……ライチュウ……）」

ハイクは、心の中でそう呟いた。完全に身体が固まり、動けなくなってしまう。

しかし次の瞬間、ハイクの目の前に緑色の何かが割り込んできた。

それは再び攻撃態勢に入ったジユカインだった。

「ジユカイン……？」

『……はあ！』

ジユカインはタイミングを計り、“ボルテッカー”で突進してくるライチュウを“リーフトンファー”で迎撃した。

『チイ……』

そのままライチュウを押し返そうとするが、ライチュウの力も尋常じゃない。なかなか押し返せずにいた。

「……ライチュウ……」

その様子を茫然と眺めていたハイクがそう呟いた。その呟きを聞いたライチュウは、一瞬力を緩めた。しかし、ハイクはそれに気づかなかった。

『終わりだ……！』

その隙に、ジユカインは一気にライチュウを押し返した。

『ヂュウっ！？』

そんな鳴き声を上げて、ライチュウは吹っ飛んだ。

ライチュウは魔法陣の中まで吹っ飛ばされ、そのまま地面に体を強打し、動きを止めた。

「ライチュウ……？」

戦いは終わった。

しかし、思い雰囲気が辺りを覆っていた。

「ライチュウ！」

ハイクが、ライチュウに駆け寄った。それを横目に、ジユカインは座り込んでいたのだ。

ダメージは、かなり大きい。が、違和感を感じていた。

確かにあの“ボルテッカー”は凄まじい威力だった。しかし、ラプラスに放った時と比べると明らかに威力が小さいのだ。

あのライチュウは、何か混乱していたのか……？

「うつ！？」

ハイクはライチュウに駆け寄ろうとしていた。もう少し、もう少しでたどり着く。

そう思った瞬間だった。魔法陣が光を放ち始めたのは……。

『何だ……！？』

ジユカインも声を上げていた。……もう、嫌な予感しかない。

光が治まった後、そこには一人の男が立っていた。

カナズミジムの時にも、急に魔法陣から現れた人物。その人物が着ていたローブの、色違いを纏っていた。



色は白。白いローブの男……。

「ふむ……この程度か……」

白いローブの男が、そう呟いた。その声の質から、彼は男性だろう。

そしてもう一つ。おそらくこの男は、カナズミジムで会った紅いローブの人物とは別人だろう。なんとなく雰囲気が違うし、よく見るとこちらのほうが大柄だ。

「まあ、面白いものは見せてもらった。今回はそれだけで良しとしよう」

白ローブの男はそう言った後、軽々とラチュウを担ぎ上げ、ハイクに背を向けた。

「待て……!!」

しかし、ハイクが白ローブ男を引き留めた。

『は……ハイクさん……?』

そのハイクの声聞いたヒノアラシは、震えながらそう呟いていた。

そのハイクの声は、今までヒノアラシが感じた事がないほど、強い怒りが込められていた。

「ライチュウに……」

ハイクがそこまで言った後、白ローブの男はゆっくりと振り向い

た。

「ライチュウに何をした……!?!」

今までにないほどの鋭い眼差しで、ハイクは白ローブの男を睨みつけた。怒りで身体が小刻みに震える。だが、ハイクの中で渦巻いている感情は、怒りだけではなかった。

「フツ……フフフフ」

そんなハイクの眼差しを受けても、白ローブの男は全く動じず、静かに笑っていた。

怒り、苦しんでいるハイクを見て、楽しんでいるかのように……。

「なかなか、いい顔をしてくれる……。哀しみと苦しみと……憎しみに満ちた表情だ……。」

「質問に、答えるよ!!」

小馬鹿するようにそんな事を言う白ローブの男に対し、ついにハイクの怒りが爆発した。

声を上げ、白ローブの男に向かって走り出す。

「ふんっ」

「っ!?!」

しかし、白ローブの男が手を翳すと、また魔法陣が眩く光り始めた。

「やはり君は、私を楽しませてくれる。……さあ、ゲームを続けよう……」

白ローブの男がそう言い残すと、魔法陣と共に光が消えた。

「ライチュウ……」

そこには既に、ライチュウの姿も、白ローブの男の姿も無かった。

「ライチュウ…ライチュウ……」

身体に突き刺さるような重い雰囲気の中、ハイクだけが頻りにライチュウの名前を繰り返す。

この戦いは終わった。ハイク達の勝利のハズだ。しかし、果たしてこれを勝利と呼べるのだろうか？

研究所から姿を消したポケモンが、生きている事は分かった。だが、既に彼はハイクの知っているポケモンではなかった。

ハイクとの絆を奪われ、混沌とした苦しみの中で殺戮を繰り返す、獣と化してしまっていた。

「うわあああああああ！！！」

ついにハイクは感情を抑えきれなくなり、叫んだ。叫べば少しは哀しみを紛らわせると思った。だが、叫んでも叫んでも哀しみは一向に晴れない。ただ、空を響かせるだけ……。

ジユカインもヒノアラシも、そんなハイクにかける言葉を見つめる事が出来ず、茫然と立ちすくんでいた。

息が続かなくなり、ハイクの叫びはどんどん小さくなる。……やがて、完全に消えた。

「うぐう……………」

その後、ハイクは座り込んでしまった。そして、自らの拳で力一杯 地面を殴った。

そんな事をして、何も変わらない。分かっている……。分かっていてのだけれども、今は少しでも哀しみを紛らわせたかった。

叩きつけられた拳に自然と力が入る。

ハイクの頬を伝っていた熱いものが、その拳にこぼれ落ちていた。

哀しみと苦しみと……（後書き）

気がついたら小説の執筆作業にえらく時間を費やしました……。

実は僕、そろそろ学校で定期テストがあるんですよ。  
と、いう訳で一週間ほど執筆作業が出来ません（汗）

テストが終わったら、すぐに執筆作業を再開するつもりなので、  
どうかしばらくお待ち下さい。――<

## 淀んだ空（前書き）

皆さんに重要なお知らせがあります。

僕の小説、ポケモンに名前をつけてましたよね？実は、あれのせいで色々とありまして……。あ、でもそんな大したことでは無いんですよ。

その為、急きょポケモンの名前は無し、という事になってしまいました。

後先考えず、名前をつけてしまった僕の責任です。申し訳ありません。

でも読者の皆さんが混乱してしまうといけないので、ここで一度ハイクの手持ちを確認しておきたいと思います。

現在の手持ち

- ・ジュカイン
- ・ヒノアラシ
- ・ラプラス

元手持ち（登場済みのみ）

- ・ライチュウ

お騒がせして、本当にすいませんでした。

## 淀んだ空

今日のキンセツシティは、朝から騒がしかった。

昨日以上に多い人影や、何台もの車。しかし、賑わっている、とはまた別の騒がしさだった。これから何か大きなイベントがある、という訳ではなさそうだ。

ホウエン地方に異変が起きてから、今日で三日目。リーグによる、ホウエン地方の全面的な調査が始まったのだ。

あちこちで本来ホウエン地方には生息していないはずのポケモンが凶暴化し、人々を襲っている中、当初リーグは、この異変の原因は新種のウイルスだとか、寄生虫によるものだと考えていた。

その為、多くのポケモンが混入するであろう育て屋のポケモン達を別の場所に隔離するなどの対処をしていたのだが、現在は、ウイルスだとかそういった類い<sup>たく</sup>の物が原因ではないと断定している。

では、一体何が原因なのか？現在はそれを調査している訳だ。

無論、キンセツシティも調査の対象外ではなく、今日はこうして朝から調査が開始されているのだ。

そんな大通りの手前の通り。比較的 人が少なめの通りにあるベ  
ンチに、ハイクは座っていた。

ジユカインとラプラスは、既にポケモンセンターで傷の手当てを  
受け、今は完全に回復している。

ハイクの視界はやや斜め下を向いているように見えるが、何かを

見ている訳ではない。突きつけられた辛い事実に関心共に耐えられず、脱力しているのだ。

その少年の俯いた顔の瞳は、光を失っていた。夢と希望と言う名の光を失ってしまった、死んだ魚のような眼だった。

「……………」

ハイクには既に、声を出す元気も、ため息をつく気力さえも残されてなかった。

真夜中でのライチュウとの戦い。あの戦いは不思議と、周囲の人々には知れて無かった。

夜遅い時間、と言う事もあるだろうが、あの時はジムの全てのシヤッターが閉まっていたため、外部に音が漏れにくかった、と言う事もあるだろう。

あの戦いで、ジムの一部が損傷したりしたのだが、それも気づかれなかったようだ。

ポケモンジムは、元々バトルをするための場所だ。

数多のバトルによって、できたジムの損傷と、たった一回のバトルで、できた損傷とでは、正に桁が違う。

あの戦いの痕跡は、殆ど残らなかったと言えるだろう。

そんな事もあり、あの戦いを知っているのはハイクとその手持ちのポケモン、そしてあの白ローブの男だけ、と言う事になる。

「あ、いた……。ハイク君！」

朝早くからしばらくそのベンチに座っていたハイクに、誰かが声をかけてきた。

その声は、ハイクには聞き覚えのある、女性の声だった。重い頭



を無理矢理動かし、ハイクはチラリと声の主の顔を確認する。

赤いパーカーに、栗色の長髪。色白な肌に、黒い瞳。

間違いない。ハル力だった。

「ハル力さん……」

「もうっ……。一体どこ行ってたの？急にいなくなっちゃうんだから……。心配したのよ？」

少し怒っているような、でも安心したような口調で、ハル力は言った。

ハイクはあの戦い後、重い足取りでポケモンセンターに戻った。もう一度布団に入り、眠ろうとしたのだが、結局 殆ど眠れなかった。

静かな部屋で眠る事に集中しようとすると、心の中では思っただけなのに、色々な思いが次々と溢れてくるのだ。

ライチュウはどうなったんだろう、とか、他の皆もあんな風になっちゃっているんじゃないか、とか……。

気がつくと、太陽が昇り始めていた。

これ以上は眠れそうに無いので、ハイクは私服に着替え、ハル力には何も言わずに出て行ってしまったのだ。

「……すみません」

ハイクは、弱々しくそう謝った。

明らかに何時もと違うハイクに、ハル力はすぐに気づいた。

「どうしたの？元氣ないみたいだけど……。何かあったの？」

「……………」

ハイクは答えない。それどころか、より一層 元氣をなくしてしまっているように見える。

聞かない方が良かったかな……。？と内心ハル力は思い、ハイク君の元氣が戻る方法は……。などと考えていた。

そして何か閃いたような顔をした後、ハル力はハイクに言った。

「そんなんじゃ、私の恋人は務まらないよ……。？」

「俺はハル力さんの恋人でも何でもありません。ただの知り合い、というだけです」

ハル力は、ハイクに元氣を出させるため、お得意の冗談攻撃を仕掛けるのだが、ハイクはあっさりとそれをかわした。

「え……。？」

あまりにきつぱりとそう言われたので、思わずハル力も動揺してしまう。

何時ものハイクなら、慌てて全否定するはずなのだが、今日は違う。

冷静になっている訳じゃない。ただ、何も考えてないだけ。いや、何も考えられないのだ。もっと強い、大きな気持ちがハイクを包んでしまっている。

周りの事が気にならなくなる程の、強い感情が……。

「（うーん……。今は冗談とか言わない方がいいかも……）」

ハルカは、心の中でそう呟いた。

このような場合、いくら他人が頑張っても、本人自身の気持ち揺らがないければ意味がない。つまり、完全に自分の世界に入ってしまった現在のハイクに対しては、そっとしてあげるのが一番なのだ。

「……ハルカさんは……」

長い沈黙の末、ようやくハイクの口が動いた。

「ん？……何？」

「……いえ、何でもありません……」

しかし、ハイクはまた自分で話を切ってしまった。

何を聞こうとしたのかは分からないが、ハルカに聞くべきではないと判断したのだろう。

別にハイクはハルカを信賴してない訳じゃない。ただ、聞きにくいのだ。

ハイクはハルカとは知り合いだが、あまり深い付き合いと言う訳ではない。それに、ハルカとは随分前から会っていなかったのだ。とても親しい中の相手には言える本音も、おいそれと話す事は出来ない。

「……それじゃ、俺そろそろ行こうと思います」

するとハイクは唐突にベンチから立ち上がり、ハルカにそう告げた。

ハルカは「え……？」と声を上げ、驚いた表情を浮かべていた。それもそのはず。それはあまりに唐突過ぎたのだ。

「……俺は早くNを見つけなきゃいけないんです。昨日も話した通り、Nらしき人を煙突山で見たって言う人がいます。……俺は煙突山に向かいます」

なんとなく想像はついていた言葉。しかしハルカは動揺を隠せず  
にいた。

「え……でも……！」

「ハルカさんは、これからどうするつもりですか？」

「え……？私……？私はカナズミシティ方面に行かないといけないから……。110番道路から回って行こうと思うけど……」

ハルカは、まだ少し戸惑いながらもそう言った。

110番道路は、ハイクが向かおうとしている煙突山とは正反対に位置する道路だ。つまり、ハイクとハルカはここでお別れと言う事になる。

「じゃあ、ここでお別れですね……」

相変わらず光を失ったままの瞳を向け、ハイクはそう言った。

そんな少年を見たハルカは、胸が痛んだ。

何があったのかは分からない。分からないが、ハイクがこんな風になってしまふとは、ただ事ではないだろう。

「短い間でしたが、お世話になりました」

頭を下げてそう言うハイクに、ハルカはかける言葉も見つからなかった。

自分ではハイクの力になる事は、もうできない。しかし、もつとハイクと親しい中である人ならば、力になれるかもしれない。

ハイクが言うには、レインもNを探す旅をしているらしい。共通の目的を持つ彼女とは、再び会う事があるだろう。

もし、そんな事があったならば、レインならばハイクの元気を取り戻せるかもしれない。

ハルカは何も言わず、歩き去っていくハイクの背中を見つめていた。

## 112番道路

『……いつまでそうしているつもりだ?』

今日の空は朝から淀んだ雲に覆われており、今にも雨が降ってきそうだった。

キンセツシティから111番道路へ行き、さらにそこを越えた所にある道路、112番道路に着いた時、モンスターボールの中からジユカインが声をかけてきた。

幸い、111番道路では一度もポケモンに襲われる事は無かった。そのため、ハイクは112番道路に着くまでの間、重い雰囲気のまま無言で歩いて来たのだ。

さすがのジユカインもそんなハイクを見ていられず、声をかけたのだ。

「……いつまでって……そんなの……分からないよ……」

ハイクは足を止め、ボールの中のジユカインに曖昧に答える。そしてそのまま、ハイクはまた俯いてしまった。

しばらくの沈黙。

その後、ジユカインがボールの中から勝手に飛び出した。

『あんたも……覚悟を決めた方がいい……。あんたの元手持ちであるライチュウがそうだったなら、他の連中も、あんな風に襲って来るかもしれない……』

そしてジュカインが、ハイクにそう言った。

「……………分かってるよ」

それに対し、ハイクはそう答えた。  
そんな事、言われるまでもない。

オダマキ博士の研究所から姿を消したポケモンは、全部で六匹。  
その中の一匹であるライチュウが、カナズミジムのシェイミのように、力に捕らわれ、凶暴化していたのだとしたら、ほかの五匹も同じような状態になっていてもおかしくない。そう考えてしまうのが、普通だろう。

なら、戦う時が来てしまうかもしれない。だとしたら、今の内に覚悟を決めておく、と言うジュカインの考えは妥当だろう。しかし、  
「けど……………怖いんだ……………。他のみんなもあんな風になってしまってるんじゃないかって思っている……………。自分でも知らない内に、それを否定しようとしちゃうんだ……………。他のみんなは大丈夫だ、あなっているのはライチュウだけだ、って……………」

ハイクは決められなかった。

淡い期待、妄想で自分に嘘をつき、勝手に納得していたのだ。

「どうして……………どうしてこんな事になっちゃったんだろう……………。あいつらに、罪は無い……………。なのにどうして、あんなに苦しまなくちゃいけないんだ……………」

俯いたまま、ハイクはこの朝で一番大きな声を上げる。

その声には、キンセツジムの時と同じような気持ちが込められていた。

『ハイク……さん……』

すると、今度はボールの中から、ヒノアラシとラプラスがほぼ同時に飛び出した。しかし、ハイクは全く動じない。相変わらずの表情で、俯いたままだ。

ヒノアラシは、心配そうな表情でハイクを見上げていた。

ハイクの気持ちは、痛いほど伝わってくる。それは、ラプラスもジユカインも感じているだろう。

大切な仲間だった人が、急に牙をむいて襲いかかって来る。それがどんなに辛い事か、平和な日々を過ごしていた頃には、想像も出来なかっただろう。

しかし、今は違う。

既にその平和な日々は崩れ、いつ、誰が、どうなっても、おかしくない状況にまでなってしまった。

『ハイク、貴方の気持ちは私にもよく分かります。……私も、もし急にジユカインが牙をむいて襲いかかって来たとしたら、それはシヨックだと思います……』

ラプラスがハイクにそう言った。

『しかし、時に戦わなければいけない事も、あるのですよ？……仲間間の……命を……奪わなければならぬ事も……しかし……』



そこで、ラプラスは話すのを止めてしまった。今は、それ以上の事は話すべきではないのだ。

仲間の命を奪う。その言葉が出た時は、ハイクも少し反応した。反感は、抱いていたのだろう。だが、ハイクはなにも言わなかった。

……もはや、諦めているのだ。

ライチュウ達は、もう救えない。戦って……殺さなければならぬ。そう、思ってしまった……。。

『（しかし、方法は他にもある。……でも、今の彼にはそれを成し遂げる事は出来ない……。すべてを諦めてしまっている、今の彼には……。彼自身が、それに気づかなければならない……。けど、彼の心を動かす程の、大きな存在があれば……。もしかしたら……。』

淀んだ雲に覆われた空。

それは今のハイクの気持ち、そのまま映し出しているかのようにだった。

淀んだ空（後書き）

今回から第5章です。

感想、評価等 楽しみにしています。

another memory - 流星の滝：？ - (前書き)

いや、ずっとハイクsideと言うのよりも、別のキャラの視点も欲しいですね？

と、いう訳で、レインsideスタートです！

ちなみに時間は、第3章でハイクと別れた直後です。

それでは、どうぞ！

ラプラスを仲間にしたハイクと115番道路で別れてから、少し経った。

一面に広がる海のすぐ横の道を、レインは鼻歌交じりで歩いていった。

時折、海の方から塩の匂いのする風が、ピューと音を立てて吹いてくる。

今は冬であるため、その冷たい風は少々忌々しいが、夏であつたなら塩の良い香りのする心地よい風、と捉える事が出来るだろう。

海の近くであるためなのか、115番道路はかなり寒い。

コートなどで隠している部分は良いが、肌が露出している顔などの部分は、かなり冷えてしまっている。普通なら、一刻も早く暖を取りたいと思うのだろうが、鼻歌交じりで歩くレインを見る限り、そんな事はあまり気にして無いようだ。

平均よりはやや呑気、という事は彼女は自覚が無い。と言うより、自覚が無いから呑気、と言つべきか……。

現在のレインの目的地は、一応ハジツゲタウンだ。そこに行くには、このまま115番道路を進めばいい訳だが、途中で通らなければいけない場所が、一つ。

「あ、見えてきた……」

レインの眼前には、大きな岩山があった。

全体的に白っぽい岩で、できているようだが、その自然の産物には人の手がかけてられているようで、進み易いように整備されていた。そして、その岩山に開いている洞窟の入口のような物。その横にチョコンと立てられている看板には、【流星の滝】と書かれていた。

そう、ここは流星の滝の入口。

ハジツゲタウンに徒歩で向かうためには、必ず通らなければならない場所だった。

「うん。ここを抜ければ、ハジツゲタウンは目の前だね」

流星の滝を抜ければ、ハジツゲタウンはすぐそこだ。レインも思わず声を出してしまう。

太陽は、ちょうど真上辺りにあるので、今は正午くらいだろう。この調子なら、夕方までには着きそうだ。

レインは相変わらずの軽い足取りで、流星の滝へと入って行った。

## 流星の滝

流星の滝は、神秘的な雰囲気にも包まれた、不思議な場所だった。

クリーム色の砂に、クリーム色の岩。辺り一面クリーム色だ。

入口は洞窟のような物に見えたが、中はかなり明るい。それもそのはず、この洞窟の天井には大きな穴が開いており、そこから太陽の光が漏れているのだ。

お陰で、視界に不自由は無く、スイスイ進めそうだ。

洞窟に入った瞬間、レインの耳に、ゴォォと轟音が飛び込んで来た。その音の正体は無論、流星の滝の流れる音だった。

流星の滝は、ハウエン地方の中でも最も有名な絶景スポットの一つだ。

その神秘的な姿は、見る者すべてを魅了する。この滝を見るために、わざわざハウエンまで赴く人もいる程だ。

「うーん。ここも変わってないなあ……」

伸びをしながら、レインはそう言った。

流星の滝には、もう随分前から来ていなかったが、レインの記憶が正しければ前 来た時と内部構造はほとんど変わっていない。

「ん……？」

しかし、滝の音の他に何か別の物の音が、レインの耳に飛び込んできた。

「何……だろう……？話し声……？」

ゴォオと言う音の他に、ぼそぼそと明らかに誰かが話しているような音が聞こえた。

観光客か何かかな？と思いつつも、声のする方へ向かってみる。そして、声の主と思われる人物が目に入った時、レインは驚愕した。

「っ！？あの人って……」

レインは思わず、近くの岩陰に身を潜めてしまう。心臓の鼓動の高まりを覚えつつも、恐る恐る岩陰から声の主を覗き込む。

そこには、二人の人物が居た。

一人は、何かの研究員だろうか？白衣を着ており、黒髪を短く綺麗に揃えた男だった。

だが、肝心なのはもう一人の方だ。

レインは、そいつを知っている。見たことがある。真紅のローブに身を包み、フードを深くかぶって顔を隠している人物だった。そう、カナズミジムで出会った、あの紅<sup>あか</sup>ローブの人物だったのだ。

「あの人……カナズミジムの時の……。でも、一体何を話しているの……？」

ボソリとそう呟きながらも、レインは二人の会話の内容を探るべく、耳を傾けた。すると、こんな内容が聞き取れた。

「……で、調整は完璧です。これで長時間、石の力を抑え込む事が出来るでしょう」

白衣の男がそう言うと、紅ローブの人物は手に持っていた黒いモンスターボールのような物をまじまじと眺めた。

「あ……………」

そのボールを見た瞬間、レインは思わずそんな声を出してしまった。なぜなら、そのボールがカナズミジムで茶色のローブの人物が、異常な力のナットレイを入れていたボールにそっくりだったからだ。幸い、あちらには気づかれなかったみたいだが、不用意に声を出すのは、慎んだ方が良さそうだ。

二人は話を続けた。

「これにより、わざわざヘルドールをお使いにならなくとも、人の力だけでポケモンを操る事が出来ます」

白衣の男がそう言うと、今度は紅ローブの人物が口を開いた。

「…………なるほど。これで従来のボールより長時間 石の力を抑え込み、ポケモンの暴走を止める事が出来る、と……。て、言う事は、あなたが言いたいのはこれ以上 召喚陣を使うな、という事ね…………」

「おお……。流石、お察しが早い」

紅ローブの人物の声を聞いた時、レインはある事に引っかけた。



「（ん……？女の人……？）」

レインは、心の中でそう考えていた。声の質から考えるに、男性の声とは思えなかったのだ。

「召喚陣は莫大なエネルギーを使いますので、どうかご理解を……」

白衣の男は、申し訳なさそうに紅ローブの人物へそう言った。

二人のこれまでの駆け引きから察するに、白衣の人物の方が位が下なのだろう。

「けど、グレイはもうキンセツシティに向かったみたいだけど？彼にはまだ伝えてないでしょ？」

「ご心配なく。召喚陣は、あと一回 使用が許可されてますから……」

紅ローブの人物の質問に対し、白衣の男はニヤニヤしながらそう答えた。

「（へ……？グレイ……？グレイって、誰の事……？）」

二人の会話を聞いている内に、レインの頭は段々とこんがらがってきた。それもそのはず、二人の会話の中には、聞き慣れない言葉がてんこ盛りだったからだ。

グレイと言う人物名もそうだし、ヘルドールだとか、召喚陣だとか言われても、レインからして見れば何の事だかさっぱりだ。

そんな事を思っている少女に盗み聞きされているとは露知らず、

二人はまた話を進める。

「……でも、召喚陣を使わないとなると、例のポケモン達はどうするつもり？ あのポケモン達の力は、並みのポケモンとは桁が違う……。力を抑えるにしても、限界があるんじゃないの……。？ もし、人の手で連れて行く最中、暴走なんかしたら……。一溜りもないけど……。？」

なんとなく心配そうに紅ローブの人物が尋ねるが、白衣の男は相変わらずの緩い表情を崩さぬまま、

「その点も、ご心配なく。既に検証済みです……。少なくとも、五時間以上は力を抑えていられるでしょう」

と、答えた。

例のポケモン達、と言う所に引っかけたが、おそらく、並みのポケモンとは桁が違う力を持つポケモンとやらでまた何かを企んでいるに違いない。

それなら、今ここで止めるべきではないだろうか？

レインの手持ちには、十分な戦力が揃っている。相手は二人だが、力を合わせれば何とかなる……。はず。けど、上手く出来るだろうか？

躊躇はしてられない。が、飛び出すにしても心の準備が出来てない。

レインがまごまごしている内にも、まだ二人の会話は終わらない。

「まあ、あのハウエンリーグチャンピオンのポケモンです。用心するのも無理ないでしょう」

「チャンピオン!？」

白衣の男の一言を聞いた瞬間、レインは驚きのあまり声を上げてしまった。それほど大きな声では無かったが、驚いた拍子にレインは大きく動いてしまったのだ。そのため、レインの足が岩に当り、ゴンツと鈍い音が響いてしまった。

「っ!?!そこに居るのは誰だ!?!」

真っ先に白衣の男がそれに気づき、声を上げる。

レインは「あちゃゝ……」と言うような気持ちになり、渋々岩陰から出てきた。

「あなたは……」

レインの姿を見た紅ローブの人物が、そう呟いた。その反応を見ても分かるように、紅ローブの人物はレインの事を覚えているようだ。

「その……ボールの中に……」

どうせ見つかったのだ。レインは言いたい事を言う事にした。

「そのボールの中に、ハイクのポケモンが入っているんですね……」

……？」

「……………」

白衣の男は「何……？」と反応を見せていたが、紅ローブの人物は何も言わない。

それでも構わない。レインは話を続けた。

「お願いします！ そのポケモンをハイクに返して下さい！ 今ハイクは、必死になってその子達を探しているんです！ だから……」

「残念だがな、お嬢さん。俺達は、その頼みを聞く訳にはいかないんだよ……」

だがしかし、その叫びはあっさりと打ち砕かれた。白衣の男は、子供に話す時のような口調でレインにそう言い返した。

そして一歩一歩レインに歩み寄りながら、懐からモンスターボールを取り出す。

「話を聞かれてしまったんだ。ここから君を生きて返す訳には……  
……いかないなあ……………」

そう言い終わった後、白衣の男は不気味にニヤリと笑った。

「う……………私は……………まだ死にません！ サンダース、お願い！」

レインは咄嗟に、ボールからサンダースをくり出した。  
元気な鳴き声を上げ、サンダースがボールから飛び出す。

「ほう……………態々戦いに来るとは……………面白い！」

かなり自信があるのか、白衣の男はニヤついた表情を変えずに、モンスターボールを投げた。

中から出てきたのは、円盤状の身体に、アンテナのような突起物。そしてU字型の磁石のような物が付いており、フワフワと空中に浮かんでいるポケモン、ジバコイルだった。

だが、どんなポケモンが出てきても、レインは屈しない。このままでは、ハイクの大切な仲間<sup>ポケモン</sup>が、カナズミジムの時のシェイミのように悪用されてしまう。

それだけは、是が非でも避けたい。

レインは、ハイクが悲しむ顔なんて見たくないのだ。

辺り一面クリーム色の洞窟の中。

レインと彼女のポケモン達の、罪の無い人たちの笑顔を守るための戦いが始まった。

a n o t h e r   m e m o r y   - 流星の滝：？ - （後書き）

あれ？サンダーズの鳴き声って……どんな感じでしたっけ？

誤字、脱字があるかもしれないので、見つけたらどうかご指摘下さい。お願いします。

a n o t h e r   m e m o r y   - 流星の滝：？ - （前書き）

更新遅れて、申し訳ありません。

知っている方もいると思いますが、実は最近、新連載を始めたんですよね。

「ポケットモンスター トワイライト」です。ぜひ、ご覧になって下さい。

それでは、本編どうぞ！

流星の滝では、何度か激しい発光が繰り返されていた。

現在 戦っているレインのサンダースと、白衣の男のジバコイルは、主に電気タイプの技が主力攻撃となっている。そのため、二匹どちらかの技が発動する度に、電気タイプ特有の光が放たれる訳だ。

「フフ……。中々やるな、お嬢さん」

白衣の男が、関心するかの様にレインに言った。

電気、鋼タイプのジバコイルにとって、電気タイプのサンダースは、決して相性の良い相手とは言えない。だが、今の白衣の男の余裕な口調からも分かる通り、彼はかなりポケモンバトルに自信がある様だ。

これまでのレインの戦い方は、特殊攻撃を受けた際、それを倍返しするジバコイルの技“ミラーコート”を警戒してか、“雷の牙”などの打撃技で攻めると言う戦法を取っていた。

しかし、ジバコイルのその頑丈な身体相手では、打撃技では大きなダメージは期待できない。況してや、電気タイプのポケモンに電気タイプの技で攻めるなど愚の骨頂。

ジバコイルは、ほとんどダメージを受けて無かった。

だが、サンダースが一方的にやられているかと言うと、そうではない。

レインの適格な指示により、ジバコイルの技のほとんどを、ひらひらりとかわしているのだ。おそらく、白衣の男が関心しているのはそこだろう。



「だが、相手が悪かったな。流石のお嬢さんでも、この俺が相手じゃ……。勝率はほとんどゼロだろう」

随分と高飛車な台詞に、レインは少しムツとしたが、言い返しはしなかった。

基本的に白衣の男ジバコイルは、“スパーク”などと言った相手に突進する形の技で攻めてくる。サンダースは特殊攻撃より打撃攻撃に弱いので、妥当な判断と言えるだろう。

しかし、だ。電気タイプのサンダースにとって、“スパーク”なんかはそれほど驚異的な技ではない。むしろ、あっちから接近してくれるので、素早く回避した後すぐに反撃、と言った戦法がとれるので好都合だ。

だが、レインは相変わらずサンダースに“雷の牙”を使うよう指示し続けている。

大きなダメージを期待している訳ではない。かと言って手数で勝負している訳でもない。

「（何だ……？こいつ、本当に俺に勝つ気はあるのか……？）」

白衣の男は、そこが引つかかっていた。

白衣の男のジバコイルは、残念ながら“ミラーコート”以外の使える技は、すべて電気タイプか鋼タイプだ。タイプだけ見れば、相手に与えられるダメージ量は少ない。ならば、少しでも大きなダメージを期待できる技か、連続してダメージを与えられる技で攻めるまでだ。

しかし、彼女は違う。

大きなダメージどころか、相手を倒す事すら考えて無い。本当に

勝機が無いので、ほとんど諦めているのか？

……いや、違う。

「……………やっぱり」

それまで技名以外の言葉を口にして無かったレインが、そこでボソリと呟いた。

今まで技は、攻撃ですら無い。ただ、読んでいたのだ。  
白衣の男のジバコイル。その攻撃パターンや、自分とのレベルの差を……。

こちらから攻撃を仕掛けず、まず相手の動きを見る。  
その合間に、隙があれば少し攻めてみる。それにより、相手がどのような反応を見せるか観察する。これで、どの程度ダメージを与えたか大抵判断出来る。

ジバコイルは、ほとんどダメージを受けてない様に見えるが、完全にゼロでは無い。多少のダメージは、受けているのだ。

そしてジバコイルの攻撃パターン。  
ただ一直線に突進を繰り返すだけ。多少軌道の調整はしているものの、やはりきこちない。

それらを引つ括めて、相手のレベルを判断するのだ。  
あのジバコイルは、防御力に特化しているものの、バトルの経験は多くない。つまり、レベルは高くない。

これにより、レインの敗北は揺らぐ物となった。

「あの……、あなたさっき、私の勝率はほとんどゼロ、と言いましたよね？」

レインは少し肩の力を抜き、笑みを零しながらも白衣の男にそう言った。

「……だったら、何だ？」

既に勝った気にいる白衣の男にとって、何故レインがこんな状況なのに笑っていられるのか、疑問符が浮かんでいた。

「なら、その言葉……、そっくりそのままお返ししますよ？」

そんな白衣の男に向かって、レインは軽い表情のまま、そう言い放った。

レインの頭の中では、既に勝利の方程式は出来上がっている。サンドースも殆ど本気を出していないはずだから、ここからが本調子だ。

そう、これがレインの本当の戦い方。相手を観察し、レベルを見極めてから、攻めに入るのだ。

思えば、ハイクもこれと似たような戦い方をしていた。

しかし、彼にはレインとは決定的に違う所が一つ。それはレベルを見極める際、相手のポケモンを観察すると言う動作を完全に省いているのだ。

彼の場合、ただポケモンを見つめるだけ。ただそれだけで、自分

と相手のポケモンとのレベルの差が、分かってしまうのだ。

今思い返してみれば、ハイクはあの頃、既にポケモンと心を通わす能力を開花させていたのかも知れない。そして、今はその最高潮。完全にポケモンの気持ちばかり、会話までも出来てしまう。

それは、天性の才能。常人には真似する事の出来ない、特別な力。

その力が、リーグ優勝のきっかけの一つだったのかも知れない。常人より多く、ポケモンと心を通わし、ポケモンの気持ちをしっかりと理解出来る彼だからこそ、ポケモンとの連携も群を抜いていたのだ。

「チィ……。小娘め……。ちょっと手加減したらいい気になりやがって……。！」

レインの余裕の一言を聞いた白衣の男は、それにより一気に苛立ちを募らせた。

白衣の男は、自分ではかなり手加減しているつもりだ。子供相手にむきになるなど、大人げないと思ったのだ。

だが、あつちがあんな態度なら、容赦はしない。もう、遠慮もしない。徹底的に叩き潰してやる。

「ふん……。あなた、かなりバトルに自信があるみたいね？」

その姿を見ていた紅ローブの人物が、白衣の男に声をかけた。

「ええ、それはもう！あんな小娘、すぐにでも始末できますよ？  
そうですね……。一分。一分も経てば、このバトルは終わっています」

紅ローブの人物の言葉に対し、白衣の男は自身満々でそう答えた。  
それを聞いた紅ローブの人物は、

「へえ……。それは楽しみ」

と緩い口調で答えた。

その口調から察するし、彼女はあまり期待してないだろう。だが、  
白衣の男は、そんなに気にして無かった。

期待されてないのなら、今ここで力を見せつけてやれば良い。

白衣の男は、そう思っていた。

「そう言う訳だ。悪いがさつさと終わらせてもらっぞ」

白衣の男は向き直り、レインにそう言った。

「はい。ぜひ、そうして下さい」

そんな白衣の男に対し、レインはニツコリと笑いながらも、そう  
答えた。

これにより、白衣の男の怒りがさらに高まったのは、言うまでも  
ないだろう。

「調子に乗るなよ小娘えええ!!」

白衣の男は、レインを怒鳴りつけた。

かなりの迫力だったが、白衣の男がこのような行動をとる事は大  
体予想が出来たので、レインはあまり驚かなかった。それよりか、  
あまりに予想通りだったので、そっちの方が驚いているくらいだ。

「ジバコイル！ “マグネットボム” で粉碎しろ！」

そして、白衣の男がジバコイルに、次の技の指示をした。

それを聞いたジバコイルは、素早く自身のU字型の磁石の様なもので、素早く円を描いた。するとそこに、黒っぽい色の球体が見える内に生成されていく。

そして、ある程度の大きさになったそれを、サンダースに向けて飛ばした。

その球体は、空中を移動している内に、少しずつだが速度を上げていく。

「サンダース、避けて！」

しかしサンダースは、水のようにしなやかな動きで上手く身体を捻らせ、その攻撃をかわした。

速度が上がっていると言っても、あまり速い速度ではないのだ。

「無駄だ！」

しかし、サンダースの横を通り抜け、不発に終わったかと思った“マグネットボム” が、急に軌道を変えた。それはあまりにも不自然に、ほとんど逆の軌道に、だ。

だが、サンダースは、ある程度それを予想してたかの様に動き、またもや攻撃を避けた。しかし、また“マグネットボム” は軌道を変え……。

「いくら避けても無駄だ！どこまでも追いつけるぞ！」

白衣の男が、勝ち誇った様な笑みを浮かべ、そう言った。

そう、これが“マグネットボム”と言う技だ。どこまでも追いか  
け、目標の物を捕らえるまで止まらない。

「あ、そうでしたね。それじゃあサンダース、“10万ボルト”で  
撃ち落として」

それを聞いたレインが、何かを思い出したかのようにポンツと手  
を叩き、サンダースに技の指示をした。

ビリビリと身体が発光したかと思うと、それを一気に解放し、雷  
として飛ばした。

サンダースの10万ボルトは上手く“マグネットボム”に直撃し、  
それにより爆発が起きた。

「くそ……、面倒くさい奴め……！」

白衣の男は爆風を浴び、思わず片腕で顔を覆いつつも、そう呟い  
た。

ゴォオという音と共に、砂埃が舞い上がる。勿論、サンダースも  
ジバコイルもダメージを受けておらず、状況は相変わらずだ。

「なら、これならどうだ？ジバコイル、もう一度“マグネットボム  
”だ」

だが結局、白衣の男は同じ技の使用を指示した。

レインが、なんだあ……。と思っていると、

「……ただし、連続でな」

と、白衣の男が付け加えた。

ジバコイルが先ほどと同じ様に球体を何個も作り出し、それを一気に連続で飛ばした。

その球体は、ほとんど同じ軌道を描き、サンダースに迫る。

「サンダース、打ち落として！」

サンダースは、やはり10万ボルトを上手く使い、次々にそれを打ち落とした。

“マグネットボム”は、その名の通り爆弾。少しの刺激を与える度に、爆発が起こる。

そして、今回は数がかなり多い。そのため、爆発の大きさもかなりの物だった。

さっきよりも高く、大きく砂埃が舞う。

「掛かったな！」

すべての“マグネットボム”を打ち落とし、ホッとしたレインだったが、白衣の男は高々と笑った。

まるで、こうなるのを予想してたかのように……。

「えっ………？」



呆氣にとられたレインだったが、砂埃が治まると、白衣の男が笑っていた意味が分かった。

そこには、何かの技を最大にまで溜めたジバコイルがいた。

「これで最後だ！ジバコイル、“電磁砲”！」

ジバコイルは、視界が悪くなっている隙に、“電磁砲”のチャージをしたのだ。そして、既に技の準備は万全になっている。

ジバコイルは、自ら溜めたその電気の塊を、サンダースを狙って発射した。

物凄い轟音と共に、その大砲の様に飛ばされた電気の塊が、サンダースに迫る。

次の瞬間、激しい光が起きた。

“電磁砲”が、炸裂したのだ。

「ハハハハ！終わりだな、小娘！」

勝った。

このバトルに勝ったんだ。

轟音に負けないくらいの大声で、白衣の男は、吐き捨てる様になう言った。

「……はい。もう終わりです」

しかし、レインはまだ余裕そうな口調でそう言った。

こいつ、何を言っている？と白衣の男は思っていた。砂埃の所為<sup>せい</sup>であの小娘の表情は見えないが、おそらく彼女は開き直っているのだろう。いや、開き直っているはずだ。だって、あいつは負けたのだから。

そう思った。

しかし次の瞬間、白衣の男は自分の眼と耳を、疑った。

「……………穴を掘る」

少女のそう言う声が聞こえたかと思うと、急に　ゴォン！と大きな音が響き渡った。

一瞬だった。

訳の分からぬまま、ジバコイルは吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「なっ……………！？」

白衣の男がジバコイルの様子を確認するが、既に目を回していた。

「一撃……………だと……………！？」

信じられなかった。

自分は負けた……………。負けたんだ……………。

まさかこんな小娘に、こんな無様な負け方をするとは思っていなかった。

頭の中の整理が、追いつかない。

「サンダースとジバコイルには、レベルの差がありました。それに、ジバコイルは電気、鋼タイプですので、地面タイプの技に滅法弱いんですよね」

砂埃が治まった後、レインはゆっくりと白衣の男に歩み寄り、最後にニツコリと笑みを浮かべた。

白衣の男は、この時初めて、自分とはんでもない奴を相手にしていたんだと悟った。

a n o t h e r   m e m o r y   - 流星の滝：？ - （後書き）

マグネットボムは、どんな様な技がよく分からなかったので、描写はかなり適当ですね。すいません……。

次回は、ひょっとしたら短いかも？

a n o t h e r m e m o r y - 流星の滝：？ - (前書き)

思ったより長く書けました。

今回で、レイン side は最後です。

それでは、どうぞ！

和やかに微笑むレインを前に、白衣の男は啞然としていた。

信じられない。今の白衣の男の気持ちは、こうだ。

こんな名前も知らない子供にバトルで負けるなんて、想像もして無かったのだ。

「な、何故だ……。こんな事……。！」

悔しさのあまり、握る拳に力が入る。

こんな事、あり得ない。白衣の男は、その言葉を口にしようとしたが、それ以上に強い感情を感じており、口が動かなかった。

このままでは、知られて欲しく無いことが知られてしまう。

「……あなた、さっきバトルに自信がある、みたいな事 言ってたよね？」

いや、もうバレている。

バトルを見ていた紅ローブの人物が、ため息混じりに白衣の男に声をかけてきた。

「え、ええ。そりゃ勿論！」

白衣の男は、最後の抵抗と言わんばかりに、頭の中に浮かび上がってきた言葉を、なんとか声にした。

「……嘘でしょ」

しかし白衣の男の抵抗も虚しく、紅ローブの人物は、キツパリとそう言った。

こうなる事は、少し予想出来ていたのかもしれない。だが、白衣の男のプライドが許さなかった。

少しでも認めて貰いたい。少しでも良い所を見せたい。そんな小さな欲が、彼を動かしたのだろう。

しかし、予想外の強者の登場により、期待していた結果と真逆の事態を招いてしまった。

「う、嘘……？ な、何を仰いますか……」

無駄な抵抗。この言葉がそっくり当てはまる状況だ。今更 誤魔化そうなど、愚か以外の何物でもない。

分かっているのだけれども、つつい口走ってしまう。

「サンダースの特性、知ってる？」

「と、特性……でありますか……？」

紅ローブの人物が投げかけた質問に対し、白衣の男は答えられない。言葉が詰まってしまう。

彼の背中には、既に嫌な汗でぐっしょりだった。

「……サンダースの特性は、普通“蓄電”。電気タイプの技を受けた時、ダメージを受けないばかりか、逆に吸収してしまう特性……。でも、見た感じあの子のサンダースは“蓄電”ではなく“逃げ足”だったみたいね。だけど、普通サンダース相手に電気タイプの技は使わないよね……？」

「……………」

ああ、もう……。出来れば逃げ出したい。

白衣の男は、心の中でそれを強く望んでいた。

特性の事を、何も考えて無かった。本気で忘れていた。“電磁砲”を放った時、歓喜の笑みを浮かべた自分は何だったんだ。思い出すだけで恥ずかしい。屈辱だ。

愚の骨頂。それは自分の方じゃないか。

「い、いやしかし……。確かに、と、と、特性の事は……。その、あれでしたが……」

まだ抵抗する。

いい加減、認めた方が良いのではないだろうか。自分のポケモンの知識は、ほぼ皆無に等しいという事を。

「それでも！ あんな攻撃でジバコイルが一撃でやられるとは思えません！ たしかに、効果は抜群でしたが……。あんな……。名も知れない小娘のポケモンに……」

段々と声が小さくなったような気がするが、まあ、そこは気にしないでしょう。

白衣の男は、頭に浮かんだ言い訳を、片っ端から口に出している。ほとんど無心でだ。そのため、あらぬ事を口走っているかもしれない。

その事が結果的に、さらに自分を悪い状況に追い詰めてしまう事もある。



やはり、無駄な抵抗は止めた方が良いのかもしれない。

「あの子の名前は、レイン。聞いた事、ない？」

「レイン……？ き、聞いた事 ありませんなあ……」

ほとんど、諦めてしまっていたいる。

紅ローブの人物も、呆れ顔だ。

これにより、白衣の男の人物は、ポケモンバトルの事さえも良く知らない、という事が確定した。

「ホウエンリーグ。トレーナーなのに見てないの？ あの子は前回のリーグでベスト3入りを果たした、凄腕のトレーナーよ？」

「へ……？」

トレーナーなら、誰でも目標とする大会だろう。何年かに一回、この地方の中でポケモンリーグが存在する街、サイユウシティで開かれる大会。

例えば、出場権を手に入れる事が出来なかったとしても、大会の結果くらいはトレーナーなら気になるだろう。

それに、結果は大会翌日にテレビで放送されるはず……。しかも今回は、四天王と呼ばれる程の凄腕のトレーナーが、ハイクとレイン、二人の子供に全滅させられると言う大波乱が起きたのだから、人々には印象深い。

きちんと見ていれば覚えているはずだ。つまり、白衣の男は、それさえも見えてない事になる。

「べ、ベスト3……！ な、な、何故それほどのトレーナーが、こ

んな所に……！」

白衣の男は、驚きのあまり滑舌も悪くなっていた。それもそうだ。自分は気づかぬ内に、そんなトレーナーに対し高飛車な台詞を吐き捨て、愚弄していたのだから。

「お、俺如きが敵うはず……」

ヘナヘナと、力が抜けて行くのを感じていた。自分がした事を、ひどく後悔しているが、今更後悔しても、もう遅い。今は冬だと言うのに、なぜか背中だけは汗だくだった。

「た、確かに……俺は無能だ……。しかし……」

色々な事がバレてしまい、その所為か白衣の男の脈拍は速かったが、それでもノロノロと顔を上げた。

「ま、まだ終わりじゃない……。まだこの方がいる……。ククク……」

もう、自分のプライドとか、そんなのはどうでも良かった。だが、このままではいけない。この小娘を、生かしてはおけない。なら、自分よりも強いトレーナーに頼めばいい。

「あとは頼みますよ……ロサさん……」

白衣の男は、紅ローブの人物にそれだけを言い残すと、その場からそそくさと逃げ出した。

あまりにも恥ずかしくて、どうかしてしまいそうだった。いや、

もう既にどうかしているのかもしれない。

「あ………！」

白衣の男の逃げ足は、予想以上に速かった。そのため、レインはそんな声を上げただけで、見す見すと彼を逃がしてしまった。折角の情報源だったのに、だ。

しかし、いつまでもそんな事は気にしてられない。

情報を持っている人なら、ここにもいる。白衣の男が駄目なら、彼女から情報を聞き出せば良いだけだ。

「ロサさん………ですか」

レインは、ゆっくりと彼女の名前を口にした。それに対し、ピクリと反応を見せたが、そのローブの人物は無言のままだ。

フードを深く被っているため、はっきりとは分らないが、おそらく視線はレインの方を向いているだろう。

しかし、全く動かない。ポケモンすらも出そうともしない。こちらの様子を窺っているのだろうか？

長い沈黙の末、不振に思ったレインが、ついに口を開いた。

「どうしたんですか？ あなたは私を殺そうとしているはずじゃ…

…」

レインは、恐る恐る質問した。少しでも隙を見せた瞬間 殺される。そう思ったのだ。

しかし、次にロサが口にした言葉は、レインにとって思いがけない内容だった。

「私はあなたと戦う気はない」

「は……？」

何を言っているの？

レインが、まず初めに思ったのはそれだった。

戦う気はない、と言う事は、殺す気は無いと言う事なのか？ それでは、白衣の男とロサとは意思が違う事になる。

「あなたは元々、私達の計画に関わらなくても良いはずだった。けど、あのチャンピオンの傍にいた所為で、巻き込まれてしまった。ただ、それだけなのよ？ 私は、そんな子を殺す趣味はない。……悪い事は言わない。早く家に帰りなさい」

レインは、淡々たる口調で発せられるロサの言葉を、ただ静かに聞いていた。

ロサの言葉を聞く限り、レインをここから生かして帰してくれるようだ。普通に考えれば、そこは喜ぶ所だろう。

「何を言ってるんです……」

しかしレインは、喜ぶどころか、怒りを感じていた。

「ふざけないで下さい！ 私は関わらなくて良かったって……、それじゃあ、ハイクはどうなんです！ 関わるどころか被害にあってる！ 大切なポケモンを……奪われてるんですよ！ どうして……」

…、どうしてハイクがこんな目に遭わなくちゃいけないんですか！  
いや、ハイクだけじゃない……。ポケモン達だって……………」

「……………」

「ハイクが、チャンピオンだからですか！？ そんなの関係ありません！ ハイクとポケモン達が苦しむ理由なんて、どこにも無いんです！」

レインは関わらなくて良い。彼女の気に障ったのは、そこだった。自分だけ生き残って、自分だけ助かる。それがレインには耐えられなかった。

なぜ、ハイクだったのだろうか。なぜ、ハイクとポケモン達だけがあんな思いをしなければならなかったのだろうか。

ハイクは、レインの前では普通の表情を出していたが、本当は、とても辛かったはずだ。

正直 言って、ハイクは嘘が下手だ。

レインに心配をかけまいと思って、表向きでは笑っていたのだろうが、レインにとって、それが一番 辛かった。

隠してほしくない。辛かったら、辛いと言ってほしい。一人で抱え込むなんて、そんな事はしなくていい。いや、してほしくないのだ。

「急にポケモン達がいなくなって……、辛かったはずですよ！ もしかしたら、今も苦しんでるかもしれない……。だけど、もしハイクが苦しみに押し潰されそうになっても、私が何度だって支えます！」

関わる関わらないの問題じゃない。ただレインは、ハイクの心が傷ついたままでいてほしくないのだ。その為にも、一刻も早く真相

を確かめる。ハイクのポケモン達も、全員 助け出す。

「それが、仲間と言うものでしょう?」

高ぶった感情を抑えつつも、レインはロサに訴えかけた。

ロサがレインの言葉をどう受け止めるかは、分らない。

でも、少しだけ、少しだけいい。ロサの心が揺らいでくれたら、レインの気持ちを分かってくれたのなら、それで良かった。

レインの訴えを無言で聞いていたロサは、フウと息を吐いた後、

「あなた、本当にあのチャンピオンの事が好きなのね」

と、言った。

「えっ……?」

その言葉を聞いたレインは、少し固まってしまった。思いも寄らぬ事をストレートに言われたのだから、無理も無いだろう。

そんなレインにロサはゆっくりと歩み寄った。

「残念だけど、チャンピオンは多分もう手遅れよ。彼に目を付けられちゃ、無事ではられない」

「彼……?」

止まりかけた試行を必死に戻しながらも、レインはボソリとロサの台詞を繰り返した。

「ま、待って下さい! 手遅れって、どういう意味ですか!? 目

を付けられてるって、命を狙われているって事ですか!？」

予想外の情報に、レインは混乱していた。確かに、計画とやらにとつてハイクという存在は邪魔かもしれないが、既に消される算段がされていたのだろうか。

「……詳しい事は、言えない。聞かない方がいい。けど、このまま私達の計画に関与したのならば、あなたまでも狙われる可能性は、十分ある」

しかし、詳しい事は教えてくれなかった。  
それもそうだ。態々 敵に情報を漏らすような真似などしないだろう。

頭の整理が出来てないレインに対し、またロサが口を開く。

「警告は、した。 もし、あなたの心が、本当にチャンピオンを助ける事を望んでいるのならば、私は止めない。それを決めるのは、あなた自身……」

この時 初めて、ロサはしっかりとレインの目を見て、言葉を発した。

深く被ったローブから見え隠れする髪は薔薇（ばら）のように紅く、レインを見つめるその瞳もまた、紅かった。

「（あれ……？ この人の瞳……、何か違う……）」

ロサの瞳は、先ほどの白衣の男と比べると、何か違うものがあった。

白衣の男は、敵意をむき出しにした、邪悪な瞳だった。  
だが、彼女のは違う。どこか温かみがあり、その温かさを、優しく包んでくれるような、そんな瞳だった。

「（この人……ひょっとして……）」

そんな瞳で見つめられ、レインは完全に動きを失った。

レインの頭の中は、さらに混乱の度合を増した。

この人は、本当にこんな事を望んでいるのだろうか。敵であるはずのレインを逃がそうとし、あんな温かい瞳まで持っている。そんな人が、本当に、誰かを傷つける事を望んでいるのだろうか。

しばらくレインを見つめた後、ロサはそつと後ろを振り返り、そのまま立ち去ろうとした。

「あ……、あの！」

しかし、レインがそれを止めた。

レインが声をかけると、ロサは立ち止まる。

「ハイクのポケモンを使って、何をするつもりですか……？ さっきのボールの中に、入ってるんですよね……？」

しかし、ロサはまた口を閉じてしまった。

何かを拒んでいる。そんな感じだった。

「お願いします！ その子を返してください！ カナズミジムのシェイミみたいに、悪用するつもりなんですよね？ 本当は、あなただ



ってそんな事は望んでいないはずです！　だって……あなたのさっきの瞳は……」

「……その頼みは、聞けない」

レインはもう一度　頼み込んだ。さっきは白衣の男に邪魔されたが、今度は邪魔されない。

しかし、レインのその望みが、叶うことはなかった。

その言葉を最後に、ロサは白衣の男から手渡されたボールを投げた。

そして、中にいたポケモンが、出現する。狐のような姿をしており、美しい金色の体毛に包まれたその身体に、何本もの尻尾が生えているポケモンだった。

「この……ポケモンは……」

レインは、このポケモンに見覚えがあった。

キュウコンという名前のポケモンだとは、誰もが見ても分かるだろう。

そんな事ではない。レインは、なぜかなんとなく分かっていた。

このポケモンは、紛れもなくハイクの仲間であったポケモンだと言うことを。

さっきの会話を聞いていたからではない。ただ、そのポケモンを見た瞬間、ハイクが持っていたポケモンと、同じものを感じたのだ。

「“火炎放射”」

ロサが指示をすると、キュウコンの口から、大量の火炎が放射された。

その火炎は、まっすぐにレインに向かって、進んでいく。

「う……」

しかしその技がレインを捕らえるよりも先に、彼女の傍らにいたサンダースが“10万ボルト”を放ち、“火炎放射”を掻き消そうと試みた。

だが、二つの技がぶつかりと同時に、爆発が起きた。

激しい爆風により、レインは思わず顔を覆う。

「ロサ……さん……」

爆風が治まり、レインが顔を覆っていた腕を退けると、そこには既にロサの姿も、キュウコンの姿もなかった。

あまり有力な情報を得られず、もどかしさを感じながらも、なぜかモヤモヤとしているレインの心だけが、そこにあった。

a n o t h e r   m e m o r y   - 流星の滝：？ - （後書き）

白衣の男は、無能キャラにしてみました。ちょっと知識なさ過ぎでしたかねえ……。

次回からは、ようやくハイク視点に戻ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6307w/>

---

ポケットモンスター デスティニーエピソード1 ～憎しみを砕く絆～

2012年1月12日22時45分発行